

台渡里 22

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第79次） —



2011

水戸市教育委員会

台 渡 里 22

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第79次） —

2 0 1 1

水戸市教育委員会

ごあいさつ

台渡里官衙遺跡群は、那須茶臼岳を水源とする那珂川下流域右岸の台地上に位置する古代常陸国那賀郡の官衙跡・寺院跡です。県内でも最古級の寺院跡を含む広大な古代遺跡として県外からも多くの注目を集め、現在、その一部は国の史跡として指定され、恒久的な保存と継続的な活用に向けて検討を進めているところでございます。

周辺には国史跡「愛宕山古墳」をはじめ、堀遺跡、西原古墳群、渡里町遺跡など数多くの古代遺跡が立地しており、古くから政治・宗教・文化の中心地であったと考えられます。

歴史的文化遺産である文化財は、一度は破壊されると二度と原状に復すことができないため、現代を生きる私たちが大切に保存しながら、後世へと伝えていかなければならない貴重な財産ですが、都市化の様相が強まる中で、特に埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつあります。

本市においては、市民の生活安全・衛生とのバランスを考慮しつつ、文化財の意義や重要性を踏まえ、文化財保護法及び関係法令に基づいた保護保存に努めているところです。

このたび、当該遺跡内に宅地造成工事が計画されました個所の周辺におきましては、那賀郡の役所に税として集められた穀物等を収納しておく倉庫とみられる礎石建物跡や掘立柱建物跡をはじめ、7世紀後半に創建が開始された台渡里廃寺跡の造営集落を構成するとみられる竪穴建物跡群のほか、「郡厨」と記銘された古代の墨書土器等、貴重な遺構・遺物が確認されております。

今回の調査は、道路部分を対象とした限定された範囲ではあったものの、周辺の調査で確認されていた柵列の延長部分のほか、巨大な版築遺構や竪穴建物跡などが検出され、官衙や寺院に関連する遺構・遺物の広がりをつかえることができました。

ここに刊行する本書が、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いです。

終わりに、本調査に当たり多大な御理解と御協力をいただきました事業者様、並びに関係機関の皆様方に心から感謝を申し上げます。

平成 23 年 12 月

水戸市教育委員会
教育長 鯨岡 武

例 言

1. 本書は、宅地造成工事に伴う台渡里官衙遺跡（第79次調査）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、水戸市教育委員会指導のもと、株式会社東京航業研究所が実施した。
3. 調査概要及び調査組織は下記の通りである。
所在地 水戸市渡里町字前原 2867 番地
調査面積 288.9 m²
調査期間 平成 23 年 1 月 20 日～平成 23 年 2 月 5 日
調査指導 水戸市教育委員会（教育長 鯨岡 武）
調査担当 折原 覚（株式会社東京航業研究所）
調査参加者 石川 勉，加藤利男，小山司農夫，河原井俊一郎，鈴木俊一，高柳悦子，飛田邦夫
整理参加者 今井千恵，大橋正子，村山彩子
4. 本書は、川口・折原が分担して執筆し、川口の助言・指導に基づいて折原が編集を行った。
5. 出土遺物及び図面・写真などの記録類は、報告書刊行後一括して水戸市埋蔵文化財センターにて保管する。
6. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の方々・諸機関より御教示・御協力を賜った。記して深く謝意を表したい（敬称略・順不同）。
江藤隆博，斉藤弘道，田中 裕，土生朗治，長井光彦，東新建設株式会社，茨城県教育庁文化課

凡 例

1. 文中に掲載した実測図の縮尺は、原則として次の通りである。
全体図 1/200 遺構図 1/30～1/60 土器 1/3 土器拓影 1/3 瓦 1/3
石製品 1/3 鉄製品 1/3
2. 遺構実測図中のレベルは海拔高、方位は座標北を示す。
3. 写真図版は原則として土器類 1/3，瓦 1/3，石製品 1/3，鉄製品 1/3 とした。
4. 遺物番号は本文，挿図，写真図版と一致する。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
1-1 調査に至る経緯	1
1-2 発掘作業の経過	1
1-3 整理等作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
2-1 地理的環境	3
2-2 歴史的環境	6
2-3 台渡里官衙遺跡群における既往の調査	9
第3章 調査の方法と成果	14
3-1 調査の方法	14
3-2 基本土層	17
3-3 遺構	25
3-4 遺物	24
第4章 総括	52
引用・参考文献	55
写真図版	
報告書抄録	

挿図・表目次

第1図 台渡里官衙遺跡の位置	3	第13図 1号ピット列	24
第2図 台渡里官衙遺跡と周辺遺跡の位置	4	第14図 出土遺物(1)	27
第3図 基本土層図	14	第15図 出土遺物(2)	28
第4図 調査区の位置	15	第16図 出土遺物(3)	29
第5図 調査区方眼図	16	第17図 出土遺物(4)	30
第6図 1号・2号竪穴住居跡, 1号掘立柱建物跡	18	第18図 出土遺物(5)	31
第7図 3号竪穴住居跡, 2号掘立柱建物跡	19	第19図 出土遺物(6)	32
第8図 3号竪穴住居跡カマド	20	第20図 出土遺物(7)	33
第9図 4号竪穴住居跡	21	第21図 出土遺物(8)	34
第10図 1号版築遺構	22	第22図 出土遺物(9)	35
第11図 1号溝	23	第23図 出土遺物(10)	36
第12図 1号柵列	24	第24図 出土遺物(11)	37
		第25図 出土遺物(12)	38
		第26図 出土遺物(13)	39

第 27 図	出土遺物 (14)	40	第 3 表	出土遺物属性一覧	41
第 1 表	台渡里官衙遺跡と周辺遺跡一覧	5	第 4 表	出土瓦属性一覧	50
第 2 表	台渡里官衙遺跡群における 既往の調査	11	第 5 表	出土遺物計量表	51

図版目次

図版 1	調査区全景	図版 7	出土遺物 (2)
図版 2	テストピット・竪穴住居跡の遺構調査状況	図版 8	出土遺物 (3)
図版 3	竪穴住居跡の遺構調査状況	図版 9	出土遺物 (4)
図版 4	掘立柱建物跡・版築遺構の遺構調査状況	図版 10	出土遺物 (5)
図版 5	版築遺構・溝・柵列・ピット列・ 拡張区の遺構調査状況	図版 11	出土遺物 (6)
図版 6	出土遺物 (1)	図版 12	出土遺物 (7)
		図版 13	出土遺物 (8)
		図版 14	出土遺物 (9)

第1章 調査に至る経緯と経過

1-1 調査に至る経緯

平成22年11月10日付けで篠原 賢（以下、事業者という）より、埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会が提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地「台渡里遺跡（後に台渡里官衙遺跡に名称を変更）」の範囲内に該当していたことから、周知の埋蔵文化財包蔵地において土木工事を実施するにあたり、工事着工の60日前までに、文化財保護法第93条第1項に基づく埋蔵文化財発掘の届出を茨城県教育委員会教育長（以下、県教委教育長という）あて、提出する必要があること、遺跡の発掘調査や現状保存を必要とする場合には、原因者の協力をお願いする旨、回答した（平成22年11月13日付・教理第524号）。

その後、試掘調査の依頼を受けて、平成22年11月30日に試掘調査を実施した。開発対象地内のうち、位置指定道路部分にトレンチを4か所設定し、遺構確認面である関東ローム層上面まで掘削した。調査の結果、3か所のトレンチで竪穴住居跡・柱穴・溝跡と考えられる遺構が検出されるとともに、土師器や須恵器、鉄滓等が多数出土した。

位置指定道路部分で遺構・遺物が確認され、茨城県埋蔵文化財発掘調査取扱い基準原則Ⅲの「恒久的な工作物の設置により相当期間にわたり埋蔵文化財と人との関係が絶たれ、当該埋蔵文化財が損壊したのに等しい状態となる場合」に該当してしまうため、事業者と計画変更及びその保存について協議を重ねた。しかしながら、計画変更は困難であるとの結論に達したことから、今般の土木工事については、位置指定道路部分を対象とした記録保存を目的とした本発掘調査の実施が相当である旨の意見書を付して、県教委教育長へ届出を進達した（平成22年12月2日付・教理第527号）。

この届出に対し、県教委教育長から事業者あて、位置指定道路部分については工事着手前に発掘調査を実施すること。調査の結果、重要な遺構が発見された場合には、その保存について別途協議を要すること。宅地部分については、慎重に施工するよう指示・勧告があった（平成22年12月10日付・文第1678号）。これを受けて、事業者は株式会社東京航業研究所と委託契約を締結し、平成23年1月20日から発掘調査を実施することとした。

（川口）

1-2 発掘作業の経過

発掘調査は平成23年1月20日から平成23年2月5日までの約2週間にわたって実施した。

1月20日より表土除去および遺構確認作業を開始した。翌21日に竪穴住居跡4軒、柵列遺構1条、ピット列1基、版築遺構1個所の分布を確認し、同日より順次、遺構の調査に入った。このうち、調査区南側に位置する版築遺構については、性格や分布状況が不明瞭であったことから東西1.5m、南北10.5mのサブトレンチを設け、精査に努めた。1月31日と1月1日には掘立柱建物跡2棟の調査および、調査区中央部東側1号テストピットの基本土層確認作業を行った。

2月2日に遺構の写真測量と全体写真撮影を終了し、3日より埋め戻し作業を開始した。さらに5日には調査区南側と西側に1・2号拡張区を設け、版築遺構の分布範囲を確認したのち、すべての作業を完了した。

（折原）

1-3 整理等作業の経過

整理作業は平成23年2月7日より同年11月30日までの約10ヶ月間にわたって実施した。

2～3月期には遺物の洗浄・注記・接合作業と並行して、写真測量した遺構の図化作業をSTP（デジタル図化解析機）を用いて行った。

4～10月期には遺構図面修正・トレース，遺物実測・トレース，遺物写真撮影，図版作成，原稿執筆などの作業を行い，10月27日より11月30日にかけて報告書編集作業を実施した。（折原）

第2章 遺跡の位置と環境

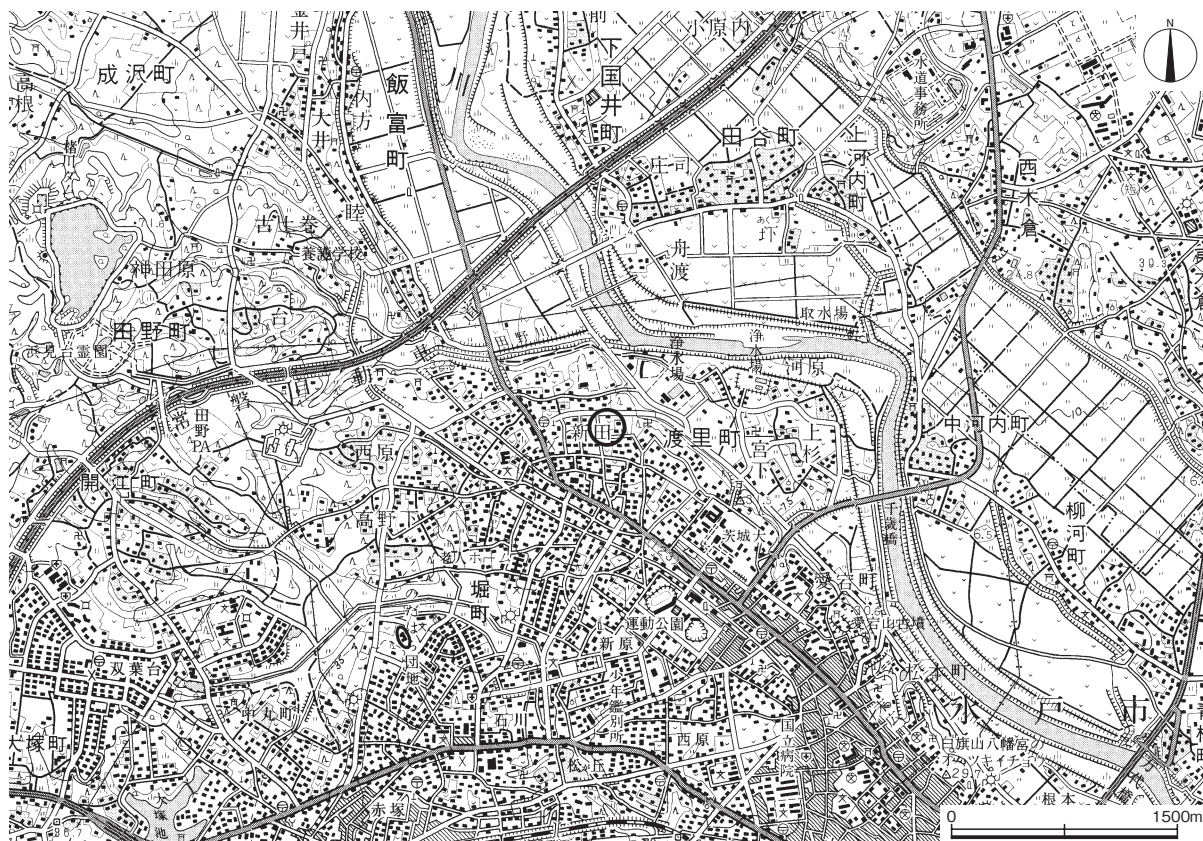
2-1 地理的環境

台渡里官衙遺跡は、茨城県水戸市渡里町字前原 2867 番地に所在し、北緯 36 度 24 分 17 秒、東経 140 度 26 分 15 秒（世界測地系）である。

市域の概観 水戸市は、日本最大を誇る関東平野の北東部に位置する。市域の北部には、八溝山地を横切り、鷲子山塊と鶏足山塊とを南北に分ち、西から東へ流れる那珂川とその支流により沖積低地が広がり、これに沿うように東茨城台地が太平洋に向かって突き出している。東茨城台地はその西端で八溝山地の外縁にあたる丘陵へとつづき、市域西部を構成している。

その下流域右岸の大半を水戸市域とする那珂川は、栃木県的那須連山を源流として、八溝山地の西縁を南へ流れた後、烏山の南から方向を東へ変えて八溝山地を横断し、今度は御前山を背にして南東へ方向を変えて那珂台地と東茨城台地の間を太平洋へ向かって流れ出る。この那珂川の存在により、栃木県域に広がる那須野原や喜連川丘陵などの内陸部と太平洋沿岸部とが、水上交通により結ばれることから、歴史的に水戸市域が交通の要衝地となるが多かったことが知られる。

市域の地形区分 市域の西部では、標高 300m 以下の低く起伏の小さい丘陵地帯が続く。これらは幅広で丸みを帯びた尾根と谷津田が谷奥まで認められる谷が樹枝状に入り込むのが特徴的で、良好な里山の景観を残している。縄文時代前期から中期にかけてのいわゆるキャンプ・サイトと古代～近世



第1図 台渡里官衙遺跡の位置（国土地理院発行 1：50,000「水戸」に加筆）

第1表 台渡里官衙遺跡と周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	遺物	備考
22	愛宕町遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石錘・土偶, 弥生土器(後), 土師器・須恵器(古)	
23	文京1丁目遺跡	集落跡	縄文土器(早～後)・石斧・石剣・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古前), 須恵器(奈・平)	
24	アラヤ遺跡	集落跡	尖頭器(先), 縄文土器(早～晩)・石斧・石剣・土偶, 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
25	長者山遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 弥生土器(後), 土師器(古・奈・平)	
26	西原遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 土師器(奈・平), 須恵器(奈・平)	
37	阿川遺跡	集落跡	縄文土器(中～後), 土師器(古), 土師器(奈・平)	
38	梵天遺跡	集落跡	縄文土器(早～後), 弥生土器(後), 土師器(古前～後)	
39	権現山遺跡	集落跡	縄文土器(前), 弥生土器(後), 土師器(古前～後)	
40	平塚遺跡	集落跡	縄文土器(中～晩)・石錘・土偶, 弥生土器(後), 土師器(古), 須恵器	
46	軍坂遺跡	集落跡	搔器(先), 縄文土器(前～後)・土器片・石製品, 弥生土器(後), 土師器・須恵器(奈・平)	
47	富士山遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古), 須恵器	
48	小原内遺跡	集落跡	縄文土器(中～後), 弥生土器(後), 土師器(古・奈・平)	
63	環渡里遺跡	集落跡	土師器・須恵器(古・奈・平)	
64	堀遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古前・奈・平), 須恵器・灰釉陶器・紡錘車・砥石・鉄鎌・鉄鏃・刀子・釘・瓦(奈・平), 内耳土器・土師質土器・常滑焼・播鉢・石臼(中), 瓦質土器・磁器(近)	
65	中河内遺跡	集落跡	古墳(前), 土師器(奈・平)	
79	愛宕山古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・鉄刀(古)	方円1(2), 円墳1(2)
80	西原古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・須恵器・勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄族(古)	方円1, 円墳8(11)
94	権現山古墳群	古墳群		円1(2)
95	権現山横穴群	横穴群	土師器・須恵器・水晶製切子玉・ガラス製小玉(古)	横穴(4)
96	富士山古墳群	古墳群	土師器・円筒埴輪・人物埴輪(古)	方円1(?), 円8
97	小原内古墳群	古墳群	円筒埴輪・形象埴輪・直刀(古)	方円1, 円2(4)
98	台渡里廃寺跡	寺院跡 官衙跡	ナイフ形石器・男女倉型有櫛尖頭器・剥片(先), 縄文土器(前・後～晩)・石器, 弥生土器(後), 土師器・須恵器・墨書土器・瓦・文字瓦・瓦塔・陶製相輪・金箔製品・鉄釘・鏝・青銅製品・鉄滓・羽口(奈・平), 土師質土器(中)・内耳土器(中)	
99	田谷廃寺跡	官衙跡	土師器・須恵器・瓦・文字瓦(奈・平)	
100	長者山城跡	城館跡		
121	渡里町遺跡	城館跡	縄文土器(早・中・後), 土師器(古・奈・平), 須恵器・灰釉陶器(奈・平)	
125	塚宮遺跡	集落跡	縄文土器(中・後), 弥生土器(後), 土師器(古前～後)	
126	塚宮古墳群	古墳群		方円(1), 円(2)。
224	砂川遺跡	集落跡	縄文土器(中・後), 土師器・須恵器・石製品・土製品・鉄製品・木製品・軒平瓦(奈・平)	
225	白石遺跡	城館跡 集落跡	角錐状石器(先)・削器(先), 尖頭器(草創)・有舌尖頭器(草創)・石鏃(草創), 縄文土器(中), 弥生土器(後), 土師器・須恵器(古・奈・平), 内耳土器(中)・陶器(中)・磁器(中)	
226	白石古墳群	古墳群		円5
227	宮元遺跡	集落跡	土師器(古前)	
228	上河内大塚古墳	古墳	土師器・須恵器(奈・平)	
229	一本松古墳	古墳	直刀	円(1)
230	笠原神社古墳	古墳	縄文土器(後), 土師器(古), 陶器	円1(3)
231	文京2丁目遺跡	集落跡	弥生土器(後), 土師器(古・奈・平), 須恵器(奈・平)	
232	中河内館跡	城館跡		
276	台渡里遺跡	集落跡	縄文土器(晩), 土師器・須恵器(古・奈・平), 鉄製刀子(古)・鉄製鎌(古)・砥石(古), 墨書土器・炭化米・瓦(奈・平), 内耳土器(中), 陶器・磁器・銅銭・銅箸・砥石(近)	

【水戸市埋蔵文化財分布調査報告書(平成10年度版)】に加筆

の生産遺跡が分布するのが特徴的である。他方, 市域の沖積低地の右岸は左岸に比べて面積が狭小である一方, 左岸は那珂川氾濫原の幅が広く, 標高10m以下の低地帯が広がっており, 古くから集落が営まれて現在に至る。これら低地帯に面した台地は, 那珂川とその支流によって開析された樹枝状の支谷が深く入り込み, 複雑な様相を呈しており, 起伏の豊かな地形をなす。東茨城台地のうち水戸市域にあたる部分をとくに水戸台地と呼ぶことがあるが, この支谷によっておもに四つに細分され, 北西からそれぞれ上市台地, 見和台地, 千波台地, 吉田台地と呼称される。

台地の地質 水戸台地の地質は, しばしば水戸層と呼ばれる第三紀層(凝灰質泥岩層)を基盤岩とし, その上部に, 砂, 礫, シルトで構成される見和層, 上市礫層が続く。上市礫層は, 約125万年前の最終間氷期最盛期(ステージ5e)におけるいわゆる下末吉海進からの離水過程で堆積したものである。

これらを最下部に赤城水沼テフラ群を伴う火山灰で構成されたいわゆる関東ローム層が被覆し、現在の台地が形成された。

遺跡の周辺 台渡里遺跡は、いわゆる上市台地のうち最も北西に位置する標高約 30m 程度の台地平坦面に立地する。台地に北面して田野川が西から東に流れ、台地の北東縁辺に沿うように流れる那珂川に合流する。この合流地点は、台地の尽きるところにあり、那珂川が大きく蛇行し、南西方向の鹿島灘に向かって流れていくのである。合流地点より東にやや流れが緩やかになる地点があり、近世には渡し場があったと伝えられ、「舟渡」の地名を遺す。古代においては、この延長線上に東海道常陸路が推定されており、同様に渡河点があったと推測される。「渡里」の地名の由来と考えられる。

台地縁辺部から斜面にかけては、風致地区として指定されており、豊かな緑を遺す。斜面を下りきったところには、各所で湧水点を確認されている。『常陸国風土記』那賀郡条では、郡家近傍に「泉に縁りて居める村落の婦女 夏の月に会集ひて布を洗ひ 曝し乾せり」とする場所が存在するとあるが、これまでの調査成果を勘案すれば、那賀郡家は台渡里遺跡周辺と推定されることから、これら湧水点のいずれかであろう。『萬葉集』に詠われた「三栗の なかに向へる 曝井の 絶えず通はむそこに妻もが」（巻九 - 1745）の曝井が、常陸国那賀郡家の近傍だとされるのもこのためである。現在は愛宕町滝坂に推定されており、渡里町に連綿と続く古代遺跡群と那珂川流域最大規模の前方後円墳である国指定史跡「愛宕山古墳」との間に位置する。 (渥美)

2-2 歴史的環境

台渡里官衙遺跡は、国指定史跡「台渡里廃寺跡」の周辺に広がる官衙・集落等の複合遺跡であり、主として台地平坦面にかけて広がっている。その範囲は東西 800m、南北 500m に及ぶ。昭和 20 年代頃までは、この一帯は山林と畑地が多く、土地利用が緩慢としていたが、昭和 40 年代後半から徐々に宅地化が進み、往時の景観が失われつつある。

先土器時代～縄文時代草創期 軍民坂遺跡からは、長者久保・神子柴文化期の石刃製搔器が採集されている（江幡・吹野 1998）。白石遺跡では橋本編年Ⅱ b 期（橋本 1995, 2002）に帰属する頁岩製の角錐状石器や時期不明の削器と剥片（いずれもメノウ製）、長者久保・神子柴文化期の尖頭器（頁岩製）、縄文時代草創期の有舌尖頭器（黒曜石製・頁岩製）・石鏃（ガラス質黒色安山岩製・頁岩製）が出土した（櫻村 1993）。

台渡里廃寺跡下層からは、3 点の石器が出土している。ひとつは南方地区塔跡の掘り込み地形の基底部直下のローム層から出土したメノウの剥片である。出土層位は第二黒色帯とみられる。もうひとつは、平成 16 年度南方地区第 2 トレンチ（DWT04N - T 2）から出土した硬質頁岩製の男女倉型有樋尖頭器である。さらに平成 18 年度長者山地区 1 区トレンチにおいて、確認された正倉院区画溝からもチャート製の二側縁加工のナイフ形石器が 1 点出土した。技術的・形態的特徴および利用石材から橋本編年Ⅱ c 期 A グループ（いわゆる「砂川期」）のものと考えられる。また、長者山地区に隣接するアラヤ遺跡では硬質頁岩およびガラス質黒色安山岩製の槍先形尖頭器が各 1 点出土した。（川口）

縄文時代 アラヤ遺跡においては、昭和 26 年の調査で、後期堀之内式、加曾利 B 式、後期安行式、晩期安行式、千網式とともに東北地方に分布する大洞式の土器等が出土した（大森 1952c）。

第1地点の調査では、遺構が台地縁に密集しており、縄文時代早期の竪穴状遺構8基が確認された(井上編1992)。遺物は早期後葉の茅山下層式、茅山上層式、子母口式、前期前葉の黒浜式、前期後葉の浮島式、中期初頭の五領ヶ台式、中期中葉の阿玉台式、中期末葉の加曽利E4式、後期初頭の称名寺式、前葉の堀之内1式、後期中葉の加曽利B2式土器とともに定角式磨製石斧や磨石、石錘等が出土している。第2地点の調査では、磨石や石皿・蜂の巣石、礫器などが出土している(佐々木・川口ほか2007)。

砂川遺跡からは、加曽利E3-4式期の竪穴住居跡4軒、加曽利E4式期の竪穴住居跡15軒、加曽利E4式期の土坑141基、加曽利E4式期の埋設土器14基が検出された(渡辺1981)。竪穴住居跡は円形、隅丸方形、楕円形で炉の形態には地床炉、石囲い炉、埋設炉があり多様である。

軍民坂遺跡では、第3地点において、縄文時代中期後半加曽利E3式期の竪穴住居跡が調査され、うち1軒は石組複式炉をもつことが明らかとなった。中期後半における東北地方の大木式土器文化圏と非常に密接な交流が推量されよう。

白石遺跡からは、加曽利E3式期、加曽利E4式期の竪穴住居跡計3軒が検出された(樫村1993)。いずれも円形あるいは不整円形のもので、加曽利E3式期のものが地床炉であるのに対し、加曽利E4式期のその炉は石囲い炉であった。また、遺構外から大木式土器の出土をみた。

弥生時代 弥生時代の遺跡は表採により弥生時代後期土器の存在が確認されたのみである。堀遺跡からは、竪穴住居跡から弥生土器の壺2個体が出土したが、土師器の壺と埴が相伴しており、むしろ古墳時代前期初頭とするのがふさわしい(井上・千葉・樫村1995)。

古墳時代 古墳時代の集落遺跡とされるもののうち時期が判明しているのは、いわゆる五領式段階の土師器が確認された文京1丁目遺跡、堀遺跡、中河内遺跡の4遺跡、いわゆる鬼高式段階の土師器が出土した塚宮遺跡や白石遺跡に限られる。白石遺跡では、3軒の竪穴住居跡が確認されたが、いずれも鬼高式の最終段階の土師器を伴っており、7世紀前半代と考えられる(樫村1993)。

当該地域での造墓活動は活発であった。愛宕山古墳は、全長136.5mを測り、楕形の周隍を巡らす大型前方後円墳である。その墳形から中期古墳とみられ、表面採集された埴輪に黒斑が見られることから(井・小宮山1999)、5世紀前半の築造と考えて大過ない。近傍には、かつて姫塚古墳と呼ばれる全長58m程の前方後円墳があったが、1971年に宅地造成のため破壊されてしまった。有孔円板と鉄刀の一部が出土したと伝えられ、盗掘孔の状況から粘土槨であったと推定される(藤村・塩谷1982)。愛宕山古墳に近い時期が推定されている(井・小宮山1999)。

後期には、富士山古墳群、小原内古墳群が該当する。円筒埴輪や形象埴輪、直刀、鉄鏃などが出土したとされる。いずれも6世紀代であろう。終末期では、西原古墳群がある。これは、凝灰岩の横穴式石室をもつ古墳、須恵器・勾玉・管玉・丸玉・棗玉・銅環・鉄鏃などが出土したという古墳(大森1952a, 1952b)、埴輪を持たない古墳があるとの報告から、終末期の群集墳であるとの見方があった。しかし平成17年度の試掘・確認調査で墳丘が削平された円墳の周隍が検出され、埴輪片が多数出土した。終末期に限らず長期にわたって断続的に造墓活動が展開された古墳群とみられる。

那珂川を挟んで対岸には白石古墳群がある。5基の円墳から構成され、2号墳の墳頂には凝灰岩片が散乱しており、横穴式石室の存在が想定される。また3号墳の南側からは石棺が検出されており、

いずれも埴輪を伴っていないことから、終末期の群集墳と考えられる。

白石古墳群の北西には権現山横穴群が所在する。1号墓及び2号墓の玄室には線刻壁画が認められる。1号墓玄室の左右側壁に放射状線文が、1号墓玄室の左右側壁に稲妻形文・縦線・横線・建物・冑が、それぞれ描かれている。3号墓からはガラス製小玉と水晶製切子玉が、4号墓からはガラス製丸玉と金環2点が、それぞれ出土している。造墓年代は7世紀前葉とする見解（大森1974、生田目・稲田2002）と8世紀前後とする見解（川崎1982）とがあり、一致をみない。

奈良・平安時代 台渡里遺跡及び台渡里廃寺跡については、既往の調査として後述することとし、ここではその周辺に展開する古代遺跡を概観しておく。

アラヤ遺跡第1地点では、7世紀末～8世紀初頭の工房跡や古代の竪穴住居跡から刀子や砥石などが一定量出土しており、寺院や官衙の造営に関わっていた可能性が高い。また9世紀代とみられる掘立柱建物跡があることから、土地利用の変化にも注意したい（井上編1992）。第2地点では、1区において東西方向の区画溝が確認され、覆土から炭化米が出土したことから那賀郡衙正倉院の区画溝とみられる。また4区では柱間7尺の掘立柱建物跡も確認された（佐々木・川口ほか2007）。

堀遺跡第1地点では、9世紀代の竪穴住居跡とともに、規模の異なる3棟の側柱掘立柱建物跡が検出された（伊藤1995）。第2地点では、竪穴住居跡・掘立柱建物跡から構成される大規模な古代集落跡が確認された。最も隆盛するのは、8世紀後半から9世紀にかけてである。特筆されるのは、刀子・鎌・鍬・釣針・釘・錠などの鉄製品や須恵器壺Gなど特殊な器種の土器の出土である。土坑から出土した人面墨書の土師器小甕とあわせて、この集落の特異性をよく表している（井上・千葉・檜村1995）。なお、5号掘立柱建物跡は長舎風の建物跡で9世紀代の公的建物の可能性があることから（檜村2005）、当該集落は、那賀郡衙の造営や修造などに関わった計画村落である可能性が指摘できよう。

また台渡里遺跡を中心に堀遺跡と対になる位置には、渡里町遺跡が所在する。第5地点では、7世紀末から9世紀中葉までの竪穴住居跡が検出されているが、灰釉陶器と瓦が出土している点については、官衙隣接集落としての特徴をよく表している（佐々木・林ほか2008b）。

砂川遺跡においても、竪穴住居跡から構成される古代集落が確認された。鉄製品のほか土製紡錘車などの生産用具が出土した。また井戸跡からは曲物、櫛、高台付盤などの木製品が出土している。（渡辺1981）。

白石遺跡からは、古代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、建物基壇が検出され、官衙関連遺跡として注目された。とくに、8世紀前半に帰属するとみられる桁行36間×梁間2間の規模をもつⅡ区2号掘立柱建物跡は、並行する1号溝とともに公的施設の一部を構成していたと考えられる。（檜村1993a）。

白石遺跡に隣接する田谷廃寺跡では、台渡里廃寺跡長者山地区と同様の文字瓦をはじめとした瓦の出土が多数みられた。「百壇」という地名を遺す周辺には、3棟の礎石建物跡の存在が報告されている（伊東1975）。黒澤彰哉の指摘する通り、本遺跡を新置の河内駅家跡とするならば（黒澤1998）、白石遺跡Ⅱ区2号掘立柱建物跡は、檜村のいうような駅馬を繋いでおくための馬房や厩舎などの施設として理解することができる（檜村1993b）。なお、この建物跡を馬房とする見解については木本雅康も支持するところであるが、『延喜式』には駅馬数が2疋とあり、養老2年（718）の石城国設置に伴って駅馬数10疋が置かれたと仮定しても、建物の規模とには隔たりがあることから、木本が騎兵のた

めの馬房としてみることで駅家の軍事的側面を強調した点は興味深いものである（木本 2008）。

中世～近世 長者山城跡は、春秋氏の居城と伝えられるが憶測の域を出ず、これまで縄張り図などの作成はあったが、十分な調査成果が蓄積されてきたとはいえない。ただし近年の調査では、現在遺る土塁・堀の外側で、15世紀後半～16世紀初頭の土器群の出土する地下式坑や井戸跡、土坑・ピット多数が検出され、少しずつ中世城館の構造を明らかにし得る資料が蓄積されつつある。また同時期の遺構として、近接する昭和48年の台渡里第7次調査やアラヤ遺跡第2地点において瓦礫道が検出され、城館との関係が注目される。

渡里町遺跡第5地点でも、中世後期の土坑（地下式坑含む）が検出され、古瀬戸の灰釉卸皿が出土した。隣接する勝幢寺が長者山城主の菩提寺と伝わるが、こうした遺構はそれに関連するとみられ、今後の調査に期待がかかる（佐々木・林 2008 ほか）。

古代寺院跡である台渡里廃寺跡内においても、第8次調査における1号井戸跡から15世紀～16世紀初頭のかわらけや内耳土器、播鉢などが出土（井上・千葉 1995）、第18次調査では、土塁に沿う形で観音堂山地区寺院建物の礎石を落とし込んだ溝跡が確認され、かわらけや内耳土器などが出土した。これらのことから、古代寺院の伽藍地が城館の一角として機能していたと推定される。

他方、第19次調査では、南方地区塔跡基壇を塚として再利用している様子がうかがえ、五輪塔部材や板碑片、北宋銭を伴う中世火葬墓が集中して営まれていたことが明らかとなった（川口・小松崎・新垣 2005）。

第8次調査のうちでも台渡里遺跡の範囲に含まれる第2調査区では、近世墓として4基の白色粘土敷きの遺構が確認されている。同じく台渡里遺跡の範囲である第17・26次調査では、井戸跡から15世紀後半から16世紀前半のかわらけと内耳土鍋の出土がみられ、長者山城跡に関連する遺構群は、かなり広範囲に展開していることが明らかとなった。

第25次調査では、2区から拳大の円礫による集石遺構が検出され、17世紀前半の瀬戸・美濃や波見碗、17世紀後半の瀬戸・美濃大鉢、18世紀前半の肥前系磁器碗が出土した。また4区では、攪乱土中から、かわらけとともに益子土瓶や土人形が出土しており（佐々木・川口・大橋 2006）、17世紀前半頃には近世村落の形成があったものとみられる。（渥美）

2-3 台渡里遺跡群における既往の調査

ここでは、台渡里遺跡を理解する上で欠かせない台渡里廃寺跡とともに、その調査成果を一体的に概略することで、古代の官衙・寺院遺跡の様相を中心についてふりかえっておきたい。

1 寺院と郡衙正倉院の調査（台渡里廃寺跡）

台渡里廃寺跡の調査研究は、高井悌三郎による戦前の学術調査を嚆矢とする（高井 1964）。これを受けて、昭和20年にその一部が茨城県指定史跡とされた。

長者山地区については、従来から炭化米の出土が報告され、礎石建物跡が確認されていることから（高井 1964、瓦吹 1991）、那賀郡衙正倉院と推定された（瓦吹 1991、黒澤 1998）。近年行っている市教委の範囲確認調査により、新たに9棟の礎石建物跡と四方を台形状に囲む区画溝が確認され、正倉院で

あることが確定的になった（川口・渥美・木本 2009）。

観音堂山地区については、これまで郡衙政庁院や河内駅家とする見解もあったが（瓦吹 1991, 外山 1993）、市教委が行った範囲確認調査により、寺院建築とみられる礎石建物跡に伴って、陶製相輪の一部や塑像片、須恵器高坏形香炉等の仏教関連遺物の出土をみたことから、いわゆる郡衙周辺寺院であると推定されるに至った。そして創建年代は7世紀後半に遡ることが明らかとなった（川口・小松崎ほか 2005）。出土瓦には、「吉（土）田」、「川邊」、「井野」、「阿波」、「中」、「志□」、「年足」等寺院造営に関与した那賀郡の郷名や人名が記されたもの、相輪の一部が描かれたものや「佛」銘をもつもの等が確認された。

南方地区については、早くから寺院と考えられてきたが（高井 1964, 瓦吹 1991, 黒澤 1998）、市教育委員会が行った範囲確認調査により、塔跡基壇の内部よりいわゆる内黒土器の坏破片が出土したことから、9世紀後半に造営された寺院跡であることが判明した。観音堂山地区の寺院が9世紀には火災で廃絶していることに加え、南方地区の伽藍区画と思しき溝の掘削が途中で廃絶されていることから、観音堂山伽藍焼亡後に南方地区において再建が開始されたが、造営は何らかの事情により中断した可能性が高い（川口・小松崎ほか 2005）。なお平成 17 年には観音堂山地区と南方地区が国指定史跡に指定されている。

2 官衙関連遺跡の調査（台渡里官衙遺跡）

渡里町の台地を東西に貫く都市計画道路敷設に伴い実施された発掘調査（第8次調査）では、第2調査区において、竪穴住居跡、溝跡、掘立柱建物跡が検出された（井上・千葉 1995）。とくに竪穴住居跡や2号溝から集中的に出土した7世紀後半～8世紀前半の土器群が注目され、それらのうちには、湖西産や上野系等搬入品とみられる須恵器や東北地方の栗罎式の影響を受けているとみられる土師器坏などがみられる。また3号溝は、0.9～1.3mほどの掘方を持つ柱穴が2m等間で列状となったものが、溝で連結しており、柵列もしくは掘立柱塀などの区画施設としての性格が推定される。遺構には、主軸が真北を示す傾向にあるものとやや北西に振れる傾向のものと2種あり、8世紀前半代のいずれかを画期とした時期差と考えられる。第9次調査は、第8次調査の第2調査区に隣接しており、3号溝の延長部分と7世紀後半の竪穴住居跡が1軒検出された。

第8・9次調査区の南側に位置する市道路内での発掘調査では（第39次）、8次2区で検出された3間×3間の布掘り総柱掘立柱建物跡とほぼ同じものが検出されると同時に、これと軸を同じくする官衙ブロックを区画するとみられる溝の発見があった。溝からは「郡厨」銘墨書土師器有台坏が出土し、官衙ブロックの一部である可能性を一層におわせている（佐々木・林 2008a ほか）。

平成 15・17 年に実施された商業施設建設に伴う調査（第17次・第26次）では、台渡里廃寺跡南方地区伽藍の東側寺院地区画溝とともに、寺院に先行する竪穴住居跡や掘立柱建物群と鍛冶工房等が確認された。これらは観音堂山地区の造営時期に相当することから、寺院造営に関わったものとみられる（川口・関口ほか 2007）。

これらの調査地点よりやや南方で行われた第24次調査では、古代の竪穴住居跡とともに総地業の礎石建物跡1棟とそれを区画する溝1条が検出され、区画溝の覆土上層からは炭化米がまとまって出

土した(小川・大淵 2006)。SI01からは「備所」銘墨書をもつ須恵器有台坏が出土した。狭小な調査区ゆえに拙速な判断は控えたいが、炭化米や礎石建物跡の存在から類推するならば、租税等を備蓄しておくための施設名を示すと解することも可能であろう。

こうした近年の調査により、古代那賀郡衙及びそれに関連する遺構群は、台渡里廃寺跡の範囲のみならず、台渡里官衙遺跡の範囲にも及ぶことが確認されており、現在改めて遺跡範囲の括り方に対する見直しの必要性に迫られている。(渥美)

第2表 台渡里官衙遺跡群における既往の調査

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査機関	面積 (㎡)	文献	概要	遺物(特記事項)
第30次	2006.10.3 ～ 2007.2.7	台渡里廃寺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3119番地ほか	重要遺跡 範囲確認	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (確認調査)	386.77	水戸市教委 2009『第21 集』	郡家正倉。	
第31次	2006.11.29	台渡里遺跡／ 南方地区	渡里町字南前原 2618	個人住宅 造成に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	12.60	水戸市教委 2009『第22 集』	時期不明の遺構。	
第32次	2007.1.31	台渡里遺跡／ 南方官衙地区	渡里町字狸久保 2771-1番地外	宅地造成 に伴う	川口武彦 新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	30.4	水戸市教委 2009『第22 集』	中世以降とみられる 堀跡を確認。	
第33次	2007.01.22 ～ 2007.02.20	アラヤ遺跡 (第2地点)	渡里町字アラヤ 3061-4地先	市道常磐 10号線 改良工事 に伴う	大橋 生 林 邦雄	東京航業研 究所 (本調査)	244.0	水戸市教委 2007『第12 集』	長者山地区の南側区 画溝と思われる溝 跡、第7次調査で確 認された中世の瓦 礫道の延長部分を調 査。	
	2006.1.27 ～ 2006.1.28			市道常磐 10号線 改良工事 に伴う	新垣清貴 関口慶久	水戸市教委 (立会調査)	—	水戸市教委 2007『第12 集』	溝跡2条を確認。	
第34次	2007.04.04 ～ 2007.06.18	台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町字宿屋敷 3028-8	個人住宅 造成に伴う	川口武彦 渥美賢吾 木本孝周	水戸市教委 (発掘調査)	98.24	水戸市教委 2010『第35 集』	東方官衙域の「溝も ち」掘立柱建物跡1、 竪穴建物跡1を確認。	
第35次	2007.05	台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町 2812-1～ 3011	下水道新 設に伴う	新垣清貴	水戸市教委 (試掘調査)	18.0	水戸市教委 2010『第35 集』	*第39次に向けた 試掘調査	
第36次	2007.08.19	台渡里廃寺跡／ 観音堂山地区 台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町アラヤ前 2967-1 渡里町宿屋敷 3017-1	ソイル マーク確 認に伴う	西村 康 西口和彦 金田明大 木本孝周 渥美賢吾	水戸市教委 奈文研 (レーダー 探査)	—			
第37次	2007.10.29	台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町字宿屋敷 3028-6	土地改良 に伴う	木本孝周	水戸市教委 (確認調査)	10.0		掘立柱建物跡の柱穴 を断面で確認。	
第38次	2007.11 ～ 2008.2.12	台渡里廃寺跡／ 長者山地区	渡里町 3088-2	重要遺跡 範囲確認	渥美賢吾 木本孝周	水戸市教委 (確認調査)	420.0	水戸市教委 2011『第37 集』	長者山地区の南側区 画溝を確認。その他 では、7世紀後半の 竪穴住居跡、8世紀 前半の区画溝、掘立 柱建物跡等を確認。	
第39次	2007.11.19 ～ 2008.1.19	台渡里遺跡／ 東方官衙地区	渡里町 2812-1～ 3011	下水道新 設に伴う	大橋 生 市瀬俊一	東京航業研 究所 (本調査)	226.0	水戸市教委 2008『第15 集』	7世紀後半の竪穴住 居跡、8世紀前葉の 掘立柱建物跡、8世 紀後葉～9世紀前葉 の溝跡3条を確認。	「郡厨」と積読でき る墨書土器。
第40次	2008.03.19	台渡里遺跡／ 南方官衙地区	渡里町字狸久保 2771-12番地	個人住宅 造成に伴う	川口武彦	水戸市教委 (試掘調査)	24.7	水戸市教委 2010『第35 集』	上面幅6.0m、深さ 2.5m以上の堀跡を確 認。	
第41次	2008.04.30 ～ 2008.06.04	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町字狸久保 2771-12	個人住宅 建築	川口武彦 色川順子	市教委 (本調査)	90.22		40次の本調査・初期 官衙区画溝。掘立柱 塀に伴う。	
第42次	2008.05.19 ～ 2008.05.23	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町 3078-2、 3082-1、3090-1、 -4、-7、3095-3、 3145-1、-2、3146	重要遺跡 範囲確認 調査	川口武彦 西村 康 西口和彦 金田 明 大木本孝周 三井 猛	市教委 奈文研 (レーダー 探査)	7.700	市教委 2011 『第37集』	調査区6では正倉院 の東限を区画すると みられる溝跡を確 認。また、その南東 では40m四方の官 衙ブロックとみられ る区画溝を確認。調 査区7では、法倉と みられるSB001が8 ×3間の壺地業から 7×3間の布地業に 建て替えられている ことを確認。	

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査機関	面積 (㎡)	文献	概要	遺物 (特記事項)
第43次	2008.07.10	官衙遺跡／ 宿屋敷地区	渡里町 3009-1	個人住宅 建築	渥美賢吾	市教委 (試掘調査)	58.3		南北方向に主軸をとる幅2m以上の区画溝SD01。北西方向から南東方向に走る溝状遺構SD02(柵列カ)。SD02と切り合う溝状遺構SD03, SD04を確認。	SD02の覆土上面からは3121型式軒丸瓦の完形品が出土。
第44次 -①	2008.08.24 ～ 2008.09.13	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町字前原 2839-1	学術調査	田中 裕 佐藤祐香	茨城大学 考古学研究 室	109		テニスコート。41次検出の大溝の確認。41次調査で確認されていた溝の北側部分を確認。また、正倉とみられる礎石建物跡も1棟確認。	
第44次 -②	2009.08.01 ～ 2009.09.17	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町字前原 2839-1	学術調査	田中 裕 佐藤祐香	茨城大学 考古学研究 室				
第45次 -①	2008.07.22	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町 2491 - 21 地先～ 2537 - 3 地先	常磐 33 号線道路 改良工事	渥美賢吾 関口慶久	市教委 (立会調査)	—		掘立柱建物跡の柱穴2基を断面で確認。	
第45次 -②	2009.06.03	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町 2491-21 地先～ 2537-3 地 先	常磐 33 号線道路 改良工事	渥美賢吾 米川暢敬	市教委 (立会調査)	—		ピット2基, イモ穴2基	
第46次	2008.08.21 ～ 2008.08.26	官衙遺跡／ 宿屋敷北地区 (長者山遺跡第 3地点)	渡里町字長者山 3151-4, -6	個人住宅 解体	川口武彦	市教委 (確認調査)	90.75		解体工事に伴う確認調査。	
第47次	2008.10.09	官衙遺跡／ 宿屋敷地区	里町字宿屋敷 2987 - 4, -14	共同住宅 建築	渥美賢吾	市教委 (試掘調査)	26		掘立柱建物, 竪穴住居跡。	
第48次	2008.10.21 ～ 2009.03.27	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3147 ほか	重要遺跡 範囲確認 調査	川口武彦	市教委 (確認調査)	530	市教委 2011 【第 37 集】	小2つの区画溝東辺の確認。	
第49次	2008.10.31	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3058-3	個人住宅 建築	渥美賢吾	市教委 (試掘調査)	8.24		遺構は確認されず。	
第50次	2008.12.03	官衙遺跡／ 宿屋敷地区	渡里町 3001-3	個人住宅 解体	川口武彦	市教委 (試掘調査)	11.54		遺構は確認されず。	
第51次	2009.04.06 ～ 2009.05.16	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町字前 原 2699 地先～ 2775-2 地先	常磐 283 号線公共 下水道新 設工事	渥美賢吾	東京航業研 究所 (本調査)	98.5	市教委 2009 【第 30 集】	初期官衙の区画溝。	
第52次	2009.04.22	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町字念仏久 保 2538-1	個人住宅 建築	渥美賢吾	市教委 (試掘調査)	6		個人住宅解体時試掘。	
第53次	2009.07.13 ～ 2009.07.15	官衙遺跡／ 宿屋敷地区・渡 里町遺跡第 11 地点 (1 次)	渡里町 2819-1 ほか	集合住宅 建築	渥美賢吾	市教委 (試掘調査)	90			
第54次	2009.07.08 ～ 2009.08.12	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字長者山 3119 ほか	重要遺跡 範囲確認 調査	川口武彦	市教委 (確認調査)	150	市教委 2011 【第 37 集】		
第55次	2009.07.16	アラヤ遺跡 (第 4 地点)	渡里町 2953-1	個人住宅 建築	米川暢敬	市教委 (試掘調査)	23		第 59 次の試掘調査	
第56次	2009.09.15 ～ 2009.11.17	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町 2771-13	個人住宅 建築	米川暢敬	市教委 (本調査)	73			
第57次	2009.11.17 ～ 2009.11.18	官衙遺跡／ 宿屋敷地区	渡里町字宿屋敷 3001-3, 2998-4	個人住宅 建築	渥美賢吾 川口武彦	市教委 (試掘調査)	11.5			
第58次	2009.12.01 ～ 2009.12.24	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町 2771-14	個人住宅 建築	米川暢敬	市教委 (本調査)	90			
第59次	2009.12.15 ～ 2010.01.13	アラヤ遺跡 (第 4 地点)	渡里町 2953-1	個人住宅 建築	渥美賢吾	市教委 (本調査)	119.5		第 55 次の本調査	
第60次	2010.04.06 ～ 2010.04.23	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町 2616-1 地 先～ 2786-4 地先	市道常磐 123 号線 道路改良 工事	高野浩之	地域文化財 研究所 (本調査)	88	市教委 2011 【第 40 集】		
第61次	2010.01.25	官衙遺跡／ 南前原地区	渡里町字前原 2844-2	集合住宅 建築	渥美賢吾	市教委 (試掘調査)	21.75			
第62次	2010.06.01	官衙遺跡／ 長者山地区	渡里町字アラヤ 3057-2	個人住宅 建築	川口武彦 金子千秋	市教委 (試掘調査)	19			
第63次	2010.06.09	官衙遺跡／ 宿屋敷地区	渡里町 2865	宅地造成	川口武彦	市教委 (試掘調査)	59.1			
第64次	2010.07.21 ～ 2010.07.23	官衙遺跡／ 宿屋敷地区	渡里町 2865	宅地造成	川口武彦	市教委 (本調査)	37.6	市教委 2011 【第 38 集】		

調査年次	期間	地区名	地番	原因	担当者	調査機関	面積 (㎡)	文献	概要	遺物（特記事項）
第 65 次	2010.08.10	官衙遺跡／南前原地区	渡里町 2835-2, -11, -12	駐車場造成	川口武彦	市教委 (試掘調査)	14			
第 66 次	2010.08.20	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町 2865-6	集合住宅建築	川口武彦 色川順子	市教委 (試掘調査)	18			
第 67 次	2010.08.20	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町 2865	集合住宅建築	川口武彦 色川順子	市教委 (試掘調査)	13.6			
第 68 次	2010.09.01	アラヤ遺跡 (第 3 地点)	渡里町字アラヤ 3111, 3090-3	集合住宅建築	米川暢敬 田中恭子 金子千秋	市教委 (試掘調査)	8			
第 69 次	2010.10.02 ～ 2010.10.07	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町字前原 2865-6	集合住宅建築	川口武彦	市教委 (本調査)	67.26			
第 70 次	2010.10.02 ～ 2010.10.15	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町字前原 2865	集合住宅建築	色川順子	市教委 (本調査)	68			
第 71 次	2010.09.21	廃寺跡／南方地区	渡里町字前原 2880-1, 2877-3, 2879-2, 2881-2 の一部	個人住宅 内カー ポート・ 物置建築	川口武彦	市教委 (試掘調査)	3.75			
第 72 次	2010.09.17	官衙遺跡／長者山地区	渡里町字アラヤ 3057-2	個人住宅 内浄化槽 埋設	川口武彦	市教委 (立会調査)	8			
第 73 次	2010.07.21 ～ 2010.07.23	アラヤ遺跡 (第 3 地点)	渡里町字アラヤ 3111, 3090-3	個人住宅 建築	川口武彦 色川順子	市教委 (本調査)	90.3			
第 74 次	2010.11.30	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町字前原 2867	宅地造成	川口武彦	市教委 (試掘調査)	27		第 79 次の試掘	
第 75 次	2010.12.01	官衙遺跡／南前原地区	渡里町字前原 2894-8, -2, -37	個人住宅 建築	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	10.2			
第 76 次	2010.12.02	官衙遺跡／南前原地区	渡里町字前原 2832-1	個人住宅 建築	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	15			
第 77 次	2010.12.02	官衙遺跡／南前原地区	渡里町 2898-1	個人住宅 建築	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	7.05			
第 78 次	2010.12.17	廃寺跡／南方地区	渡里町 2898-1	賃貸借住 宅建替	川口武彦 三浦健太	市教委 (試掘調査)	45			
第 79 次	2011.1.20 ～ 2011.1.31	官衙遺跡／宿屋敷地区	渡里町字前原 2867	宅地造成	折原 覚	東京航業 研究所 (本調査)	263.17	本報告	第 74 次の本調査	

第3章 調査の方法と成果

3-1 調査の方法

調査区の座標は公共座標を基準に設定した。

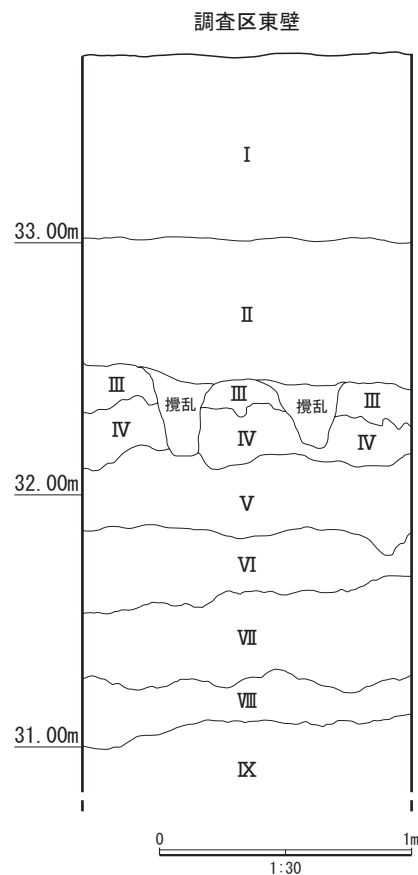
調査対象地は宅地造成に伴う道路予定地である。東西約 6.5 m、南北約 42.0 m と細長い形状を呈するが、版築遺構の分布範囲を確認する必要が出たため、さらに調査区の南側に幅 2.0 m、長さ 10.0 m の 1号拡張区、西側に幅 2.1 m、長さ 2.8 m の 2号拡張区を設けた。調査総面積は 288.9 m² である。

発掘調査にあたっては、重機を用いて碎石・盛土層と耕作土層を除去後、主として人力で遺構確認面までの掘り下げを行った。包含層および遺構内出土遺物については、原則として光波測量機を用いて 3次元記録を実施した。また、遺構についてはデジタルカメラによる写真測量と手実測作業を併用した。写真撮影にあたっては 35 mmモノクロフィルム、35 mmカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラ（1300万画素）を併用し、適宜、記録撮影を行った。（折原）

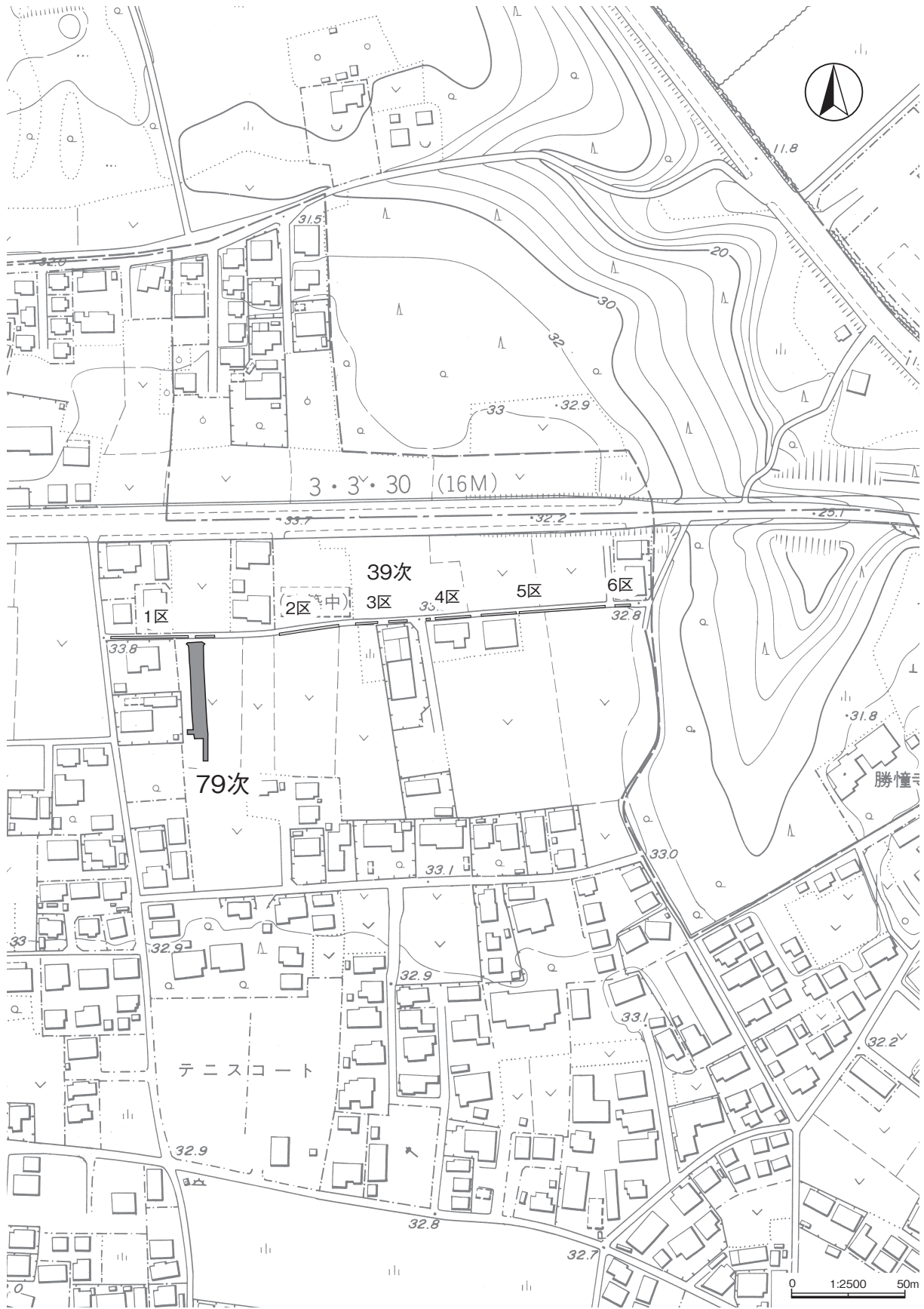
3-2 基本土層

調査区の中央部東壁に基本層序確認のためのテストピットを深く設け、土層観察作業を行った。基本層序の概要は以下の通りである。

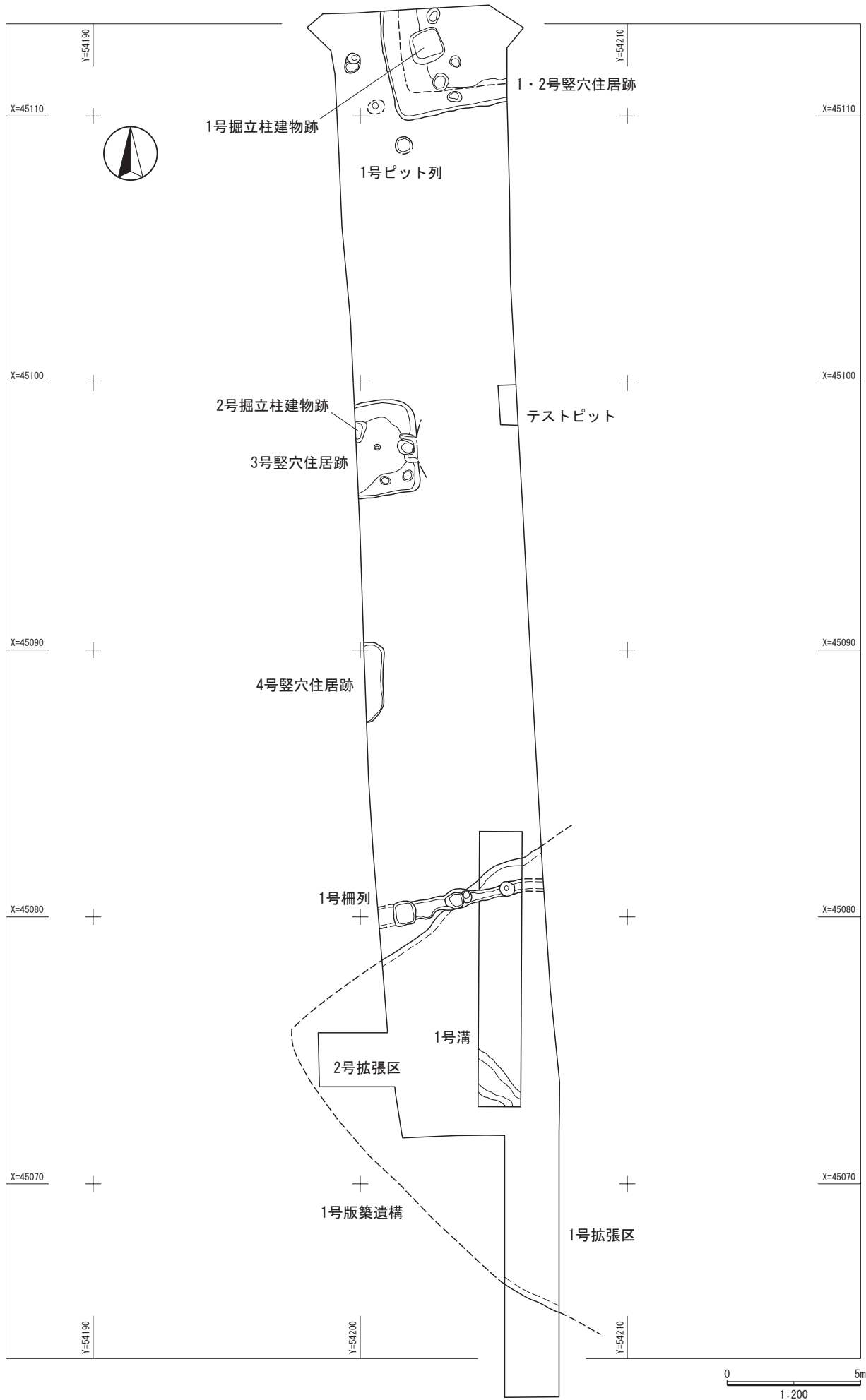
- I層 碎石・盛土層
- II層 耕作土層
- III層 10YR3/2 黒褐色土層 ローム粒を少量含む。粘性をもち、しまりに欠ける。
- IV層 今市・七本桜軽石層 ローム粒を含む。やや粘性に欠けるが、しまる。
- V層 10YR4/6 褐色土層。ローム粒を少量含む。粘性をもち、しまる。
- VI層 10YR5/8 黄褐色ローム層。黒色粒子を微量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- VII層 10YR5/4 黄褐色ローム層。黒色粒子を微量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- VIII層 鹿沼軽石層
- IX層 10Y7/1 灰白色粘土層 粘性をもち、しまる。（折原）



第3図 基本土層図



第4図 調査区の位置



第5図 調査区方眼図

3-3 遺構

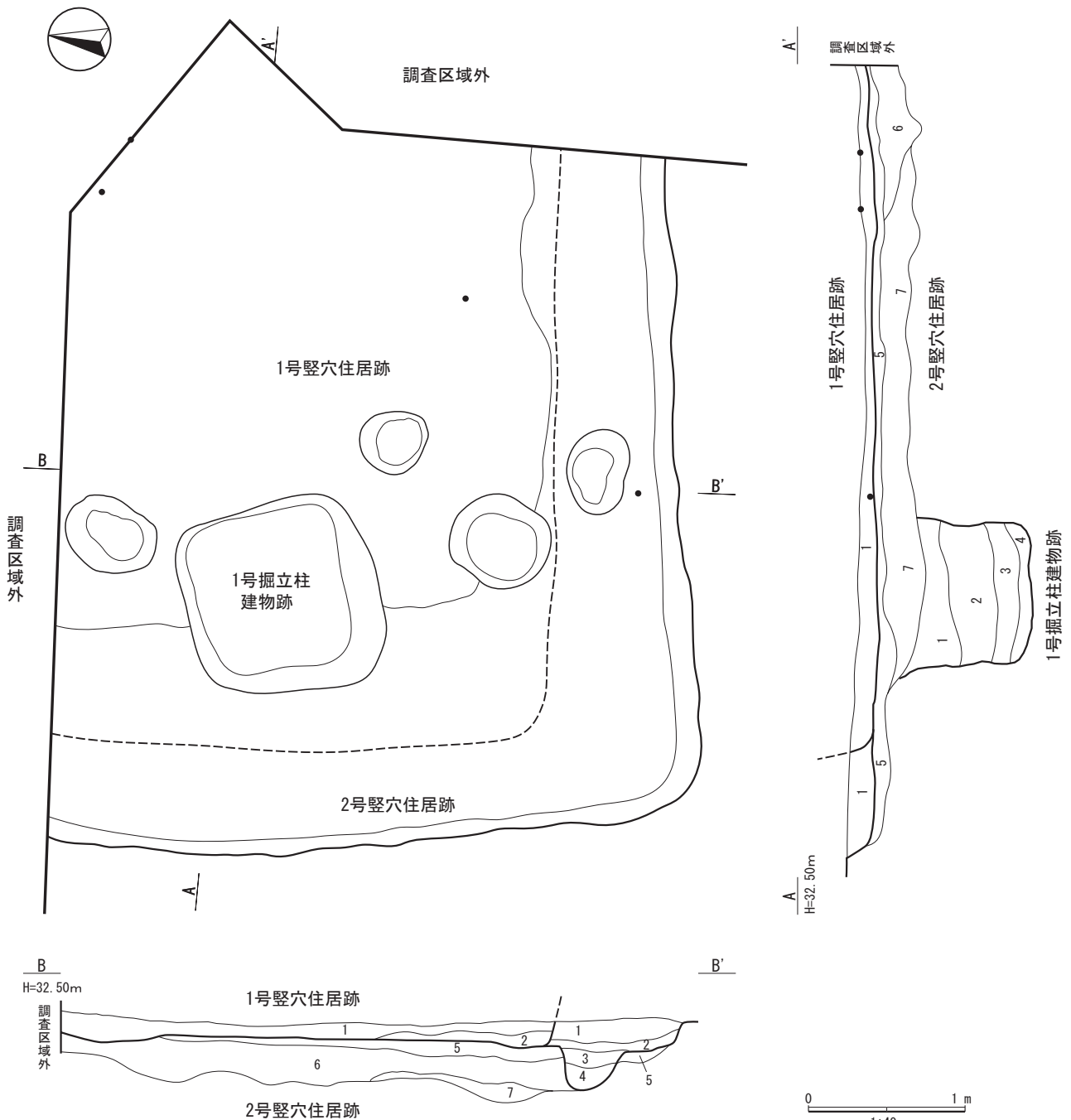
今回の調査区は台渡里廃寺跡観音堂山地区の東部、伽藍中枢より東へ400mほど離れた那賀川を臨む台地上に位置する。近隣では平成6年の都市計画道路3・6・30号線整備に伴う発掘調査(台渡里第8次)、平成8年の共同住宅建設に伴う確認調査(台渡里第9次)、ソイルマーク確認に伴うレーダー探査(台渡里第36次)、平成19～20年の公共下水道工事に伴う発掘調査(台渡里第39次)などが実施され、路線内を横切る南北方向の柵列や竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、井戸、土坑、近世の墓壙などが多数検出されている。

今回の調査は、宅地造成に伴う記録保存を目的として実施されたものである。調査区はほぼ全域にわたって耕作などに伴う各種攪乱や削平を被っており、実際の作業には大きな制約が伴うことになったが、調査区北側から中央部にかけて竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、ピット列1個所、調査区南側を中心に版築遺構1個所、溝1条、柵列遺構1条を確認することができた。

(1) 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 調査区の北東際に位置する。2号竪穴住居跡と1号掘立柱建物跡の上面を切る。西側に近接して1号ピット列が南北に走る。上面を削平されているため、遺存状態は良くない。北側と東側が調査区域外に続くため、全体の規模、主軸方向などは不明である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈し、確認部分の東西の長さは4.65m、南北の長さは3.12mを測る。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は13cmを測る。床面は2号竪穴住居跡の貼り床面上に形成されていた。全体的に平坦かつ比較的堅緻であり、広い範囲にわたって硬化面が認められた。周溝や貯蔵穴は検出されなかった。住居内よりピット3基が検出されたが、西側の大形の2基は配列状態からみて2号竪穴住居跡に伴うものである可能性が高い。本住居の柱穴と推測される1基は口径41cm、深さ28cmを測る。カマドは検出されなかったが、北東側床面を中心に焼土粒や粘土粒が散在しており注目される。遺物は須恵器片22点、土師器片58点、釘1点、鉄滓5点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して8世紀後葉～9世紀前葉、奈良時代末葉～平安時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると2号竪穴住居跡および1号掘立柱建物跡に後続する。

2号竪穴住居跡 調査区の北東際に位置する。下部で1号掘立柱建物跡を切り、上面を1号竪穴住居跡に切られる。西側に近接して1号ピット列が南北に走る。上面を削平されているため、遺存状態は不良である。北側と東側が調査区域外にかかっているため、全体の規模、主軸方向などは不明である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈し、確認部分の東西の長さは5.21m、南北の長さは4.12mを測る。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は15cmを測る。黒褐色土や暗褐色土、ロームブロックを用いて貼り床面が形成されていた。全体的に平坦かつ比較的堅緻である。周溝やカマド、貯蔵穴は検出されなかった。住居内よりピット3基が検出された。西側の大形の2基は南北に直線的に配列されており、本住居に伴う柱穴であった可能性が高い。口径60～66cm、深さ47～52cmを測る。掘り方は床下全面に及んでいるものと思われる。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大35cmを測る。遺物は鉄鏃1点が出土している。切り合い関係や、遺構の形状や覆土のあり方などから判断すると8世紀後葉、奈良時代後葉以前の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると1号竪穴



1号竖穴住居跡

- 1 10YR3/3暗褐色土層 ローム粒・焼土粒少量含む。やや粘性・しまりをもつ。
- 2 10YR3/2黒褐色土層 ロームブロック少量含む。やや粘性・しまりをもつ。

2号竖穴住居跡

- 1 10YR3/4暗褐色土層 ロームブロック少量含む。やや粘性・しまりをもつ。
- 2 10YR3/3暗褐色土層 ローム粒含む。粘性をもち、ややしまる。
- 3 10YR3/2黒褐色土層 ローム粒微量含む。粘性をもち、ややしまる。
- 4 10YR3/3暗褐色土層 ローム粒・ロームブロック少量含む。粘性をもち、ややしまる。
- 5 10YR3/2黒褐色土層 (貼床面) ローム粒・ロームブロック含む。粘性をもち、しまる。
- 6 10YR3/3暗褐色土層 (貼床面) ローム粒・ロームブロック含む。粘性をもち、しまる。
- 7 10YR3/3暗褐色土層 (貼床面) ロームブロック含む。やや粘性をもち、しまる。

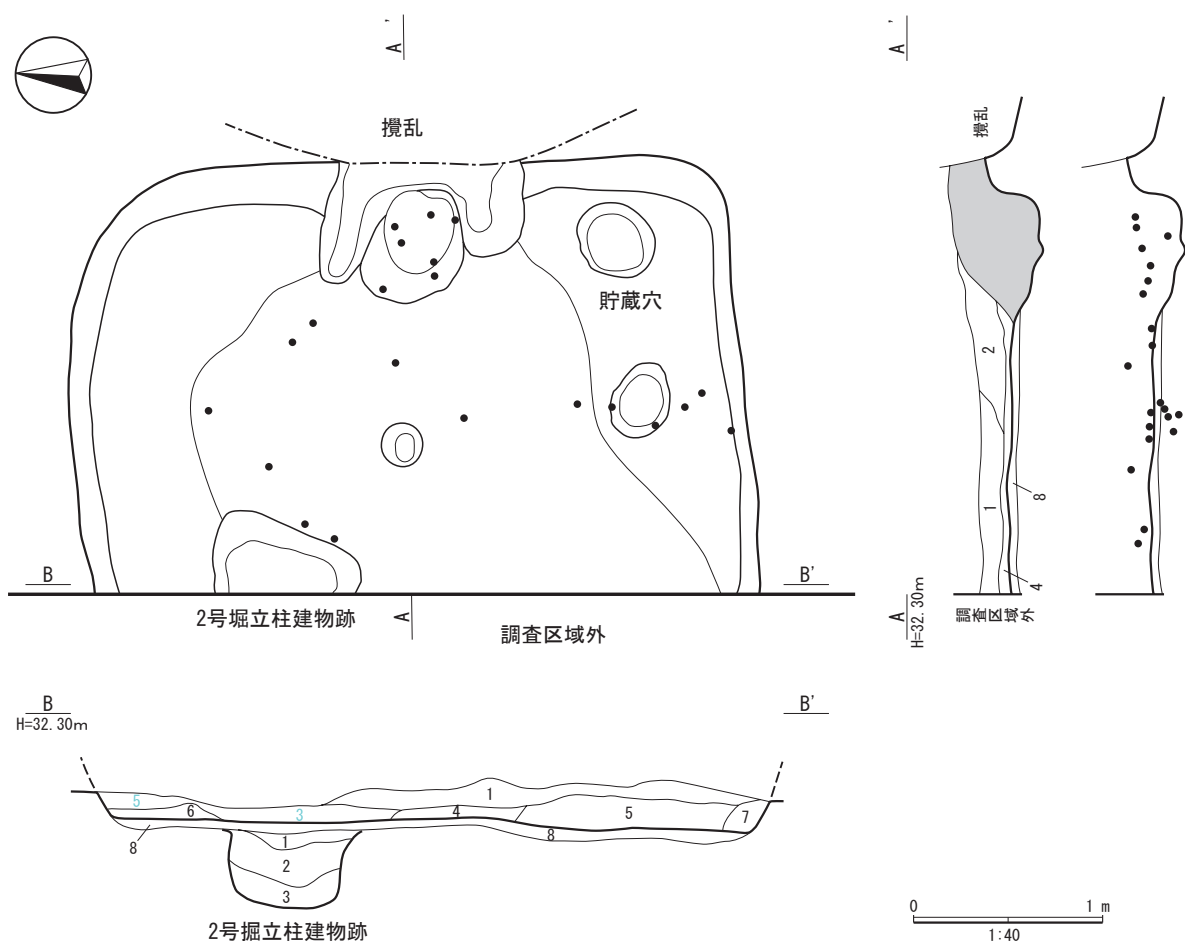
1号掘立柱建物跡

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色土層 ロームブロック多量含む。粘性をもち、ややしまる。
- 2 10YR4/4褐色土層 ロームブロック多量含む。粘性をもち、ややしまる。
- 3 10YR4/4褐色土層 ローム粒、ロームブロック多量含む。粘性をもち、ややしまる。
- 4 10YR2/1黒褐色土層 ロームブロック微量含む。粘性やや強い。粘性をもち、しまる。

第6図 1号・2号竖穴住居跡, 1号掘立柱建物跡

住居跡に先行し，1号掘立柱建物跡に後続する。

3号竪穴住居跡 調査区の中央部北寄りに位置する。2号掘立柱建物跡の上面を切る。5m南側には4号竪穴住居跡が位置する。上面を削平されているため，遺存状態は不良である。西側が調査区域外にかかっているため，全体の規模は不明である。平面形は隅丸方形ないし長方形を呈し，確認部分の東西の長さは2.25m，南北の長さは3.60mを測る。主軸方向はN-86°-Eである。壁は緩傾斜で掘り込まれており，最大壁高は22cmを測る。灰褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に起伏をもつが，比較的堅緻であり，広い範囲にわたって硬化面が認められた。周溝は検出されな



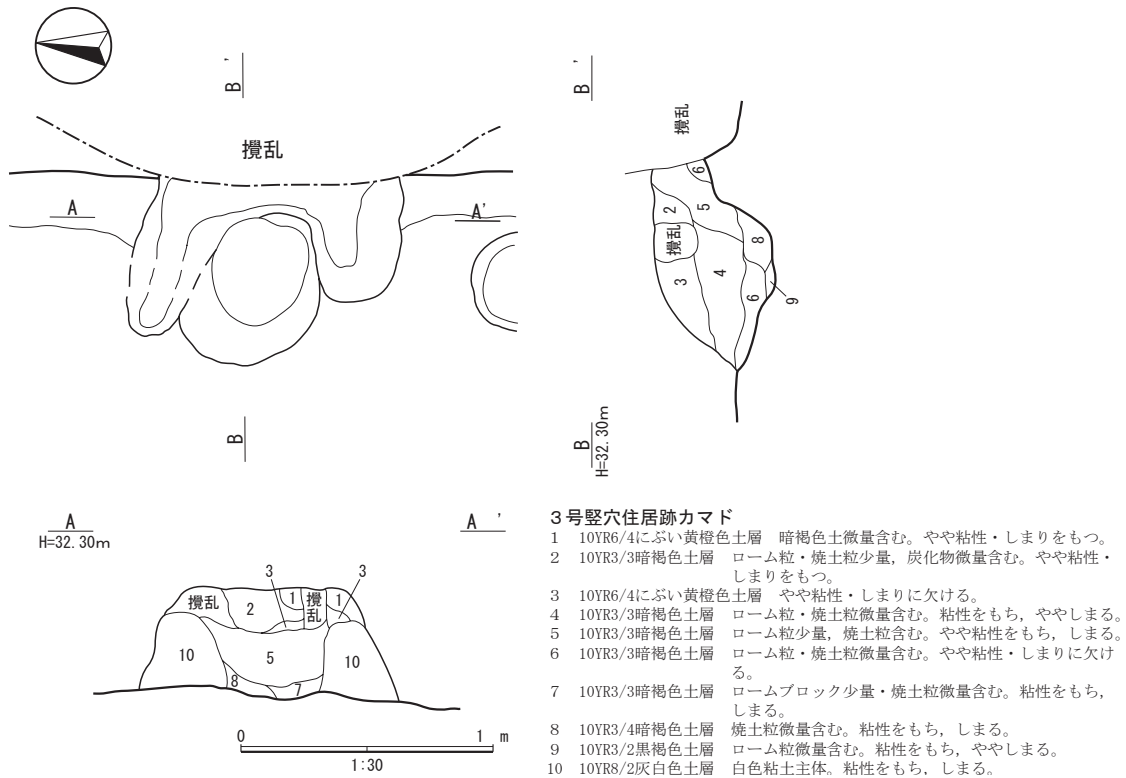
3号竪穴住居跡

- | | | |
|---|--------------|---------------------------------------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色土層 | ローム粒少量含む。粘性をもち，ややしまる。 |
| 2 | 10YR3/3暗褐色土層 | ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物微量含む。粘性をもち，ややしまる。 |
| 3 | 10YR3/3暗褐色土層 | ローム粒微量含む。やや粘性をもち，しまる。 |
| 4 | 10YR2/3黒褐色土層 | ローム粒・ロームブロック微量含む。粘性をもち，ややしまる。 |
| 5 | 10YR3/2黒褐色土層 | ローム粒少量含む。粘性をもち，ややしまる。 |
| 6 | 10YR3/4暗褐色土層 | ロームブロック微量含む。粘性をもち，ややしまる。 |
| 7 | 10YR2/3黒褐色土層 | ロームブロック含む。やや粘性をもち，しまる。 |
| 8 | 10YR4/2灰褐色土層 | (貼床面)ローム粒少量・ロームブロック微量含む。粘性をもち，しまる。 |

2号掘立柱建物跡

- | | | |
|---|--------------|-------------------------------|
| 1 | 10YR3/3暗褐色土層 | ロームブロック少量含む。粘性をもち，ややしまる。 |
| 2 | 10YR3/3暗褐色土層 | ローム粒・ロームブロック少量含む。粘性をもち，しまる。 |
| 3 | 10YR3/3暗褐色土層 | ロームブロック含む。やや締り強い。やや粘性・しまりをもつ。 |

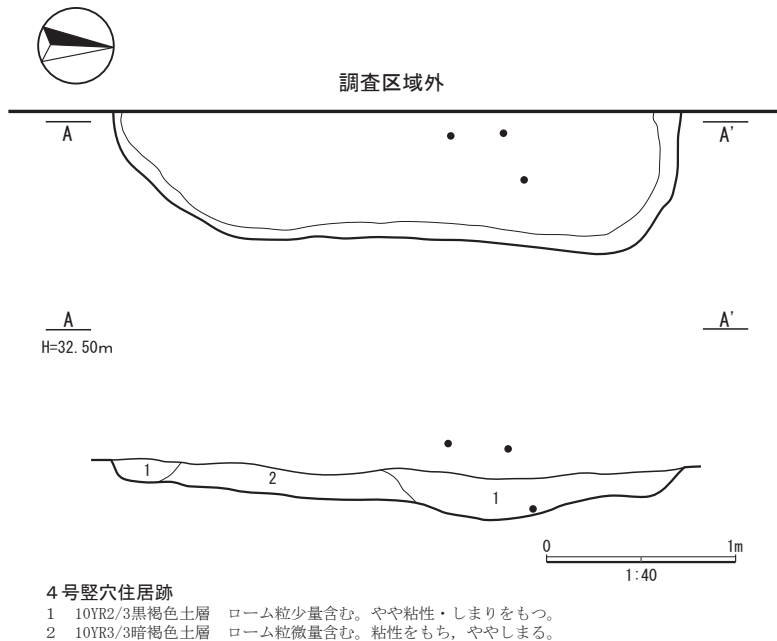
第7図 3号竪穴住居跡，2号掘立柱建物跡



第8図 3号竪穴住居跡カマド

かった。住居内よりピット2基が検出された。口径21～42cm、深さ16～28cmを測り、南壁寄りのピットは、本住居に伴う柱穴であった可能性が高い。掘り方は床下全面に及んでいる。全体的に起伏をもち、床面からの深さは最大10cmを測る。カマドは東壁中央に位置する。煙道部は攪乱を受けているが、袖部は灰白色粘土を用いて造られており、右袖部には瓦片や礫、左袖部には須恵器甕が芯材として使われている。両袖部の内径は47cmを測り、燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面は強く赤化しており、基底は深さ5cmほどの楕円形に掘り込まれている。カマドの支脚として拳大の赤化した安山岩の礫が中央部に据え置かれていたが、取り上げの際に粉碎した。カマドの右側、住居南東隅には貯蔵穴が設けられている。長径44cm、深さ29cmの楕円形を呈し、断面は鍋底状に近い。遺物はカマドを中心に須恵器片55点、土師器片41点、軒丸瓦2点、平瓦12点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して9世紀前葉、平安時代の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると2号掘立柱建物跡に後続する。

4号竪穴住居跡 調査区の中央部南寄りに位置する。上面を削平されているため、遺存状態は不良である。東側の一部が確認されただけであり、全体の規模、主軸方向などは不明である。平面形は不整な隅丸方形ないし長方形を呈し、確認部分の東西の長さは75cm、南北の長さは302cmを測る。壁は緩傾斜で掘り込まれており、最大壁高は12cmを測る。床面はVI～VII層中に形成されており、全体的に起伏をもつ。周溝やピット、カマド、貯蔵穴は検出されなかった。遺物は須恵器片1点、鉄滓1点が出土している。出土遺物や遺構の形状、覆土のあり方などから判断して8世紀後葉、奈良時代の所産であった可能性が高い。



第9図 4号竖穴住居跡

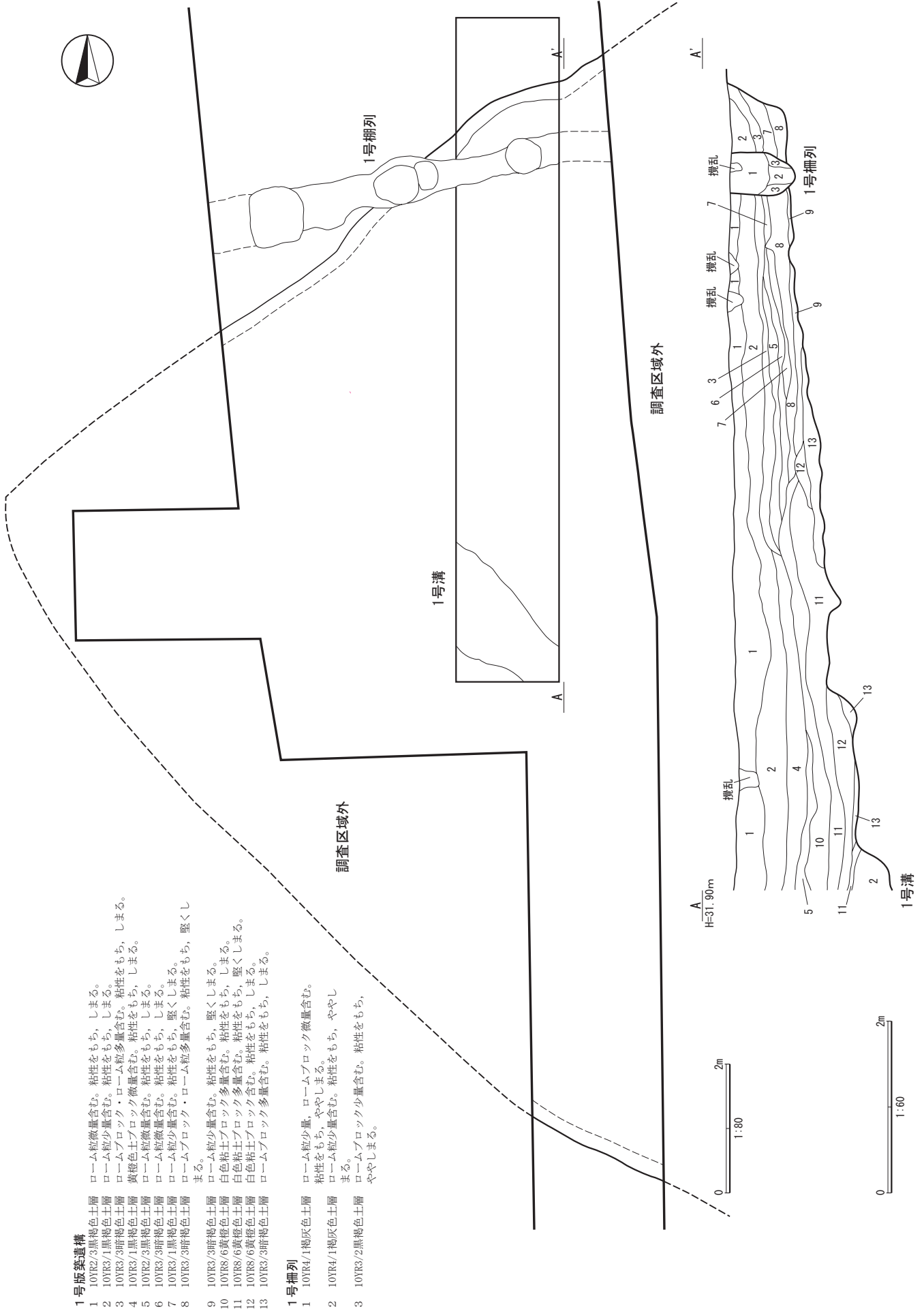
(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 調査区の北東際、1・2号竖穴住居跡の下部より大形のピット1基が検出された。全体の規模、形状、主軸方向などは不明であるが、本地点の周辺では正倉の可能性などが考えられる大型の掘立柱建物跡が少なからず検出されていることから、本ピットも同様の掘立柱建物跡の柱掘方であった可能性が高い。確認されたピットの平面形は隅丸方形を呈し、口径1.20 m、深さ75 cmを測る。断面は筒状を呈する。遺物の出土はなかった。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して7世紀後葉から奈良時代後葉以前の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると1・2号竖穴住居跡に先行する。

2号掘立柱建物跡 調査区の中央部北寄り、3号竖穴住居跡の下部より大形のピット1基が検出された。全体の規模、形状、主軸方向などは不明であるが、掘り込みの形状や規模などからみて本ピットも1号と同様の掘立柱建物跡の柱掘方であった可能性が高い。西側が調査区域外にかかっているが、確認されたピットの平面形は隅丸方形ないし長方形を呈し、口径80 cm以上、深さ40 cmを測る。断面は筒状を呈する。遺物の出土はなかった。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して9世紀前葉、平安時代以前の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると3号竖穴住居跡に先行する。

(3) 版築遺構

1号版築遺構 調査区の南側に位置する。北側を1号柵列に切られ、1号溝を切る。一部分の確認であり全容は不明であるが、一辺15 m以上、深さ0.6～1.2 mの方形ないし長方形の掘り込み内より版築状を呈する埋土が検出されている。掘り込みの推定主軸方向はN-40°-Wである。掘り込みの断面は急傾斜であるが、底面は起伏に富み、南側に向かって傾斜している。土地改変のための掘り込み地業跡と考えられる。遺物は縄文土器6点、弥生土器8点、須恵器161点、土師器1,685点、灰釉



1号版築遺構

- 1 10YR2/3黒褐色土層
ローム粒微量含む。粘性をもち、しまる。
- 2 10YR3/1黒褐色土層
ローム粒少量含む。粘性をもち、しまる。
- 3 10YR3/3暗褐色土層
ロームブロック・ローム粒多量含む。粘性をもち、しまる。
- 4 10YR3/1黒褐色土層
黄褐色土ブロック微量含む。粘性をもち、しまる。
- 5 10YR2/3黒褐色土層
ローム粒微量含む。粘性をもち、しまる。
- 6 10YR3/3暗褐色土層
ローム粒少量含む。粘性をもち、しまる。
- 7 10YR3/1黒褐色土層
ロームブロック・ローム粒多量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- 8 10YR3/3暗褐色土層
ローム粒少量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- 9 10YR3/3暗褐色土層
白色粘土ブロック多量含む。粘性をもち、しまる。
- 10 10YR8/6黄褐色土層
白色粘土ブロック多量含む。粘性をもち、堅くしまる。
- 11 10YR8/6黄褐色土層
白色粘土ブロック含む。粘性をもち、しまる。
- 12 10YR3/2黒褐色土層
ロームブロック多量含む。粘性をもち、しまる。
- 13 10YR3/3暗褐色土層

1号柵列

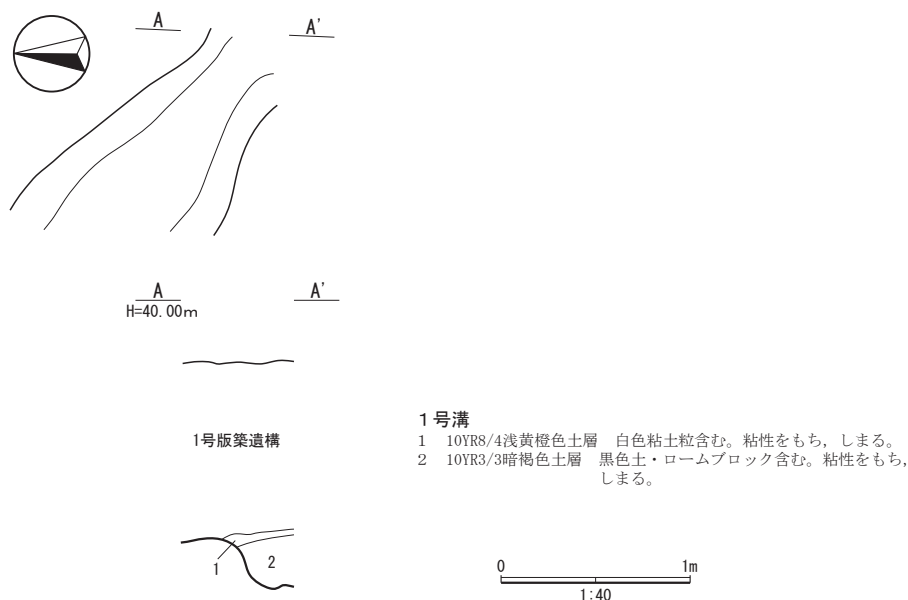
- 1 10YR4/1褐灰色土層
ローム粒少量。ロームブロック微量含む。粘性をもち、ややしまる。
- 2 10YR4/1褐灰色土層
ローム粒少量含む。粘性をもち、ややしまる。
- 3 10YR3/2黒褐色土層
ロームブロック少量含む。粘性をもち、ややしまる。

第10図 1号版築遺構

陶器6点, 平瓦1点, 丸瓦1点, 釘3点, 鉄滓17点, 礫80点が埋土の上・中・下層より出土している。出土遺物や遺構の形状などから判断して9世紀前葉, 平安時代の所産である可能性が高い。切り合い関係をみると1号溝に後続し, 1号柵列に先行する。

(4) 溝

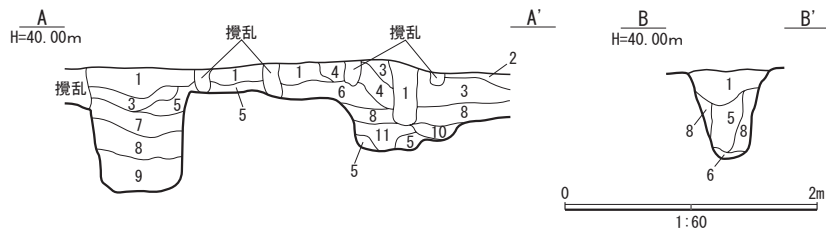
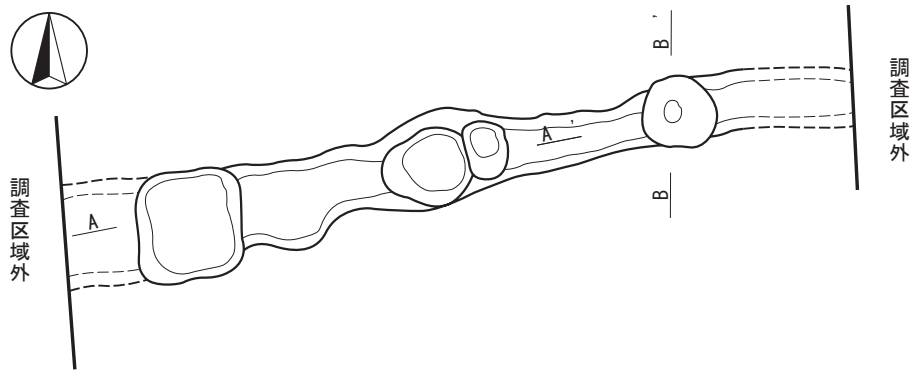
1号溝 調査区の南側に位置する。1号版築遺構に切られる。一部が確認されたのみであり, 全容は不明であるが, 1号版築遺構の中央部を北西から南東方向に走る。全長2.3m以上, 上幅3.0m以上, 底幅0.7~1.2m, 深さ1.8mを測る。推定主軸方向はN-60°-Wである。断面は逆台形状に近い。確認範囲は限られるが, 底面の標高は29.74mを測る。遺物は弥生土器片1点, 土師器片126点が出土している。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して9世紀前葉以前, 平安時代前葉以前の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると1号版築遺構に先行する。



第11図 1号溝

(5) 柵列

1号柵列 調査区の南側に位置する。1号版築遺構の北側を切る。一部が確認されただけであり, 全容は不明であるが, 1号版築遺構の北側をほぼ東西に走る。直径0.6~0.8m, 深さ0.7~1.0mの土坑状の掘り込みが布掘り状掘り込みに結ばれるように1.1mほどの間隔をあけて全長5.0m以上にわたって連続している。土坑状掘り込みの平面形は楕円形ないし隅丸方形, 断面は筒状に近い。推定主軸方向はN-10°-Eである。遺物の出土なかった。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が高い。切り合い関係をみると1号版築遺構に後続する。



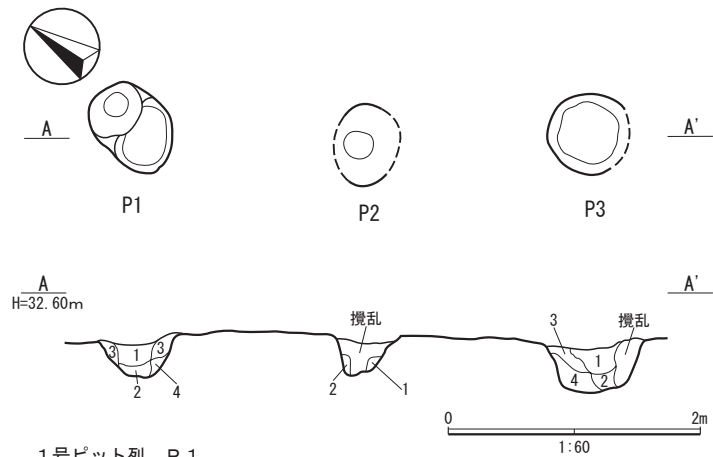
1号柵列

- | | | |
|----|----------------|--------------------------------------|
| 1 | 10YR4/1 褐灰色土層 | ローム粒・黒褐色土ブロック微量含む。やや粘性・しまりをもつ。 |
| 2 | 10YR4/2 灰黄褐色土層 | ローム粒少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 3 | 10YR4/2 灰黄褐色土層 | ローム粒・ロームブロック・黒褐色土ブロック含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 4 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ロームブロック粒微量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 5 | 10YR4/1 褐灰色土層 | ローム粒・黒褐色土粒微量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 6 | 10YR3/2 黒褐色土層 | ローム粒少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 7 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ローム粒・黒色土ブロック微量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 8 | 10YR2/3 黒褐色土層 | ロームブロック微量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 9 | 10YR3/1 黒褐色土層 | ローム粒・ロームブロック少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 10 | 10YR4/2 灰黄褐色土層 | ローム粒・灰白色粘土粒少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 11 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ロームブロック少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |

第12図 1号柵列

(6) ピット列

調査区の北端に位置する。東側に近接して1・2号竪穴住居跡が位置する。一部が確認されたのみであり、全容は不明であるが、直径60～71cm、深さ31～42cmの3基のピットが1.1～1.2mほどの間隔をおいて北西から南東方向に直線的に配列されている。ピットの平面形は円形ないし楕円形、断面は逆台形ないし逆円錐形を呈する。推定主軸方向はN-32°-Wである。遺物の出土はみられなかった。遺構の形状や覆土のあり方などから判断して古代以降の所産であった可能性が高い。(折原)



1号ピット列 P1

- | | | |
|---|---------------|----------------------------|
| 1 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ローム粒含む。やや粘性・しまりに欠ける。 |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色土層 | ローム粒微量含む。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。 |
| 3 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ローム粒微量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 4 | 10YR3/2 黒褐色土層 | ローム粒少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |

1号ピット列 P2

- | | | |
|---|---------------|-------------------------------|
| 1 | 10YR3/2 黒褐色土層 | ローム粒微量含む。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。 |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ロームブロック少量含む。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。 |

1号ピット列 P3

- | | | |
|---|---------------|-------------------------------|
| 1 | 10YR2/2 黒褐色土層 | ロームブロック少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |
| 2 | 10YR3/1 黒褐色土層 | ロームブロック少量含む。粘性をもち、しまる。 |
| 3 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ロームブロック少量含む。粘性をもつが、ややしまりに欠ける。 |
| 4 | 10YR3/3 暗褐色土層 | ロームブロック少量含む。粘性をもち、ややしまる。 |

第13図 1号ピット列

3-4 遺物

今回の調査地点からは縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、古代瓦、鉄鏃、鉄釘、鉄滓、陶器、礫などが遺物収納箱にして約7箱分、2,501点、92,854.4g出土した。遺物の主体は須恵器と土師器であり、須恵器の273点、10,628.3g、土師器の2,072点、56,074.4gを合計すると、点数比で出土遺物全体の約93%、重量比では約70%に達する。遺構別では1号版築遺構からの出土遺物が点数比で全体の約78%、重量比では約74%を占める。時間的には古墳時代末葉～奈良時代のものが中心である。

土器 縄文土器8点、弥生土器9点、須恵器279点、土師器2,072点、陶器1点が出土している。

縄文土器と弥生土器は1号版築遺構を中心に出土しており、当該土器に伴う遺構は今回の調査では未検出である。縄文土器は早期・中期・後期土器などが含まれるが、細片が多く、型式を特定できるものはない。弥生土器も同じく細片が多く、型式の明らかなものはみられない。

出土土器の主体を占める古墳時代～平安時代の遺物の8割近くは1号版築遺構から出土しているのに対し、堅穴住居跡からの出土は1割にもみえない。特に上面を1号堅穴住居跡に切られる2号堅穴住居跡からの遺物の出土は鉄鏃1点のみであり、上面を削平されている4号堅穴住居跡でも当該期の遺物は須恵器1点、鉄滓1点が出土しているにすぎない。

確認された須恵器は蓋・坏・高坏・高台付坏・盤・高台付盤・鉢・壺・甕・甑・羽釜とバラエティーに富んでいる。主体を占めるのは坏類と甕であり、時間的には7世紀後葉～8世紀前葉と8世紀後葉～9世紀前葉のほぼ二つのグループに大別される。1号版築遺構出土の坏20、蓋26・27・29～34・36などは7世紀後葉～8世紀初頭、1号堅穴住居跡出土の坏1、高台付坏2、蓋3、壺4、3号堅穴住居跡出土の蓋7～12、高台付盤13、4号堅穴住居跡出土の高台付坏19、1号版築遺構出土の高台付坏21～23、高坏24・25、高台付盤37などは8世紀後葉～9世紀前葉に比定される。1号版築遺構出土の高台付坏23や高坏24、高台付盤37は特徴的な器形からみて寺院あるいは官衙に関連する遺物である可能性が高い。3号堅穴住居跡を中心とした大小多量の蓋の出土ともあわせて、本地点を舞台にした土地利用のあり方を考える上でも注目される資料といえる。特に蓋9は口径24cmと大型品であり、その用途が注意される。また、高台付坏2は内面が硯に転用されている。1号版築遺構確認面出土の羽釜55・56も近隣では類例の少ない資料である。生産地としては在地の木葉下窯跡群産や新治窯跡群産を主体とするが、1号版築遺構出土の甕51の須恵器は、湖西窯跡群産の搬入品と思われる。

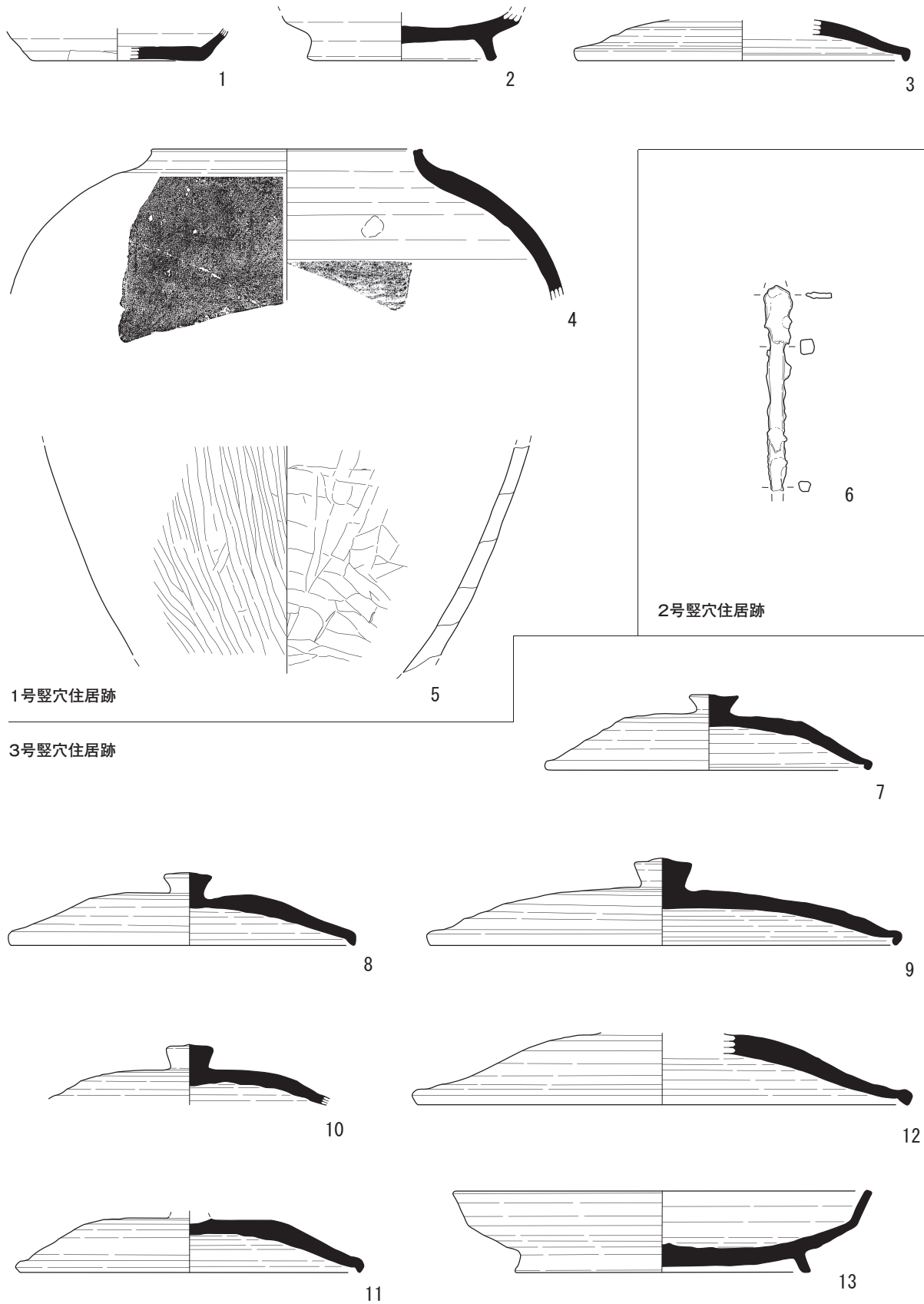
土師器は坏・高坏・埴・鉢・壺・甕・甑などが出土している。坏類と甕が主体を占めるのは須恵器の場合と変わらないが、時間的には7世紀後葉が中心である。坏65・66は赤彩品である。また、坏73は内面に漆状物質を塗布後、2条1単位の放射状暗文を描いている。栃木県下において出土例の多い漆塗り土器との関連が注意される。坏69～71は特徴的な胎土や色調、調整、器形などからみて畿内系土師器の可能性も考えられる。坏59・68・75などには黒色付着物が認められる。甕5・14・84・89・107～110・115・116・128などは常総型甕である。甕98の口縁部外面には赤彩が施されている。

陶器は表面採集された瀬戸・美濃系琿が1点出土しているのみである。細片であり、正確な時期などは不明である。

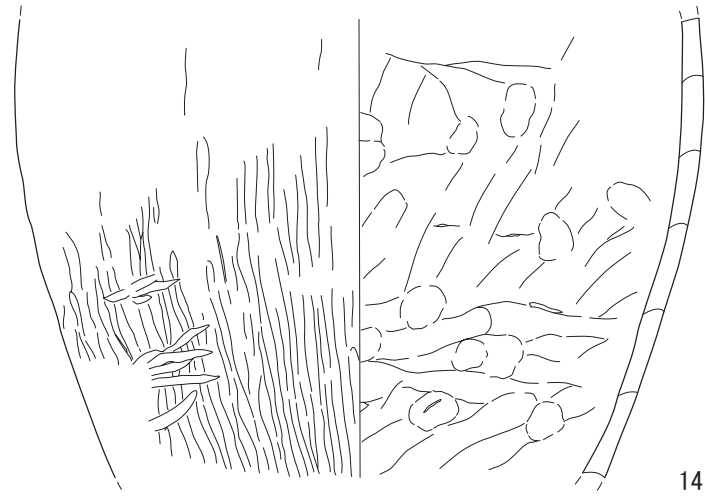
瓦 3号竪穴住居跡と1号版築遺構を中心に軒丸瓦1点、平瓦13点、丸瓦1点が出土している。時間的には奈良時代例を主体としていたと考えられるが、近隣に瓦が葺かれていたと考えられる台渡里廃寺や正倉群が存在していたことなどを考慮すると、出土量は限定的である。凸面調整の内訳は、平瓦が正格子目叩き2点(16)、長縄圧痕6点(18)、ヘラケズリ調整2点(17)、泥条版築技法を用いたもの1点(127)である。丸瓦はヘラケズリ調整1点(126)、軒丸瓦は瓦当面が欠損しているが、ヘラケズリ調整1点(15)である。泥条版築技法の平瓦とヘラケズリ調整の丸瓦は1号版築遺構からの出土、残りはすべて3号竪穴住居跡からの出土であり、後者の多くはカマドの構築材として利用されていることが注目される。

金属製品 鉄鏃1点、釘6点、鉄滓25点が確認されている。1号竪穴住居跡と1号版築遺構からの出土が中心であり、1号竪穴住居跡では釘1点、鉄滓5点、1号版築遺構では釘3点、鉄滓17点の出土が確認されている。長茎の鉄鏃6は2号竪穴住居跡からの出土である。

文字資料 文字資料としては、3号竪穴住居跡出土軒丸瓦15の丸瓦部凹面に残されたヘラ書き、1号版築遺構出土須恵器高台付坏23の坏部底部に残されたヘラ記号、同じく1号版築遺構出土須恵器甕50の胴部に残されたヘラ記号、1号拡張区出土須恵器甕132の頸部に残されたヘラ記号の4点がある。15は「中寺」とも「仲寺」読めるが、表面の剥離が激しく、詳細は不明である。(折原)



第 14 图 出土遺物 (1)



0 (1:3) 10cm
(14~15)

第15図 出土遺物(2)

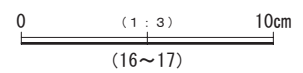
3号竖穴住居跡



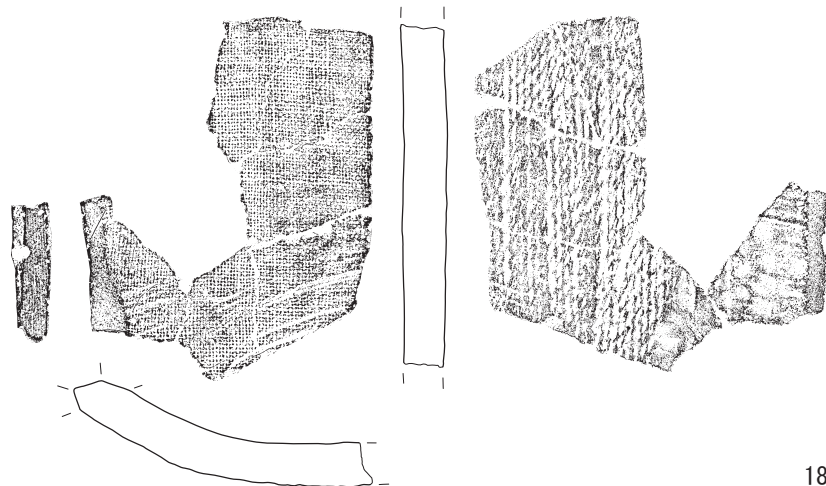
16



17



第16図 出土遺物(3)

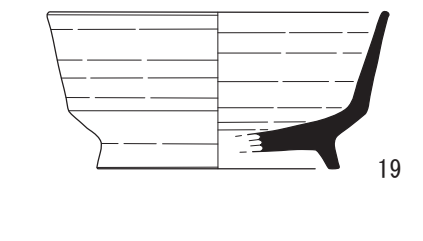


18

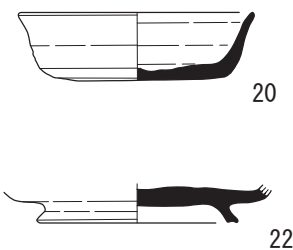
3号竖穴住居跡

4号竖穴住居跡

1号版築遺構

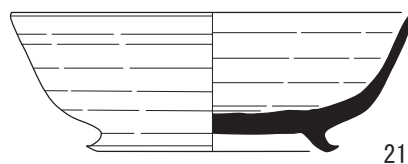


19

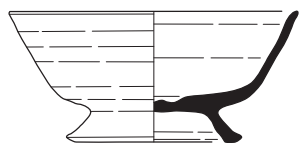


20

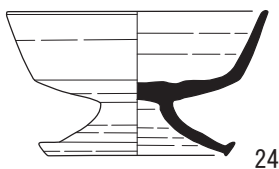
22



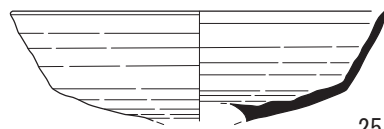
21



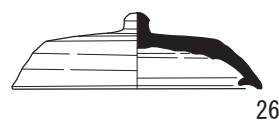
23



24



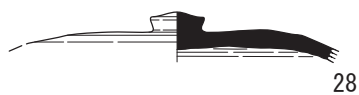
25



26



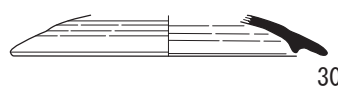
27



28



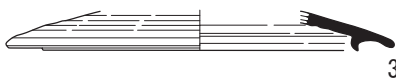
29



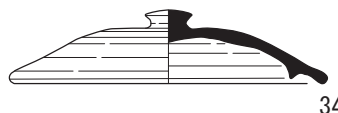
30



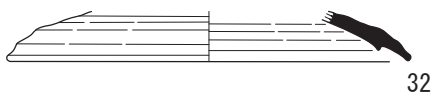
31



33



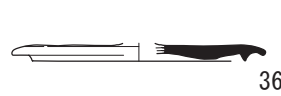
34



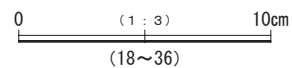
32



35



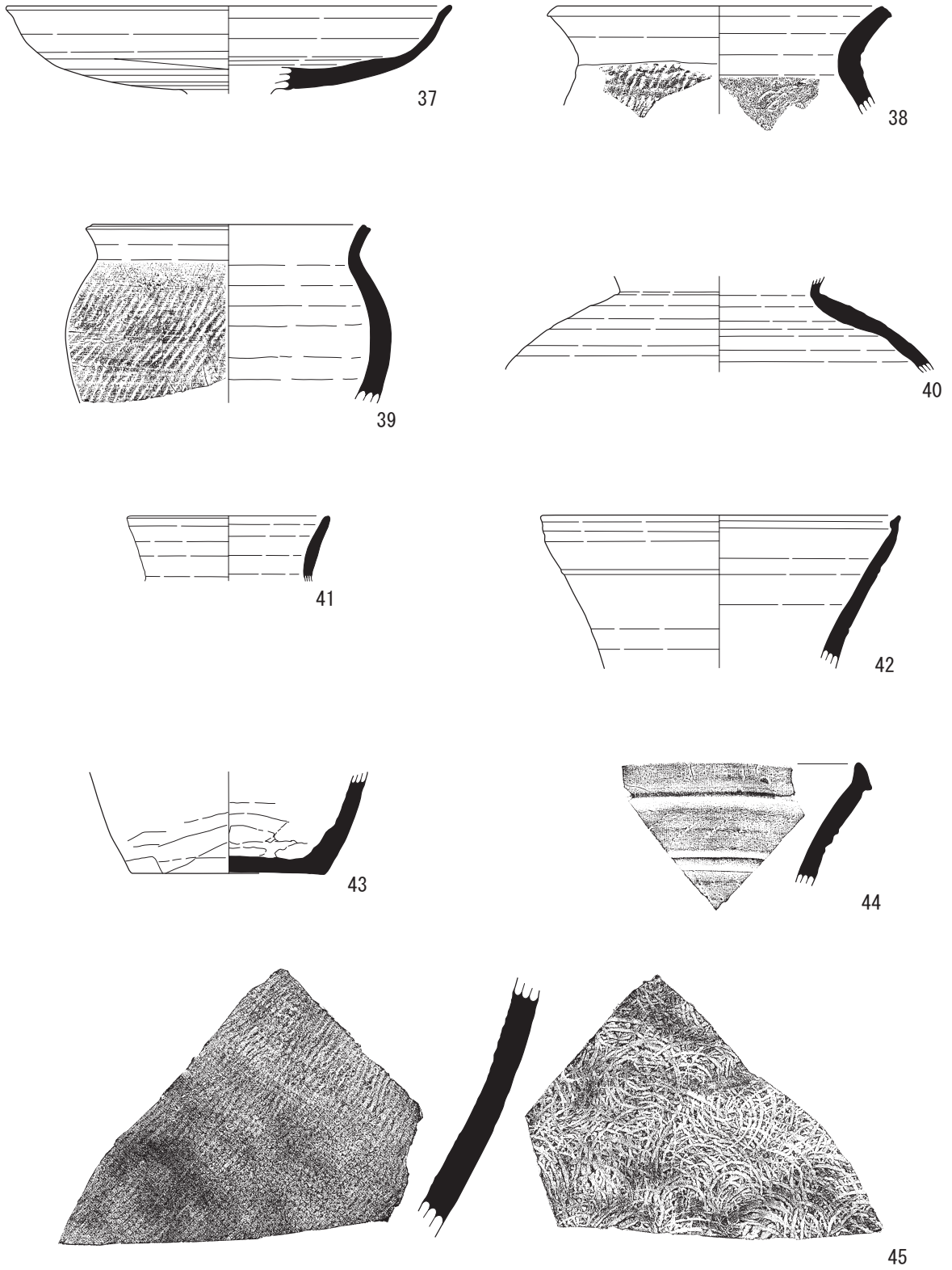
36



(18~36)

第17図 出土遺物(4)

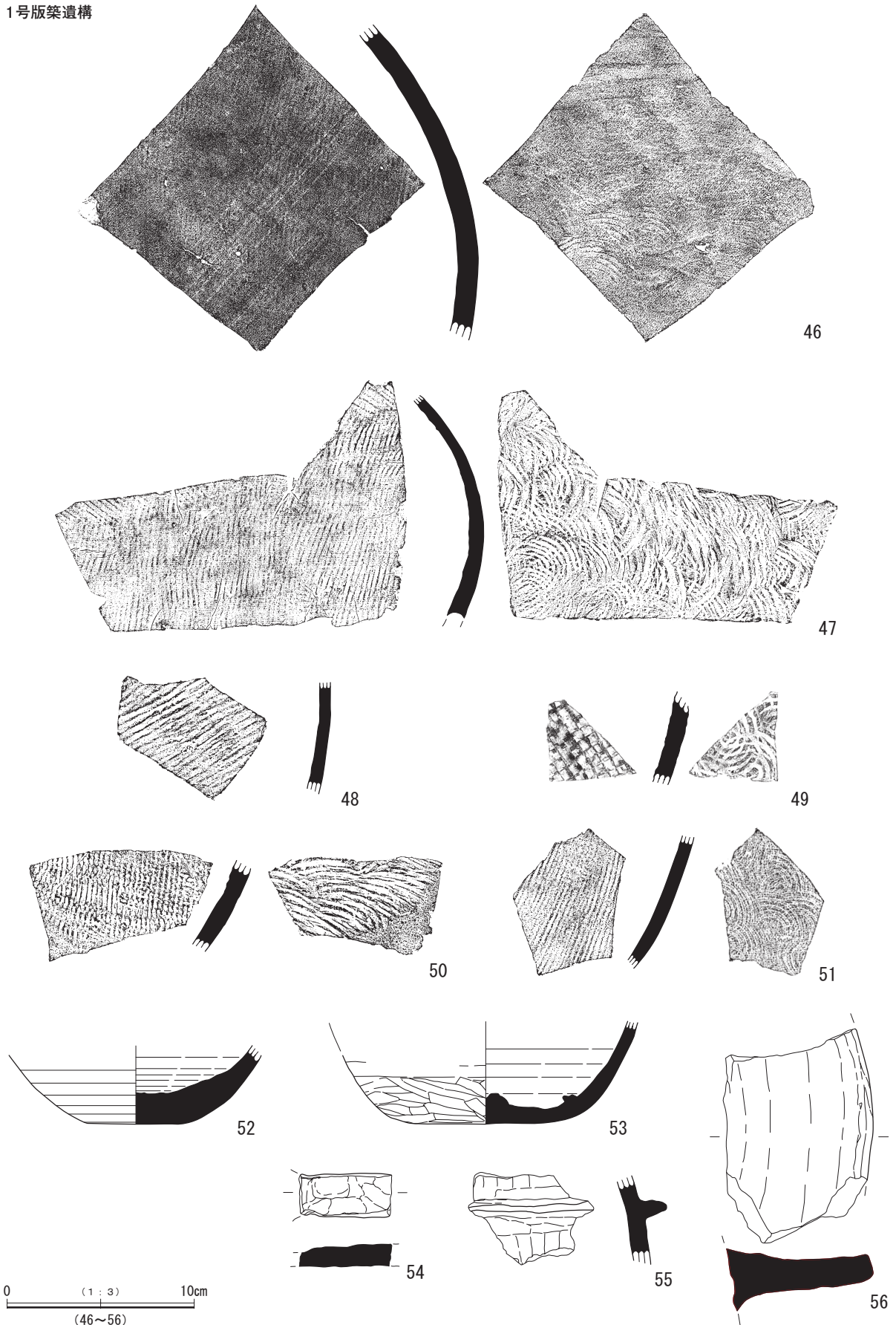
1号版築遺構



0 (1:3) 10cm
(37~45)

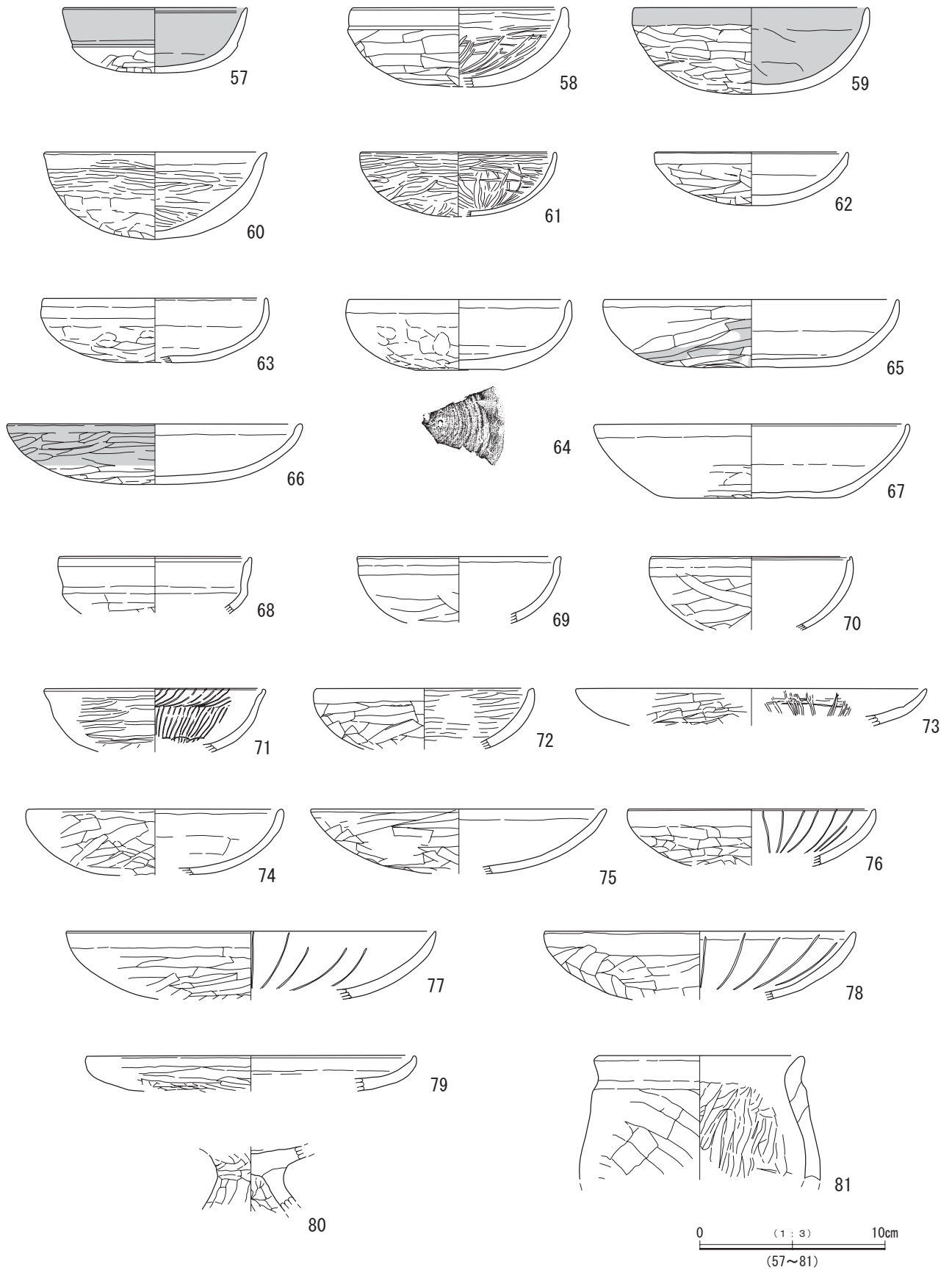
第18図 出土遺物(5)

1号版築遺構



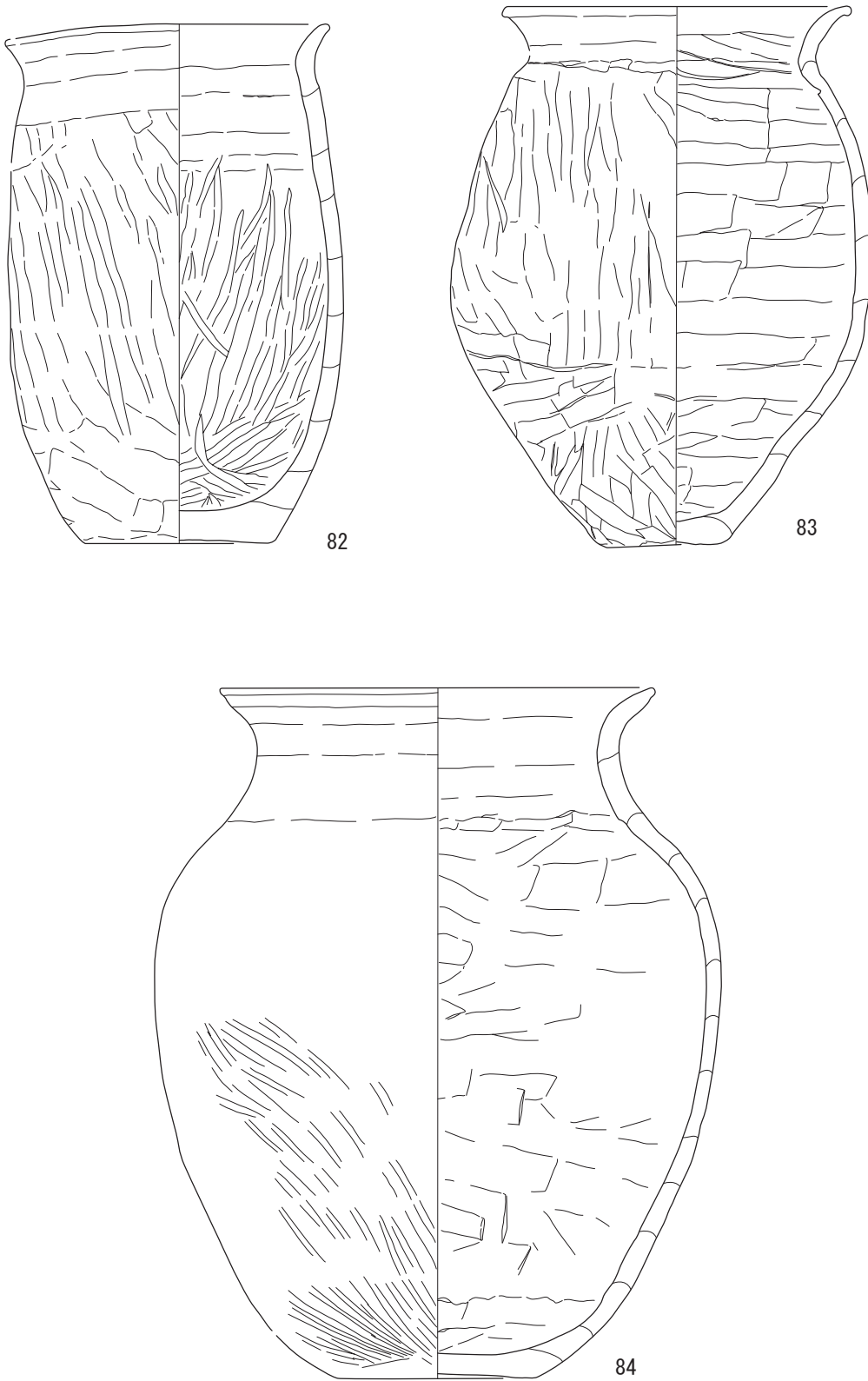
第19図 出土遺物(6)

1号版築遺構



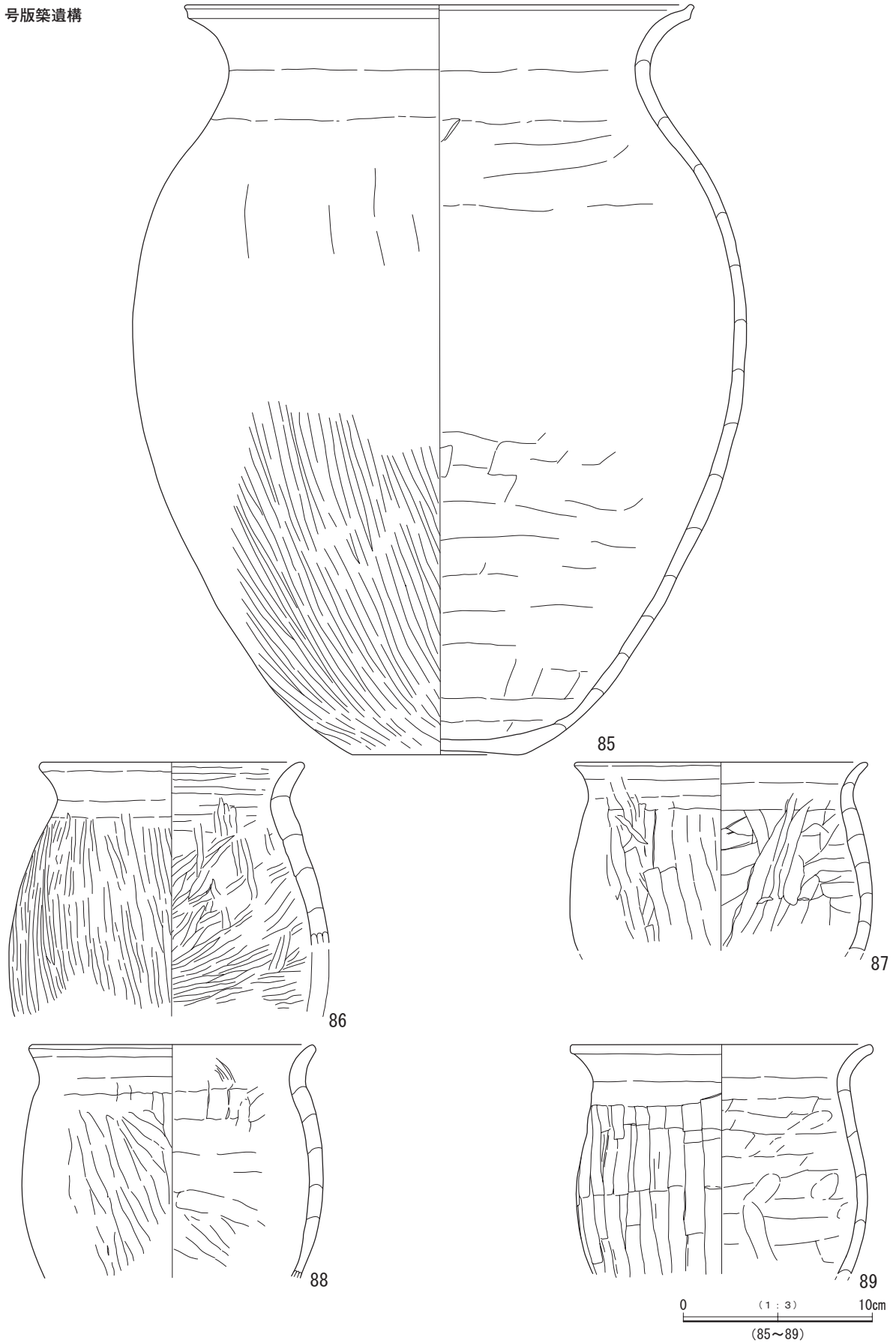
第20図 出土遺物(7)

1号版築遺構



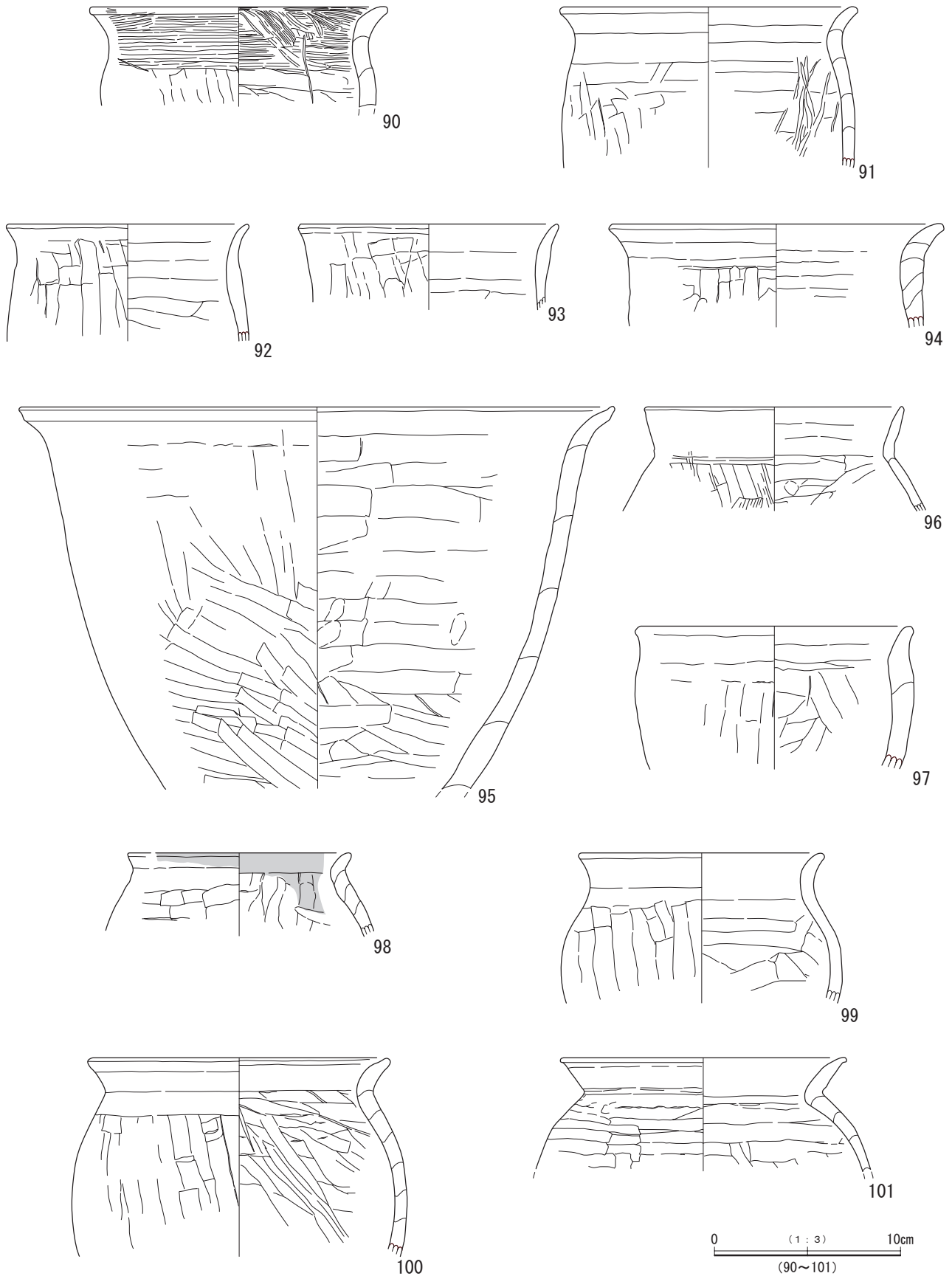
第 21 図 出土遺物 (8)

1号版築遺構



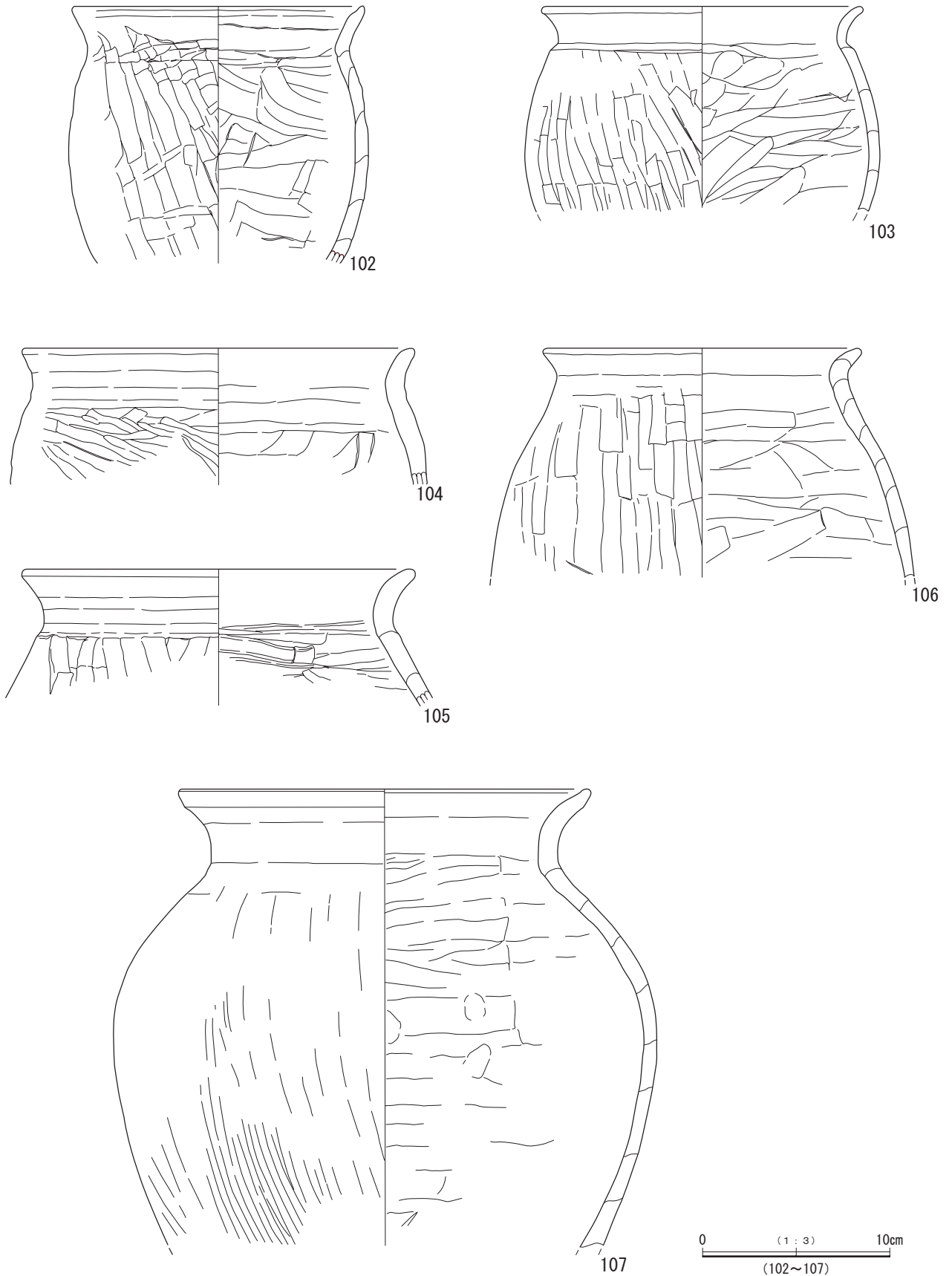
第22図 出土遺物(9)

1号版築遺構



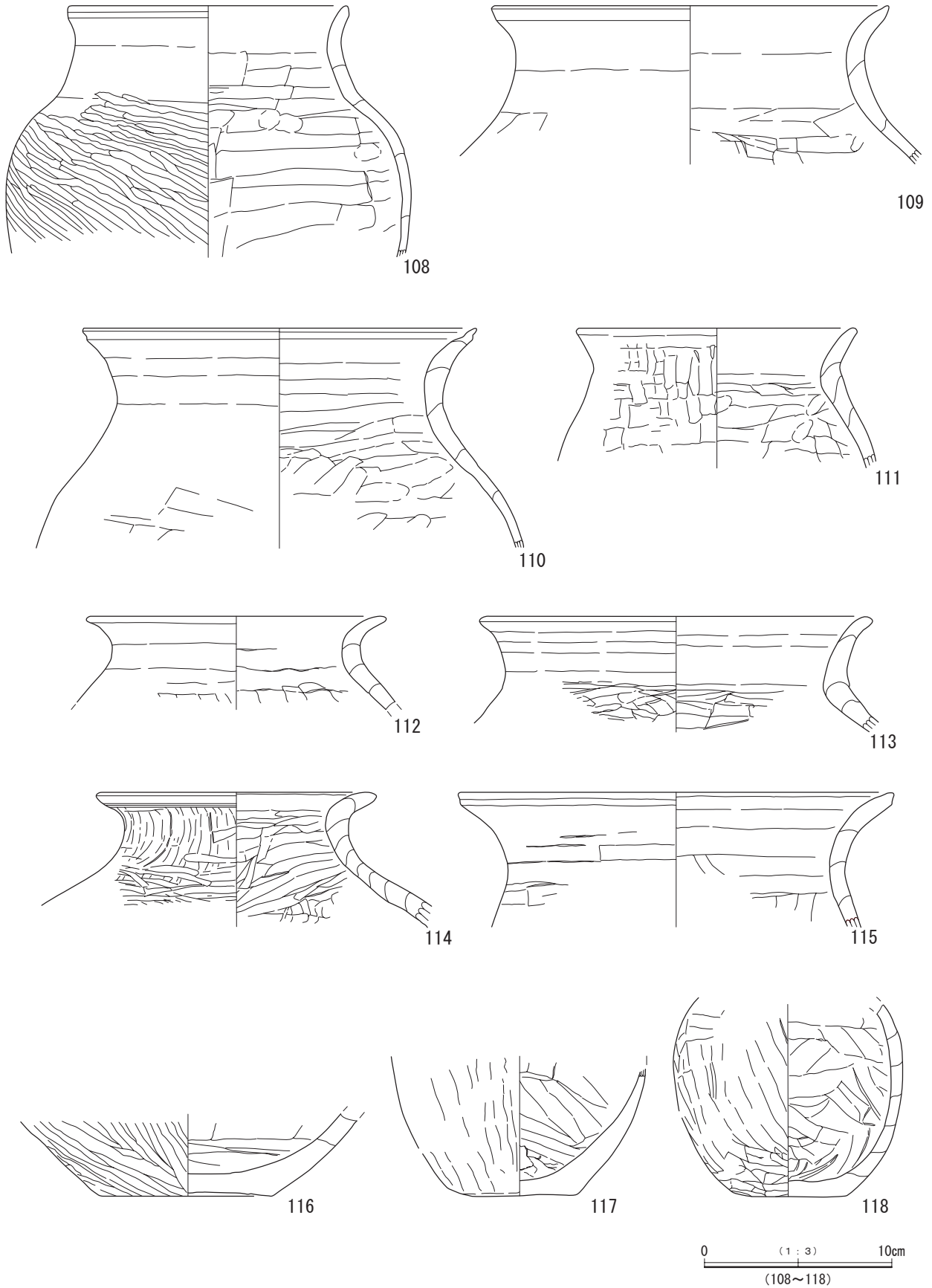
第23図 出土遺物(10)

1号版築遺構



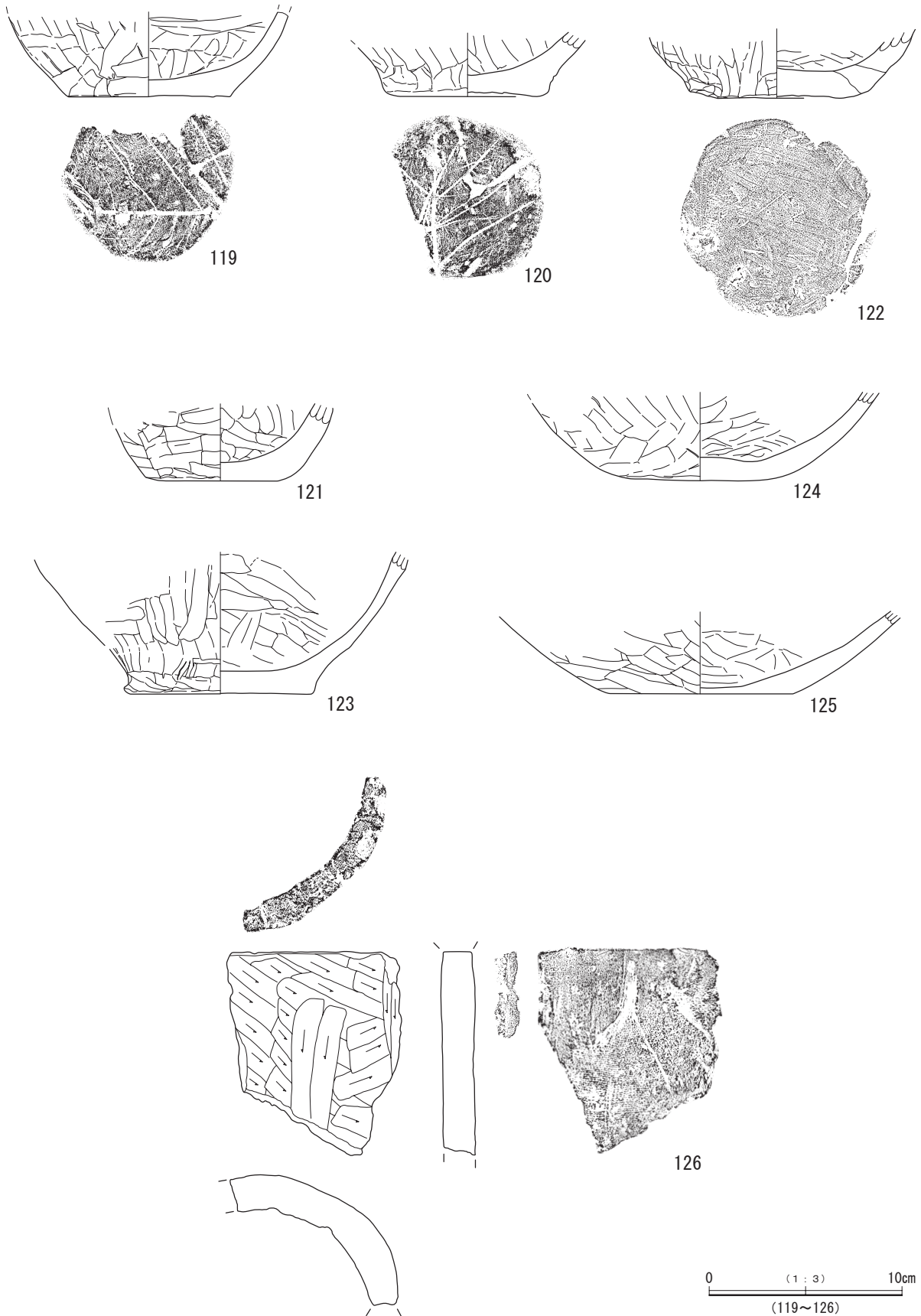
第 24 図 出土遺物 (11)

1号版築遺構



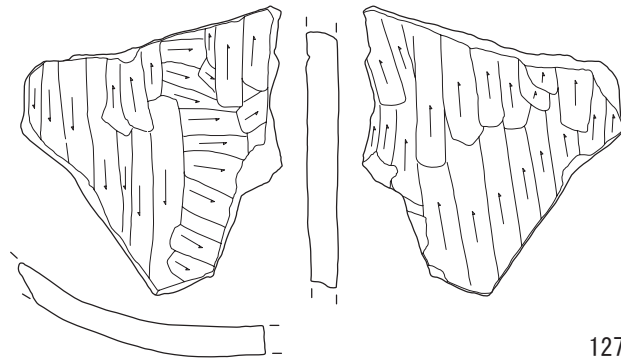
第25図 出土遺物(12)

1号版築遺構



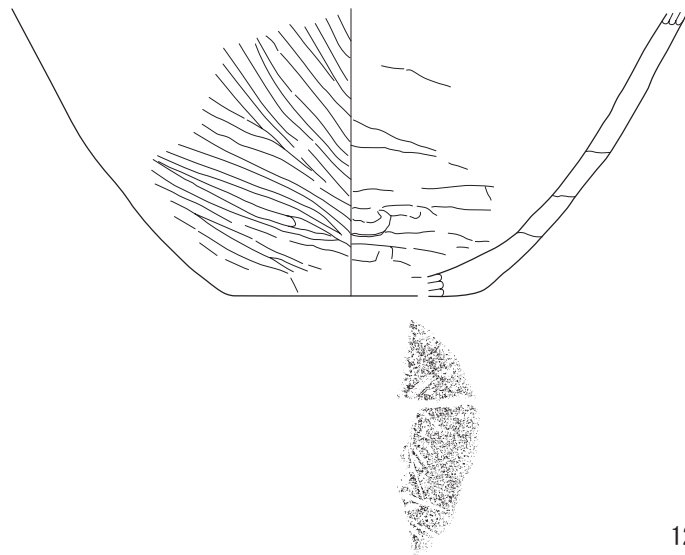
第26図 出土遺物(13)

1号版築遺構



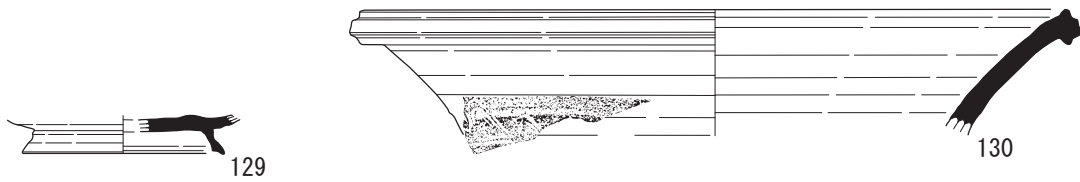
127

1号溝



128

表土一括



1号拡張区一括



0 (1:3) 10cm
(127~132)

第27図 出土遺物 (14)

第3表 出土遺物属性一覧

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
1	1号竪穴住居跡	須恵器	坏	体部～底部	20	-	(9.0)	(1.7)	平底で体部が外反。胴部外面下端横方向手もちヘラケズリ。内面から底部内面回転ナデ。底部外面一方手もちヘラケズリ。	雲母片を多量 白色粒子・砂粒を少量	×	良好	新治窯跡群産	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：7.5YR8/6 浅黄褐色	底部内外面煤付着。
2	1号竪穴住居跡	須恵器	高台付坏	体部下 端～底 部	30	-	高台部 径 (9.8)	<2.5>	高台部がやや厚みを帯び、「ハ」字状に開く。体部内面回転ナデ、底部外面左回転ヘラ切り難し後未調整。高台部貼り付け。	白色粒子・砂粒・ チャートを少量	×	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y8/1 灰白色	内面転用硯。外面の一部に煤付着。
3	1号竪穴住居跡	須恵器	蓋	天井部 ～端部	20	(17.0)	-	<2.1>	天井部形状は不明。かえりなし。端部外面面取りして垂下。天井部外面上位左回転ヘラケズリ。下位左回転ナデ。内面右回転ナデ。端部側面回転ナデ。	チャートを少量 白・黒色粒子を 微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：7.5Y6/1 灰色	
4	1号竪穴住居跡	須恵器	短頸壺	口縁部 ～胴部	20	(13.9)	-	<7.8>	口唇部上端を面取り。口縁部短く垂直に立ち上がる。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向平行叩き後左回転ナデおよびナデ、内面上位左回転ナデ。中位青海波文。指紋あり。	白色粒子・砂粒 を多量 黒色粒子・チャ ートを少量	×	良好	木葉下窯跡群産	内外面：N5/ 灰色	
5	1号竪穴住居跡	土師器	甕	胴部	10	-	-	<11.7>	胴部直線的に立ち上がる。最大径の位置は不明。胴部外面横方向ヘラケズリ後ナデ後斜方向ヘラミガキ。内面多方向ヘラナデ後ナデ。下端横方向ヘラナデ。下端輪積みの割れ。	白色粒子・チャ ートを少量 雲母片を多量	×	良好	-	外面：10YR6/4 にぶい黄褐色 内面：10YR17/1 黒色	常総型甕。
6	2号竪穴住居跡	鉄製品	鉄簇	鐵身部 ～基部	60	鐵身長 (2.4)	鐵身幅 (1.3)	全長 (10.8)	鐵身部がやや長い柳刀型鉄簇。鑿筋で基部は長い。	-	-	-	-	-	鐵身部厚 (0.4) 基部長 (8.4) 22.4g
7	3号竪穴住居跡	須恵器	蓋	天井部 ～端部	70	(17.0)	-	3.9	天井部形状皿状。かえりがなく、端部は玉縁状でわずかに内側に折れ込む。紐は頂部が突出しない擬宝珠状。天井部外面右回転ヘラケズリ。内面右回転ナデ。	白色粒子・チャ ートを少量 黒色粒子を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y6/1 黄灰色	つまみ径 2.5。 紐高 1.0 cm。
8	3号竪穴住居跡	須恵器	蓋	天井部 ～端部	60	17.9	-	3.8	天井部形状皿状。かえりがなく、端部側面を面取りして短く垂下させる。紐は頂部が突出する擬宝珠状。天井部外面右回転ヘラケズリ。内面右回転ナデ。	白色粒子・チャ ートを少量 黒色粒子を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y5/1 黄灰色	つまみ径 2.5。 紐高 1.1 cm。
9	3号竪穴住居跡	須恵器	蓋	略完形	95	24.0	-	4.5	大型品。天井部形状皿状。かえりがなく、端部は玉縁状でわずかに内側に折れ込む。紐は頂部が突出する擬宝珠状。天井部外面右回転ヘラケズリ。内面右回転ナデ。外面全面に自然釉。	白色粒子・チャ ートを少量 黒色粒子を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	外面：5Y4/1 灰色 内面：2.5Y5/1 黄灰色 釉：10Y4/2 炒-ブ灰色	つまみ径 2.9。 紐高 1.6 cm。
10	3号竪穴住居跡	須恵器	蓋	天井部	60	残存径 14.8	-	<3.1>	天井部形状皿状。紐は擬宝珠状。かえりは不明。天井部外面右回転ヘラケズリ。内面右回転ナデ。内面ロクロ目顕著。	白色粒子・砂粒・ チャートを少量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y5/1 黄灰色	つまみ径 2.4。 紐高 1.0 cm。
11	3号竪穴住居跡	須恵器	蓋	天井部 ～端部	90	17.6	-	<2.8>	天井部形状は皿状。かえりはなく、端部は外面を面取りしてわずかに内側に折れ込む。紐欠損。天井部外面左回転ヘラケズリ。内面左回転ナデ。	チャートを多量 、砂粒を少量、 白色粒子を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	外面：5YR5/3 にぶい赤褐色 内面：5Y5/1 褐色	赤焼け。
12	3号竪穴住居跡	須恵器	蓋	天井部 ～端部	40	(25.6)	-	(3.7)	天井部形状は笠状。かえりなし。端部は短くわずかに内側へ折れ込む。紐欠損。天井部外面右回転ヘラケズリ後ナデ。内面右回転ナデ。天井部外面に自然釉。	チャートを多量 白色粒子・砂粒 を少量	○	良好	木葉下窯跡群産	外面：2.5Y8/2 灰白色 内面：5Y6/1 灰色	
13	3号竪穴住居跡	須恵器	高台付盤	口縁部 ～底部	60	(21.3)	(15.4)	4.2	体部中央部で角度を変えて、口縁部外傾。体部下位がわずかに丸みを帯びる。高台部は「ハ」字状に開く。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面回転ナデ。一部に指紋。内面から見込み部右回転ナデ。底部外面右回転ヘラ切り難し後弱いナデ。高台部貼り付け。ロクロ目が顕著。	白色粒子・砂粒・ チャートを少量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y5/1 黄灰色	見込み部に焼成時の付着物。
14	3号竪穴住居跡	土師器	甕	胴部	40	-	-	17.0	胴部直線的に立ち上がる。最大径の位置は不明。胴部外面中位ナデ。下位ナデ後斜方向ヘラミガキ。内面多方向ヘラナデ後ナデ。指頭痕。	白色粒子・砂粒・ チャートを少量	×	良好	-	内外面：10YR4/3 にぶい黄褐色	常総型甕。
19	4号竪穴住居跡	須恵器	高台付坏	口縁部 ～底部	50	(13.4)	(9.7)	6.2	体部下位で角度を変えて、口縁部わずかに外反する。高台部は「ハ」字状に開く。口縁部ヨコナデ。体部内外面および見込み部左回転ナデ。底部外面左回転ヘラ切り難し後右回転ナデ。高台部貼り付け。	黒色粒子・チャ ートを少量 白色粒子を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	外面：N4/ 灰色 内面：2.5Y7/1 灰白色	

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
20	1号版築遺構	須恵器	坏	口縁部～底部	60	(9.2)	(6.7)	2.7	平底で体部中位で角度を変え、口縁部は外反。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面手もちナデ、内面回転ナデ後丁寧ナデ。見込み部左回転ナデ、一部に指紋。底部外面左回転ヘラ切り離し後全面手もちヘラケズリ後ナデ。ロクロ目が顕著。	砂粒・チャートを少量 白・黒色粒子を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：5Y5/1 灰色	
21	1号版築遺構	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	40	(15.9)	(10.0)	5.5	口縁部は外傾、体部下位は丸みを帯びる、高台部「ハ」字状に開く。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面左回転ナデ後ナデ、内面左回転ナデ、見込み部右回転ナデ、底部外面右回転ヘラ切り離し後手もちナデ。高台部貼り付けで内側で接地。	白色粒子・砂粒・チャートを少量 雲母片・長石を微量	×	良好	新治窯跡群産	内外面：2.5Y8/1 灰白色	
22	1号版築遺構	須恵器	高台付坏	体部～底部	30	-	高台部径8.0	(1.5)	高台部「ハ」字状に開く。体部内外面下端および見込み部左回転ナデ。底部外面左回転ヘラ切り離し後未調整。高台部貼り付けで外側で接地、端部の中央部がやや窪む。	白色粒子・砂粒を少量、チャートを少量	○	良好	新治窯跡群産	外面：2.5Y7/4 浅黄色 内面：2.5Y6/2 灰黄色	底部外面に焼成時由来の亀裂あり。
23	1号版築遺構	須恵器	高台付坏	口縁部～底部	60	(11.3)	7.0	5.2	口縁部外反、体部下位丸みを帯びる、高台部「ハ」字状に開く。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右回転ナデ後ナデ、内面左回転ナデ後ナデ。見込み部やや中央部が窪み左回転ナデ後丁寧ナデ、底部外面方向不明の回転ヘラ切り離し後丁寧ナデ。高台部貼り付けで内側で接地。内外面回転ナデ後丁寧ナデ。	白・黒色粒子・チャートを少量 砂粒を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y6/1 黄灰色	坏部底部外面にヘラ記号。見込み部に焼成時の付着物。器形より寺院・官衙関連の遺物カ。
24	1号版築遺構	須恵器	高坏	口縁部～底部	60	(10.3)	(7.2)	5.7	口縁部外傾、体部直線的、脚部短く、高坏様の接合。裾部端部上端外面を面取りして、上方に揃み上げる。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面右回転ナデ後丁寧ナデ手もちナデ、内面および見込み部左回転ナデ後丁寧ナデ手もちナデ。底部外面左回転ヘラ切り離し後ナデ。高台部貼り付けで内側で接地。内外面左回転ナデ後丁寧ナデ。	白・黒色粒子・チャートを少量 長石を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：5Y5/1 灰色	器形より寺院・官衙関連の遺物カ。
25	1号版築遺構	須恵器	高坏	口縁部～底部	50	(14.8)	-	<4.4>	丸底で体部中位で角度を変え、口縁部が外傾。口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面左回転ナデ、底部外面左回転ヘラ切り後回転ナデおよび手もちナデ。ロクロ目顕著。	白・黒色粒子・チャートを少量	○	良好	新治窯跡群産	内外面：10YR6/1 褐灰色	
26	1号版築遺構	須恵器	蓋	完形	100	9.9	-	3.0	天井部形状は皿状。かえりもち、玉縁状の端部がY字状に開く。接地面は端部。紐は乳頭状。天井部外面右回転ヘラケズリ、内面右回転ナデ。	白色粒子・砂粒を少量、雲母片を微量	×	良好	新治窯跡群産	内外面：10YR6/6 明黄褐色	かえり径8.2、つまみ径1.0、紐高0.7cm。坏Gと組み合う。
27	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	30	(11.8)	-	3.2	天井部形状は皿状。鋭角なかえりを垂下。玉縁状の端部がY字状に開く。紐は擬宝珠状。かえりて接地。天井部外面右回転ヘラケズリ、内面左回転ナデ。	白色粒子・砂粒を少量、長石を微量	×	良好	木葉下窯跡群産	外面：2.5Y5/1 黄灰色 内面：2.5Y6/1 黄灰色	かえり径(10.0)、つまみ径2.0、紐高0.8cm。
28	1号版築遺構	須恵器	蓋	紐部～天井部	60	-	-	(2.0)	天井部形状は皿状。断面形は鋭角のかえりが長く垂下。端部側面以下を欠損。紐は擬宝珠状。天井部外面左回転ヘラケズリ、内面左回転ナデ。天井部外面自然釉および酸化鉄付着。	白・黒色粒子を少量 チャート・長石を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：N5/ 灰色 釉：N7/ 灰白色	紐高0.7cm。
29	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	40	(10.0)	-	<1.8>	天井部形状は笠状。断面形は鋭角のかえりが長く垂下。端部側面上位および側面の2面を回転ヘラケズリによる面取り。かえりと端部が接地。天井部外面回転ナデ後ナデ、内面右回転ナデ。天井部外面に自然釉。	白・黒色粒子・砂粒を少量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：10YR5/1 褐灰色 釉：10YR8/1 灰白色	かえり径(7.6)。
30	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	10	(12.6)	-	<1.6>	天井部形状は不明。鋭角なかえりが垂下。端部の折れ込みなし。かえりと端部が接地。天井部回転方向不明の回転ヘラケズリ後回転ナデ、内面回転ナデ後ナデ。	白・赤色粒子を少量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：5Y7/1 灰白色	かえり径(10.6)。
31	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	10	(12.0)	-	<1.5>	天井部形状は笠状。断面形は鋭角のかえりが外反。端部の折れ込みなし。かえりと端部が接地。紐は欠損。天井部外面右回転ヘラケズリ、内面回転ナデ後ナデ。端部側面上位回転ヘラケズリによる面取り。	白・黒色粒子・砂粒・チャートを少量 長石を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：N5/ 灰色	かえり径(13.6)。

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
32	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	10	(16.0)	-	<2.0>	天井部形状皿状。天井部より端部に向かい2回角度を変える。丸みを帯び短いかえりが外反。端部の折れ込みなし。端部で接地。天井部外面右回転ヘラケズリ、内面右回転ナデ。	白色粒子・砂粒を少量 チャートを微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：10YR8/4 浅黄橙色	かえり径(14.4)。
33	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	10	(15.4)	-	<1.6>	天井部形状は笠状。断面形が鋭角で長いかえりがわずかに外反。端部の折れ込みなし。端部とかえりで接地。天井部内外面右回転ナデ後ナデ。端部側部上位にヘラケズリによる面取り。	チャートを多量 白色粒子を少量	○	良好	木葉下窯跡群産	外面：N4/ 灰色 内面：N5/ 灰色	かえり径(19.6)。
34	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	40	(12.4)	-	2.9	天井部形状は皿状。やや丸みを帯びるかえりをもつ。端部は肥厚して玉縁状。端部で接地。紐は扁平擬宝珠状。天井部外面右回転ヘラケズリ、内面手もちナデ、一部に指紋。	砂粒を少量、白・黒色粒子を微量	×	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y8/2 灰白色	かえり径(9.8)、 つまみ径1.9、 紐高0.7cm。
35	1号版築遺構	須恵器	蓋	紐部～天井部	細片	-	-	1.7	天井部形状は不明。紐は下端部が大きく窄まり、頂部が突出する扁平擬宝珠状。紐部右回転ナデ。天井部外面右回転ヘラケズリ、内面右回転ナデ後ナデ。	白色粒子・砂粒・チャートを少量	×	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y7/2 灰黄色	つまみ径3.0、 紐高1.2cm。
36	1号版築遺構	須恵器	蓋	天井部～端部	25	(10.0)	-	(0.7)	天井部形状は平坦。かえりもち、鋭角なかえりがわずかに外反する。端部はわずかに玉縁状。かえりで接地。紐は欠損。天井部内外面回転ナデ後丁寧な手もちナデ。天井部外面に自然釉。	白・黒色粒子を微量	×	良好	木葉下窯跡群産	外面：N6/ 灰色 内面：2.5Y4/1 黄灰色	かえり径(8.4) 器形より壺蓋カ。
37	1号版築遺構	須恵器	台付盤	坏部口縁部～底部	25	(21.8)	-	(4.3)	口縁部が外反、体部は丸みを帯びる。脚部欠損。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位および内面左回転ナデ、下位左回転ヘラケズリ、見込み部ナデ。	白色粒子を多量、砂粒を少量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：10Y5/1 灰色	
38	1号版築遺構	須恵器	鉢	口縁部～胴部	10	(16.0)	-	(5.3)	口唇部上端を面取り、口縁部大きく外反。最大径の位置は口縁部。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面斜格子目叩き後ナデ、内面斜方向ヘラナデ。	砂粒を少量 白・黒色粒子・チャートを微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：5Y6/1 灰色	
39	1号版築遺構	須恵器	小型壺	口縁部～胴部	30	(13.3)	-	(8.8)	口唇部上面面取り、口縁部わずかに外反。最大径の位置は胴部中央。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位ナデ、中位斜方向平行叩き、内面右回転ナデ。	チャートを少量、白色粒子・砂粒を微量	×	良好	木葉下窯跡群産	外面：10YR8/1 灰白色 内面：10YR7/1 灰白色	口縁部の内外面に焼成時の付着物。外面被熱。
40	1号版築遺構	須恵器	広口壺	頸部～胴部	10	-	-	<4.7>	頸部「く」字状に折れる。胴部内外面回転ナデ後丁寧なナデ。胴部外面釉の剥がれが目立つ。	白色粒子を微量	×	良好	搬入品 湖西窯跡群産	内外面：2.5Y7/1 灰白色	外面全面に黒色滲出物付着。
41	1号版築遺構	須恵器	短頸壺	口縁部	10	(9.8)	-	<3.2>	口縁部やや外反。口縁部内外面上端ヨコナデ、上位以下外面左回転ナデ、内面右回転ナデ。	白色粒子・砂粒を多量 チャートを微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：5Y6/1 灰色	
42	1号版築遺構	須恵器	長頸壺	口縁部～胴部	30	(17.4)	-	<7.5>	口唇部がわずかに内傾して上端がY字状。口縁部は外傾して下位はわずかに膨らみをもつ。口縁部外面ヨコナデ、中位に2条の沈線を横走。内面は調整不明。	砂粒を多量、黒色粒子・チャートを少量	×	良好	木葉下窯跡群産	外面：10YR5/1 褐灰色 内面：10YR6/1 褐灰色	内面全面に焼成時の付着物および斑に自然釉。
43	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部～底部	30	-	9.6	(5.0)	胴部がわずかに内湾しながら立ち上がる。最大径の位置は不明。胴部外面横方向ヘラナデ後ナデ、下端部横方向ヘラケズリ後ナデ。内面および見込み部粗雑なナデ、輪積み痕顕著。底部外面切り離し技法不明後丁寧なナデ。	雲母片を多量、砂粒を少量	×	良好	新治窯跡群産	内外面：10YR6/6 明黄褐色	
44	1号版築遺構	須恵器	甕	口縁部	細片	-	-	-	口唇部はT字状で側面を回転ナデによる面取り、口縁部が長く外傾。口縁部外面2条の平行沈線で上下に区画、区画内に歯状工具による連続刺突文。口縁部内面ナデ。	黒色粒子を多量	×	良好	東海系搬入品	外面：2.5Y5/1 黄灰色 内面：10YR6/1 褐灰色	
45	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部	10	-	-	-	胴部外面細正格子目叩き後ナデ、内面青海波文。胴部外面に釉。	白・黒色粒子を少量 チャートを微量	×	良好	木葉下窯跡群産	外面：N4/ 灰色 内面：5Y5/1 灰色	
46	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部	10	-	-	-	胴部外面縦方向平行叩き後ナデ、内面青海波文後ナデ。	白色粒子・チャートを少量	○	良好	木葉下窯跡群産	外面：N7/ 灰白色 内面：N5/ 灰色	
47	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部	細片	-	-	(7.8)	胴部外面多方向平行叩き後ナデ、胴部内面青海波文。	砂粒・チャートを少量、白色粒子を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：N5/ 灰色	
48	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部	細片	-	-	(4.5)	胴部外面斜方向平行叩き、内面上位横方向ヘラナデ、下位ナデ。	白色粒子・砂粒・チャートを少量	×	良好	木葉下窯跡群産カ	外面：N2/ 黒色 内面：N3/ 暗灰色	胴部外面黒色化。

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
49	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部	細片	-	-	-	胴部外面正格子目叩き痕、内面青海波文。	白色粒子を少量 黒色粒子・チャート微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：N6/ 灰色	
50	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部	細片	-	-	(4.2)	胴部外面正格子目叩き後軽いナデ、内面青海波文一部ナデ。外面に自然釉。	白色粒子を多量 砂粒・チャートを少量	×	良好	木葉下窯跡群産	外面：N6/ 灰色 内面：N5/ 灰色 釉：N3/ 暗灰色	胴部外面にヘラ記号。
51	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部	細片	-	-	(7.2)	胴部外面斜方向平行叩き、内面青海波文。胴部外面全面に灰釉。	白・黒色粒子を微量	×	良好	搬入品 湖西窯跡群産	外面：2.5Y7/2 灰黄色 内面：2.5Y7/1 灰白色 釉：7.5Y4/3 暗オリーブ色	
52	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部下位～底部	10	-	5.4	(4.4)	胴部内面渦巻状のロクロ目顕著。最大径の位置は不明。胴部外面右回転ヘラケズリ、中央部に指紋、内面から底部内面左回転ナデ。底部外面左回転ヘラ切り離した後ナデ。	白色粒子・砂粒を多量	×	良好	新治窯跡群産	外面：2.5Y5/1 黄灰色 内面：5Y5/1 灰色	胴部の一部に自然釉。
53	1号版築遺構	須恵器	甕	胴部～底部	10	-	8.4	<5.5>	胴部外面斜方向ヘラケズリ、内面および底部内面左回転ナデ。底部外面切り離し技法不明後全面を手もちヘラケズリ。	白色粒子・砂粒・チャートを少量	×	良好	新治窯跡群産	外面：5Y6/1 灰色 内面：5Y3/1 オリーブ黒色	胴部外面に煤付着。 胴部内面および見込み部に焼成時の付着物。
54	1号版築遺構	須恵器	甕	ブリッジ部	細片	-	-	1.2	表面多方向ヘラケズリ後指によるオサエによる整形。側面横方向ヘラケズリ、裏面ナデ。	白・黒色粒子・砂粒・雲母片を微量	×	良好	新治窯跡群産	内外面：2.5Y7/2 灰黄色	長さ(4.8 cm) 幅2.2 cm 厚さ1.2 cm ブリッジ本数不明。
55	1号版築遺構	須恵器	羽釜	胴部～羽部	細片	-	-	(4.9)	鉢形の器形カ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面縦方向ヘラナデ。羽部表裏面横方向ヘラケズリ、側面は丸みを帯びナデ。	白色粒子・チャートを少量	○	良好	木葉下窯跡群産	外面：2.5Y5/1 黄灰色 内面：2.5Y6/3 きぶい黄色	羽部幅1.2 cm。
56	1号版築遺構	須恵器	羽釜	羽部	破片	-	-	(2.7)	羽釜の羽部。全面が横方向ヘラケズリ後ナデ。	白・黒色粒子・チャートを少量、砂粒・長石を微量	×	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y8/2 灰白色	幅7.5 cm、厚さ1.5 cm。 裏面に煤付着。
57	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	35	(9.8)	-	3.5	丸底で底部下位1/3で角度を変え外反。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位から中位横方向ヘラケズリ後ナデ、下位から底部多方向ヘラケズリ。体部内面および見込み部ナデ。	白・赤色粒子を少量	×	良好	-	外面：7.5YR6/6 橙色 内面：10YR4/6 褐色	
58	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	40	(11.4)	-	4.3	丸底で口縁部は短くわずかに内傾、体部は膨らみをもつ。口縁部と体部の境に明瞭な稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面から底部外面横方向ヘラケズリ。体部内面および見込み部ナデ後多方向粗いヘラミガキ。	白・黒色粒子を微量	×	良好	-	外面：7.5YR5/4 にぶい褐色 内面：10YR6/4 にぶい黄褐色	
59	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	45	(12.6)	-	4.7	丸底で口縁部は短く垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境にわずかな稜をもつ。口縁部内外面ヨコナデ。内面のヨコナデが斜方向に抜けることより、左回転でヨコナデ調整を施している。体部外面横方向ヘラケズリ、体部内面および見込み部丁寧なナデ。底部外面多方向ヘラケズリ。	白・赤色粒子を微量	×	良好	-	外面：2.5YR5/8 明赤褐色 内面：5YR1.7/1 黒色	口縁部外面および体部内面に黒色の付着物。
60	1号版築遺構	土師器	坏	略完形	95	11.9	-	4.7	丸底でわずかに口縁部が外反。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部外面ヨコナデ後横方向ミガキ、内面ヨコナデ。体部外面上位横方向ヘラケズリ、中位以下および底部外面斜方向ヘラケズリ、体部内面および見込み部横方向ミガキ。	白・赤色粒子を少量	×	良好	-	内外面：5Y3/1 オリーブ黒色 非黒色部分： 10YR5/4 にぶい黄褐色	内外面ほぼ全面黒色化。黒色化は被熱のためか？
61	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	40	(10.5)	-	3.5	丸底で半球状。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ後横方向のミガキ。体部外面多方向ヘラケズリ後横方向ミガキ、内面丁寧なナデ後1条1単位の放射状暗文および横方向ミガキ。	黒色粒子を微量	×	良好	畿内系 搬入品？	外面：5YR6/6 橙色 内面：5YR5/8 明赤褐色	
62	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	40	(10.3)	-	2.9	丸底で口縁部は短く垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位から中位横方向ヘラケズリ、内面から見込み部ナデ。底部外面多方向ヘラケズリ。	白色粒子・砂粒を少量 黒色粒子を微量	×	良好	-	内外面：5YR6/8 橙色	

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
63	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	40	(12.0)	-	3.5	平底で口縁部がわずかに内傾。体部は膨らみをもつ。口縁部と体部の境に稜をもたない。口唇部内面直下に1条の沈線。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位横方向ヘラケズリ後ナデ。下位横方向ヘラケズリ。内面および見込み部丁寧なナデ。底部外面一方向ヘラケズリ後周縁を幅の狭い手もちヘラケズリ。	白色粒子を少量	×	良好	搬入品?	外面:5YR6/6 橙色 内面:5YR5/6 明赤褐色	
64	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	25	(11.9)	(4.8)	3.9	平底で体部が大きく膨らみ、口縁部が短く垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ、体部内面および見込み部丁寧なナデ。底部外面左回転糸切り後周縁を幅の狭い手もちヘラケズリ。	赤色粒子を微量	×	良好	搬入品?	内外面:7.5YR7/8 黄橙色	口縁部内外面一部に黒色の付着物。
65	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	30	(15.8)	-	3.7	丸底でやや扁平。口縁部は短く垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部から底部外面多方向ヘラケズリ、内面および見込み部ナデ。	赤色粒子・砂粒を少量 白・黒色粒子を微量	○	良好	-	外面:7.5YR6/8 橙色 内面:5YR6/8 橙色	赤彩。外面被熱あり。
66	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	40	(15.8)	-	3.3	丸底で扁平。口縁部外傾。体部は膨らみをもつ。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位斜方向ヘラケズリ、中位から底部横方向ヘラケズリ。体部内面および見込み部ナデ。	白・黒・赤色粒子を少量	×	良好	-	外面:7.5YR6/6 橙色 内面:7.5YR6/8 橙色	赤彩品。
67	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	60	(16.9)	9.8	4.0	平底で扁平。口縁部わずかに内傾。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。見込み部多方向ヘラケズリ後ナデ。底部外面一方向ヘラケズリ後周縁を幅の狭い手もちヘラケズリ。	白・赤色粒子を少量	×	良好	搬入品?	内外面:2.5YR5/6 明赤褐色	
68	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	20	(10.3)	-	<3.1>	丸底で口縁部は外反。体部中位に形骸化した稜をもつ。口唇部内面直下に1条の沈線。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜方向ヘラケズリ後ナデ。体部内面ナデ。	白・黒・赤色粒子を少量	×	良好	-	内外面:7.5YR6/8 橙色	体部内面に黒色の付着物。
69	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	30	(10.8)	-	(3.6)	丸底で半球状。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後丁寧なナデ後横方向ミガキ。内面および見込み部ナデ。底部外面多方向のヘラケズリ後ナデ。	黒色粒子を少量	×	良好	-	内外面:7.5YR7/6 橙色	関東型畿内系土師器カ。
70	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	10	(10.7)	-	<4.0>	丸底で口縁部短く垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境に稜をもたない。口唇部直下内面1条の沈線。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ、内面ナデ。	白・赤色粒子を微量	×	良好	-	内外面:7.5YR8/8 黄褐色	
71	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	25	(11.8)	-	<3.4>	口縁部から体部が外反するが上位が内傾。口唇部内面直下に1条の沈線。口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ後1条1単位の密な斜方向暗文。体部外面上位から中位ナデ後横方向ミガキ。体部外面下位から底部横方向ヘラケズリ後ナデ。体部内面ナデ後1条1単位の密な放射状暗文。	白・赤色粒子を微量	×	良好	-	内外面:5YR6/8 橙色	関東型畿内系土師器カ。
72	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	30	(11.8)	-	<3.3>	丸底扁平で口縁部は直立。体部は膨らみをもつ。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ後ナデ。内面ナデ。	赤色粒子・砂粒を少量 白色粒子を微量	×	良好	-	内外面:5YR7/6 橙色	
73	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	10	(18.8)	-	<2.0>	丸底で扁平。口縁部短くわずかに外傾。体部は丸みを帯びる。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ。内面ナデ後漆状物質を塗布後2条1単位の放射状暗文。	白色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	外面:10YR4/4 褐色 内面:10YR2/1 黒色	漆塗り土器。
74	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	20	(13.7)	-	<3.6>	丸底で口縁部は直立してわずかに内湾。体部は膨らみをもつ。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜方向ヘラケズリ、内面ナデ。	砂粒・雲母片を多量	×	良好	-	内外面:7.5YR3/1 黒褐色	内外面黒色化カ。

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
75	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	40	(15.9)	-	<3.5>	丸底で扁平。口縁部は外反。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ、中位斜方向に連続する傷、調整時由来カ。内面および見込み部ナデ。底部外面一方向のヘラケズリ。	黒・赤色粒子を少量	×	良好	-	外面：5YR5/8 明赤褐色 内面：7.5YR6/6 橙色	口縁部内外面に黒色付着物。
76	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	30	(13.2)	-	(3.1)	丸底扁平で、口縁部は直立。体部は膨らみをもつ。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ、内面ナデ。1条1単位の放射状暗文。	白・赤色粒子・チャートを少量	×	良好	-	内外面：2.5YR5/8 明赤褐色	
77	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	30	(19.8)	-	<3.7>	丸底で扁平、口縁部は直立して体部は膨らみをもつ。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向ヘラケズリ、内面ナデ。1条1単位の疎な放射状暗文。	赤色粒子を多量 黒色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	外面：5YR6/8 橙色 内面：5YR6/6 橙色	
78	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～底部	70	(16.7)	-	<3.7>	丸底でやや扁平。口縁部は短く垂直に立ち上がる。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ後ナデ、内面および見込み部ナデ後1条1単位の疎な放射状暗文。	赤色粒子・砂粒を少量	×	良好	搬入品?	内外面：5YR6/8 橙色	
79	1号版築遺構	土師器	坏	口縁部～体部	10	(17.7)	-	<1.9>	丸底扁平で口縁部が外反。口縁部と体部の境に稜をもたない。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面多方向ヘラケズリ、体部内面ナデ。	白・黒色粒子を微量	×	良好	-	内外面：5YR5/6 明赤褐色	口縁部の外面および内面の一部に黒色の付着物。
80	1号版築遺構	土師器	高坏	坏部下端から脚部上位	10	-	-	(3.5)	脚部が大きく開く。坏部外面下端縦方向ヘラケズリ、坏部見込み部ナデ。脚部内外面縦方向ヘラケズリ。	白色粒子を少量、砂粒・長石を微量	×	良好	-	内外面：5YR5/8 明赤褐色	
81	1号版築遺構	土師器	壺	口縁部～胴部	20	(11.0)	-	<6.7>	粗雑でやや寸胴。口縁部短く外反、口縁部と胴部の境に弱い段。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面斜方向ヘラケズリ後ナデ、内面多方向ヘラナデ。	白色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	内外面：5Y3/1 初-7 黒色	黒色化カ。
82	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～底部	60	(14.7)	8.5	23.7	寸胴状。最大径の位置が胴部下位。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面上位多方向ヘラナデおよび指によるオサエ、中位以下縦方向ヘラナデ後縦方向暗文状ミガキ。底部外面切り離し技法不明でナデ、内面多方向ミガキ。	白色粒子・砂粒・チャートを少量	×	良好	-	外面：7.5YR6/8 橙色 内面：10YR5/8 黄褐色	内外面に焼成時の煤付着。被熱あり。
83	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～底部	70	15.8	24.7	5.8	口唇部わずかに肥厚、口縁部が外反。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面多方向ヘラケズリ、内面から底部内面斜方向ヘラナデ後ナデ。底部外面一方向ヘラケズリ後ナデ。	白・黒・赤色粒子を多量 チャートを少量	×	良好	-	外面：10YR5/4 にぶい黄褐色 内面：10YR4/6 褐色	胴部外面中位に煤付着。
84	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～底部	70	(19.7)	9.0	31.5	口唇部斜方向に摘み出される。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位横方向ヘラナデ後ナデ、下位斜方向ヘラミガキ、下端斜方向ヘラケズリ、内面斜方向ヘラナデ。底部内面多方向ヘラナデ、底部外面一方向ヘラケズリ後一方向ミガキ状ヘラケズリ。	白・赤色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	外面：10YR6/6 明黄褐色 内面：10YR3/2 黒褐色	内面上位および胴部外面下端に酸化鉄付着。常総型甕。
85	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部 胴部～底部	60	(26.5)	9.0	40.0	口唇部斜め上方に摘み出され外面を面取り。口縁部は大きく開く。最大径は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位横方向ヘラナデ後ナデ、下位斜方向ヘラミガキ、下端斜方向ヘラケズリ、内面から底部内面横方向ヘラナデ後ナデ。底部外面一方向ヘラケズリ後ナデ。	砂粒・雲母片を多量 チャートを少量	×	良好	-	上位内外面：10YR8/6 黄褐色 下位外面：10YR4/6 褐色 下位内面：2.5YR7/6 明黄褐色	常総型甕。
86	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	60	(13.8)	-	(13.5)	口縁部短く肥厚して外反。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ミガキ様の縦方向ヘラケズリ。胴部内面横方向ヘラナデ。	砂粒を多量 白色粒子・チャートを少量	×	良好	-	内外面：10YR5/3 にぶい黄褐色	
87	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	40	(15.3)	-	<10.0>	口縁部短く外反。最大径の位置は口縁部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	白・赤色粒子を少量 砂粒・チャートを微量	×	良好	-	外面：10YR5/4 にぶい黄褐色 内面：10YR2/1 黒色	内面黒色化。

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
88	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	15	(14.8)	-	<12.4>	口縁部短くわずかに外反。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ。頸部から胴部上位外面細かい縦方向ヘラケズリ、中位以下縦および斜方向ヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	白色粒子・砂粒を少量 チャートを微量	○	良好	-	内外面：7.5YR8/4 浅黄褐色	
89	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	40	(15.8)	-	(12.2)	口唇部玉縁状に肥厚。口縁部は大きく外反。最大径の位置は口縁部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	白色粒子・砂粒を多量 チャート・雲母片を少量	×	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：N2/ 黒色	常総型甕。
90	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(15.8)	-	<5.4>	口唇部は玉縁状。口縁部長く上位が外反。最大径の位置は胴部。口縁部外面から胴部上位ヨコナデ、内面から胴部上位ヨコナデ、一部多方向ナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面中位以下ナデ。	白色粒子を少量 チャートを微量	×	良好	-	外面：7.5YR7/6 橙色 内面：7.5YR7/4 にぶい橙色	
91	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(15.6)	-	<8.7>	口唇部玉縁状で、口縁部は短く外反。最大径の位置は口縁部。口縁部から胴部上位内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面横方向ナデ。	白色粒子・砂粒・チャートを少量 雲母片・長石を微量	×	良好	-	内外面：10YR5/6 黄褐色	
92	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(12.8)	-	(6.3)	口縁部短くわずかに外反。最大径の位置は胴部。口縁部から胴部上位内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ後ナデ。	砂粒・チャートを少量 白色粒子・雲母片を微量	×	良好	-	内外面：7.5YR7/6 橙色	
93	1号版築遺構	土師器	小型甕	口縁部	細片	(13.7)	-	<4.6>	口縁部がわずかに外傾。最大径の位置は不明。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向ナデ。	白色粒子・砂粒を少量 雲母片を微量	×	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：10YR7/4 にぶい黄褐色	
94	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(17.6)	-	<5.6>	口縁部短く肥厚して外反。最大径の位置は不明。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ後ナデ。	白・黒色粒子を少量 雲母片を微量	○	良好	-	内外面：5YR6/8 橙色	
95	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	40	(31.7)	-	(20.6)	口唇部は外側に摘み出される。口縁部は外反。最大径の位置は口縁部。口唇部鋭角で上方に摘み出される。口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面上から中位方向不明のヘラナデ後ナデ、下位斜方向ヘラケズリ。胴部内面上から中位横方向ヘラナデ、下位多方向ヘラケズリ。	白色粒子・砂粒・チャートを少量	×	良好	-	外面：7.5YR7/8 黄褐色 内面：5YR6/3 にぶい橙色	内面は黒色化。
96	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	細片	(13.8)	-	<5.6>	口縁部やや長く外傾。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向ヘラケズリ、内面ナデ。	白色粒子・チャートを少量 雲母片を微量	○	良好	-	内外面：10YR5/4 にぶい黄褐色	
97	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(14.5)	-	<7.7>	口縁部玉縁状で短く外反。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面多方向ヘラケズリ後ナデ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	砂粒を少量 白・赤色粒子・チャートを微量	×	良好	-	内外面：10YR8/6 黄褐色	
98	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	細片	(11.8)	-	<4.5>	口縁部短く上端が大きく外反。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位ナデ、中位以下横方向ヘラケズリ、内面ナデ。口縁部外面赤彩。	白・黒色粒子を少量 長石を微量	×	良好	-	内外面：10YR7/4 にぶい黄褐色 赤彩：2.5YR5/8 明赤褐色	口縁部外面赤彩。
99	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(13.0)	-	<8.1>	口縁部が短くわずかに外反。最大径の位置は胴部中位。口縁部外面から胴部上位外面ヨコナデ、一部指によるオサエ、内面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面横方向ヘラナデ後ナデ。	黒色粒子・チャート・雲母片を微量	×	良好	-	内外面：10YR8/4 浅黄褐色	
100	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	20	(15.8)	-	(10.7)	口縁部外反。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	白・黒・赤色粒子を少量 チャートを微量	×	良好	-	外面：7.5YR4/2 灰褐色 内面：7.5YR6/8 橙色	
101	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(15.2)	-	(6.0)	口唇部は外反、口縁部は直線的に立ち上がる。頸部は「く」字状。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ後ナデ。	白・黒色粒子を少量、雲母片を微量	×	良好	-	外面：7.5YR6/6 橙色 内面：7.5YR6/4 にぶい橙色	
102	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	25	(15.4)	-	<13.8>	口唇部上端をわずかに上方へ摘み上げる。口縁部は外反。最大径の位置は口縁部。口縁部外面ヨコナデ、口縁部内面から胴部上位ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ後丁寧なナデ。	白・黒赤色粒子・チャートを微量	○	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：10YR6/6 明黄褐色	外面一部被熱あり。

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
103	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	25	(16.7)	-	<11.3>	口縁部短く大きく外反。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。口縁部から頸部のヨコナデを強く行った結果、口縁部と胴部の境が段となる。胴部外面斜方向ヘラケズリ後ナデ、内面多方向ヘラナデ後丁寧ナデ。	白・黒・赤色粒子・雲母片を微量	×	良好	-	内外面：10YR7/4 にぶい黄橙色	
104	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(20.5)	-	<7.3>	口縁部やや長くわずかに外反、肥厚。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向ヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	白色粒子を多量	×	良好	-	外面：7.5YR6/8 橙色 内面：2.5YR4/8 赤褐色	
105	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	20	(20.5)	-	<7.3>	口縁部肥厚して外反、頸部に調整時由来の段をもつ。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ、胴部内面横方向ヘラナデ。	白色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	内外面：7.5YR8/4 浅黄橙色	
106	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	25	(16.7)	-	(12.3)	口縁部端部が玉縁状で「く」字状に開く。胴部はやや寸胴気味か。最大径の位置は胴部下位。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面上位横方向ヘラナデ、下位ナデ、胴部内面横方向ヘラナデ後ナデ。	チャートを多量 白色粒子・砂粒を少量 雲母片を微量	×	良好	-	外面：10YR7/6 明褐色 内面：7.5YR6/6 橙色	外面に焼成時の赤化部分・煤が広範囲に付着。
107	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	40	(21.6)	-	<24.5>	口唇部玉縁状、端部がわずかに斜方向に積み出される。口縁部は外反。最大径の位置は胴部上位。口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面横方向ヘラナデ後ナデ、内面横方向ヘラナデ後ナデ。胴部外面上位縦方向ヘラケズリ、下位斜方向ヘラミガキ、内面多方向ヘラナデ後ナデ。	白・赤色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	内外面：5YR6/8 橙色	常総型甕。
108	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	40	14.8	-	<13.5>	口唇部側面面取り、口縁部がわずかに外傾。最大径の位置は胴部上位。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向ヘラミガキ、胴部内面縦方向ヘラナデ後ナデ、胴部内面横方向ヘラナデ後ナデ。	白・黒色粒子を少量 砂粒・雲母片・長石を微量	×	良好	-	内外面：10YR7/3 にぶい黄褐色	常総型甕。
109	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	40	(20.9)	-	<8.5>	口唇部側面面取り、鋭角で上方に積み出される。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ、頸部内外面横方向ヘラナデ後ナデ。	白色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	外面：10YR6/3 にぶい黄褐色 内面：2.5Y3/1 黒褐色	常総型甕。
110	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	40	(20.8)	-	<11.8>	口唇部が上下に積み出される。口縁部は外反。最大径の位置は胴部中位。口縁部内外面はヨコナデ。頸部外面斜方向ヘラケズリ後ナデ、内面横方向ヘラナデ。胴部内外面多方向ヘラナデ後ナデ、内面一部指によるオサエ。	白・黒・赤色粒子・砂粒を少量 雲母片を微量	×	良好	-	外面：7.5YR7/8 黄褐色 内面：10YR3/1 黒褐色	常総型甕。
111	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(14.7)	-	<7.5>	口縁部はやや長く外反。最大径の位置は胴部。口縁部外面から胴部上端ヨコナデ、内面ヨコナデ。頸部内面ヨコナデ後ナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後弱いナデ、内面横方向ヘラナデ後ナデ。	白・黒色粒子を少量 雲母片を微量	○	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：7.5YR7/6 橙色	
112	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(15.5)	-	<5.0>	口唇部は玉縁状。口縁部長く上位が大きく外反。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。	白色粒子・砂粒を少量 チャートを微量	○	良好	-	外面：7.5YR4/2 灰褐色 内面：10YR6/4 にぶい黄褐色	
113	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(20.2)	-	<6.2>	口縁部長く上位が外反。最大径の位置は胴部。口縁部内外面強いヨコナデ。胴部外面横方向ヘラケズリ、内面多方向ヘラナデ。	白・黒・赤色粒子・を少量 長石を微量	×	良好	-	内外面：5YR6/8 橙色	
114	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	20	(14.3)	-	<7.2>	口縁部上位が大きく外反して、「く」字状に折れる。最大径の位置は胴部。口縁部内外面ヨコナデ。頸部から胴部外面上位縦方向ヘラケズリ、下位横方向ヘラケズリ、内面横方向ヘラナデ。	白・黒色粒子を少量	×	良好	-	内外面：7.5YR7/8 黄褐色	
115	1号版築遺構	土師器	甕	口縁部～胴部	10	(22.8)	-	<7.2>	口唇部斜方向に積み上げられる。口縁部長く大きく外反して肥厚気味。最大径の位置は不明。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面横方向ヘラナデ後ナデ、内面斜方向ヘラナデ。	白色粒子・砂粒・雲母片を少量	×	良好	-	内外面：7.5YR7/8 黄褐色	常総型甕。
116	1号版築遺構	土師器	甕	胴部～底部	10	-	9.0	(4.4)	胴部がやや膨らむ。最大径の位置は不明。胴部外面斜方向ヘラミガキ、内面から底部内面横方向ヘラナデ、底部外面一方向ヘラケズリ後ナデ。	白・赤色粒子を多量 チャートを少量 長石を微量	×	良好	-	内外面：7.5YR6/8 橙色	常総型甕。

図版番号	出土地点遺構	種別	器種	残存部位	残存率(%)	口径(推定口径)(cm)	底径(推定底径)(cm)	器高(残存高)(cm)	特徴・手法	胎土	海綿骨針	焼成	焼成窯	色調	備考
117	1号版築遺構	土師器	壺	胴部～底部	30	-	6.5	(7.5)	胴部がやや膨らむ。最大径の位置は不明。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面斜方向ヘラケズリ後ナデ、一部斜方向ヘラケズリ、底部内面多方向ヘラケズリ。底部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。	白色粒子・砂粒・チャートを少量 雲母片を微量	×	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：10YR7/8 黄褐色	
118	1号版築遺構	土師器	小型甕	胴部～底部	70	-	6.5	<10.3>	胴部が丸みを帯びる。最大径の位置は胴部中位。胴部外面上縦方向ヘラケズリ後ナデ、中から下位斜方向ヘラケズリ後ナデ、下端横方向ヘラケズリ、内面から底部内面多方向ヘラケズリ後ナデ。底部外面一方向ヘラケズリ後ナデ後周縁を幅の狭い手もちヘラケズリ。	黒・赤色粒子を少量 砂粒を微量	×	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：7.5YR5/4 にぶい褐色	被熱あり。
119	1号版築遺構	土師器	甕	胴部～底部	10	-	(8.4)	<4.4>	最大径の位置は不明。胴部外面斜方向ヘラケズリ、下端横方向ヘラケズリ、内面および底部内面多方向ヘラケズリ後ナデ。底部外面木葉痕。	白色粒子・砂粒・チャートを少量	○	良好	-	外面：10YR6/6 明黄褐色 内面：10YR5/3 にぶい黄褐色	底部木葉痕。
120	1号版築遺構	土師器	甕	底部	10	-	8.4	<3.3>	底部がわずかに突出。最大径の位置は不明。胴部外面縦方向ヘラケズリ、内面および底部内面多方向ヘラケズリ。底部外面木葉痕。	白色粒子・砂粒を少量	○	良好	-	外面：7.5YR5/4 にぶい褐色 内面：5YR5/6 明赤褐色	底部木葉痕。
121	1号版築遺構	土師器	甕	胴部～底部	10	-	7.5	(4.0)	わずかに胴部が膨らむ。最大径の位置は胴部。胴部外面横方向ヘラケズリ、胴部内面から底部内面多方向ヘラケズリ後ナデ。底部外面多方向ヘラケズリ後ナデ。	白・黒色粒子・砂粒を少量	○	良好	-	外面：10YR6/4 にぶい黄褐色 内面：5YR6/6 褐色	
122	1号版築遺構	土師器	甕	胴部～底部	10	-	9.0	<3.6>	底部がわずかに突出。最大径の位置は胴部。胴部外面粗い縦方向ヘラケズリ、内面および底部内面多方向ヘラケズリ。底部外面木葉痕をもち、多方向ヘラケズリで消している。粗雑。	白色粒子・砂粒・小礫を少量	×	良好	-	外面：7.5YR6/8 褐色 内面：2.5YR6/8 褐色	
123	1号版築遺構	土師器	甕	胴部～底部	10	-	9.6	(7.4)	底部が突出。最大径の位置は不明。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面および底部内面多方向ヘラケズリ後強いナデ。底部外面一方向ヘラケズリ後周縁幅の狭い手もちヘラケズリ。	白・黒色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：10YR7/4 にぶい黄褐色	
124	1号版築遺構	土師器	甕	胴部～底部	20	-	7.5	<4.6>	胴部が大きく膨らむ。最大径の位置は胴部。胴部外面縦方向ヘラケズリ後ナデ、内面および見込み部多方向ヘラケズリ後ナデ。底部外面一方向ヘラケズリ後ナデ。	白色粒子・砂粒を少量 小礫・チャートを微量	×	良好	-	外面：10YR7/8 黄褐色 内面：7.5YR8/6 浅黄褐色	
125	1号版築遺構	土師器	甕	胴部～底部	10	-	(10.0)	(4.3)	底部中央が極端に薄い。最大径の位置は不明。胴部外面斜方向ヘラケズリ、内面および底部内面横方向ヘラケズリ後ナデ。底部外面多方向ヘラケズリ。	チャートを多量 白・黒色粒子・砂粒を少量	×	良好	-	外面：10YR7/6 明黄褐色 内面：10YR7/4 にぶい黄褐色	
128	1号溝	土師器	甕	胴部～底部	20	-	(10.0)	<11.4>	やや胴部下位が膨らむ。最大径の位置は不明。胴部外面斜方向ヘラミガキ、下端横方向ヘラケズリ、内面から底部内面多方向ヘラケズリ後ナデ。底部外面木葉痕。	白色粒子を多量 雲母片を少量 砂粒・長石を微量	×	良好	-	外面：10YR6/6 明黄褐色 内面：7.5YR4/2 灰褐色	常総型甕。
129	表土一括	須恵器	高台付坏	底部～高台部	20	-	高台部径(8.0)	<1.4>	高台部が外反して「ハ」字状に開く、外側で接地。見込み部左回転ナデ、底部外面右回転ヘラ切り離し後右回転ナデ。高台部貼り付け。	白・黒色粒子を少量、チャートを微量	×	良好	木葉下窯跡群産	内外面：10YR8/3 浅黄褐色	
130	表土一括	須恵器	甕	口縁部	細片	(28.0)	-	(5.0)	口唇部上下に摘み出され、端部が箱状になる。口縁部は外反。口唇部および口縁部内外面回転ナデ。外面下位に3条1単位の粗雑な波状文。	白・黒色粒子・砂粒・チャートを少量	×	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y6/1 黄灰色	
131	1号拡張区一括	縄文土器	深鉢	胴部	細片	-	-	-	胴部外面単節R Lの縄文を縦回転施文。	白色粒子・砂粒を少量 雲母片・長石を微量	×	良好	-	外面：2.5Y7/3 浅黄色 内面：2.5Y5/3 黄褐色	中～後期？
132	1号拡張区一括	須恵器	甕	口縁部～頸部	細片	-	-	(4.8)	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面格子目叩き後丁寧なナデ、頸部内面ナデ。	白色粒子・砂粒を微量	○	良好	木葉下窯跡群産	内外面：2.5Y7/1 灰白色	外面にヘラ記号。

第4表 出土瓦属性一覧

図版 番号	出土 地点 遺構	種 別	残存 部位	残存 率 (%)	全長 (残存 長) (cm)	全幅 (残存 長) (cm)	厚さ (残存 厚) (cm)	重量 (g)	製作 技法	凹面痕跡・調整	凸面痕跡・調整	側縁部・端面調 整	胎土 鉱物	海綿 骨針	焼成	色調	備考
15	3号竪穴 住居跡	軒 丸瓦	丸瓦部	60	(15.7)	(14.8)	1.6～ 4.1	791.1	丸瓦 部 摸骨	丸瓦部摸骨痕、 および布目痕。 布目痕上に粘土 の貼り付け後縦 方向のヘラケズ リ調整。	縦方向のヘラケ ズリ。	-	白色粒子・ 砂粒を少量 チャートを 微量	○	良好	凹凸面： 2.5Y6/1 黄灰色	凸面側。丸 瓦部と瓦当 面の接合部 付近に「中 寺」もしく は「仲寺」 のヘラ書き。
16	3号竪穴 住居跡	丸 瓦	中央部 ～ 右側部	60	28.6	(13.4)	1.7～ 2.4	1123.2	摸骨	布目痕。広端部 付近で布のよ れ。布目は縦1 cm×横1cmで7 本×7本。	0.5×0.3cmの斜 格子目叩き。凸 面の中央から広 端部寄りを中心 に叩かれている 。その後全面を 中央部から端 部に向かうヘラ ケズリ後ナデが 施される。右側 部下位に布目の 圧痕。	狭・広端面 ヘ ラケズリ調整。 凸面の角をヘラ ケズリ。 側縁部 広端部 から狭端部方向 にヘラナデ。	白・黒色粒 子・砂粒を 少量 チャートを 微量	×	良好	凸面：7.5YR4/1 褐灰色 ～ 10YR8/1 灰白色 凹面：10YR7/2 にぶい黄橙 色	一部被熱痕。
17	3号竪穴 住居跡	平 瓦	狭端部 左側	30	(12.4)	(9.3)	1.6～ 2.0	302.4	桶巻	布目。周縁縦方 向ヘラケズリ。 布目は縦1cm× 横1cmで5本× 5本。	多方向ヘラケズ リ後強いナデ。 指紋および棒状 圧痕。	狭端面 横方向 ヘラケズリ 側縁部 縦方向 ヘラケズリ	白色粒子・ 砂粒・チャ ートを少量	×	良好	凹凸面： 2.5Y8/4 浅黄橙色	一部被熱痕。
18	3号竪穴 住居跡	平 瓦	左側縁 部	30	(14.4)	(12.7)	1.7	299.4	一枚	布目痕。下位に 糸切り痕を残 す。周縁をヘラ ケズリ調整。布 目は縦1cm×横 1cmで6本×8 本。	長縄圧痕。その 後ナデを施す。 周縁は縦方向の ヘラケズリ後一 部指によるオサ エ。	側縁部ヘラケズ リによる3面の 面取り。	砂粒・チャ ートを少量 白色粒子を 微量	×	良好	凹凸面： 10YR8/4 浅黄橙色	
126	1号版築 遺構	丸 瓦	広端部 左側	20	(10.5)	(8.0)	1.4～ 1.6	246.2	摸骨	布目痕。縦方向 のヘラケズリ後 ナデ。布目は縦 1cm×横1cmで 10本×12本。	縦方向のヘラケ ズリ後ナデ。広 端部付近は多方 向のヘラケズ リ。下端部に棒 状の圧痕。	広端面 ヘラケ ズリ後ナデ。 側縁部 凸面に 製作時の粘土が 残り段になって いる。平坦面は ヘラナデ。	白・赤色粒 子を少量 チャート・ 長石を微量	×	良好	凸面：10YR8/3 浅黄橙色 凹面：10YR7/2 にぶい黄橙 色	一部被熱痕。
127	1号版築 遺構	平 瓦	-	20	(11.6)	(10.6)	1.0～ 1.3	138.0	泥条 版築	縦および横方向 のヘラケズリ。	縦および横方向 のヘラケズリ。	-	白色粒子・ 砂粒・チャ ートを少量 長石を微量	○	良好	凸面：10YR8/4 浅黄橙色 凹面：10YR7/6 明黄褐色	

第5表 出土遺物計量表

出土地点	1号竪穴住居跡		2号竪穴住居跡		3号竪穴住居跡		4号竪穴住居跡		1号版築遺構		1号溝		調査区表一括		2号竪穴住居跡		総計													
	点数	個体数	重量(g)	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	個体数	重量(g)	点数	個体数	重量(g)	個体数	重量(g)												
縄文時代 細文時代 弥生時代	文 器																													
	深鉢(早期)																													
	深鉢(中～後期)																													
	深鉢(不明)																													
	土器																													
	弥生土器																													
	小計																													
	環	2	2	435																										
	環・腕環	4	4	452																										
	高台付環	2	1	97.1																										
高台付環類																														
盤																														
高台付盤																														
高杯																														
鉢																														
須臾器鉢																														
甕																														
甕	7	4	156.4																											
甕	2	1	118.3																											
甕	5	5	107.2																											
埴・甕類																														
埴																														
埴釜																														
不明																														
小計	22	17	567.7																											
環・腕環	4	3	21.5																											
高杯																														
鉢・甕類																														
甕	54	33	894.6																											
埴・甕類																														
小計	58	36	916.1																											
鉄製品																														
鉄製釘	1	1	7.1																											
鉄鏝	5	5	39.2																											
小計	6	6	46.3																											
小計	86	59	1,530.1																											
古墳時代末～ 奈良時代 平安時代	長縄直後 ナガ調整																													
	ヘラケズリ																													
	後ナガ調整																													
	泥糸版築																													
	技法																													
	痕跡・調整																													
	不明																													
	小計																													
	丸瓦																													
	ヘラケズリ																													
後ナガ調整																														
小計																														
軒丸瓦																														
ヘラケズリ																														
調整																														
小計																														
中・瓦葺陶器																														
小計																														
時代不明																														
被熱あり																														
被熱なし																														
小計																														
総計	86	59	1,530.1	2	1	29.4	110	37	6,736.2	2	2	198.4	1,968	1,240	71,460.9	127	17	11,143.2	188	177	1,504.7	15	12	241.7	3	3	9.8	2,501	1,548	92,854.4

第4章 総括

本地点（第79次調査地点）は国指定史跡「台渡里廃寺跡」の観音堂山地区および南方地区の東西に広がる台渡里官衙遺跡の宿屋敷地区に位置しており、2008年（平成20年）に発掘が実施された第39次調査地点の2mほど南側に隣接している。今回の調査では奈良時代後葉～平安時代前葉を中心とする竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、版築遺構1個所、古代以降の所産と思われる溝1条、柵列遺構1条、ピット列1個所、および縄文時代、弥生時代、近世以降の遺物などが確認されたが、本章では第39次調査地点の調査成果をふまえつつ、本地点を舞台にした土地利用の変遷を概観する。

1 奈良時代以前

縄文土器片8点、弥生土器片9点が出土している。いずれも1号版築遺構を中心に確認されたものであり、当該期に属する遺構は未検出に終わっている。縄文土器は早期・中期・後期土器などが含まれるが、型式を特定できるものはない。弥生土器も細片が多く、型式を特定するまでには至らなかった。北側の第39次調査地点でも縄文土器片12点、弥生土器片6点が出土しているが、型式はいずれも不明であり、同時期の遺構の分布も確認されていない。

2 古墳時代末葉～奈良時代前葉

本地点における土地利用がもっとも盛んであった時期であり、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡2棟、版築遺構1個所、およびそれらに伴う多数の須恵器と土師器、瓦、金属製品などの出土が確認されている。遺構のおおよその時期別内訳は以下の通りである。

奈良時代後葉以前・・・・・・・・・・2号竪穴住居跡、1号掘立柱建物跡

奈良時代後葉・・・・・・・・・・4号竪穴住居跡

奈良時代後葉～平安時代前葉・・・・1号竪穴住居跡

平安時代前葉以前・・・・・・・・・・2号掘立柱建物跡

平安時代前葉・・・・・・・・・・3号竪穴住居跡、1号版築遺構

時間的にもっとも古い位置を占めるのは奈良時代後葉以前に比定される2号竪穴住居跡と1号掘立柱建物跡である。いずれも奈良時代後葉～平安時代前葉の1号竪穴住居跡の下面に営まれていたものであるが、正確な時期を特定できるような遺物は両遺構とも出土していない。切り合い関係をみると、上面を2号竪穴住居跡に切られる1号掘立柱建物跡が古く、2号竪穴住居跡が新しい。これに続くのが両遺構の上面に営まれていた1号竪穴住居跡であり、8世紀後葉から9世紀前葉を中心とする須恵器や土師器などの出土から奈良時代後葉～平安時代前葉の所産であったと考えられる。

1・2号竪穴住居跡は南西側の壁と床面の一部が確認されたのみであり、全容は不明であるが、北側で接する第39次調査地点の1区では1・2号竪穴住居跡とほぼ対応する位置から古墳時代末葉の所産と考えられる2軒の竪穴住居跡が検出されている。また、5号と8号の2軒の竪穴住居跡は上下で切り合う関係にあることも注目される。第39次調査は幅1mほどの細長いトレンチを主体とする発掘であり、確認された竪穴住居跡は本地点例にもまして部分的であることから、北側と南側のそれ

ぞれ重複する2軒の竪穴住居跡が同一住居の北側と南側を構成するものであったのかどうか、判断の難しい面もあるが、39次調査の2軒と本調査の2号竪穴住居跡は軸方向を北西に傾けている点でも共通している。1区の西側に広がる第26次調査地点では2005年の調査で7世紀末葉～8世紀初頭の竪穴住居跡が多数検出されており、那賀郡衙周辺寺院および那賀郡衙の造営に伴う集落としての性格が推測されている。少なくとも2号竪穴住居跡は同様の性格を有していた蓋然性はきわめて高い。

1・2号竪穴住居跡に先行する1号掘立柱建物跡は1基のみの検出であるが、口径120cm、深さ75cmを測る大形ピットであり、平面は隅丸方形、断面は筒状を呈する。全体の規模や構造は不明であるが、本地点北側の第39次調査地点や第36次調査地点、第8次調査地点、西側の第26次調査地点では正倉の可能性などが想定される7世紀末葉～8世紀前葉の大型掘立柱建物跡が少なからず検出されており、本ピットも同様の掘立柱建物跡の一部であった可能性が高い。さらに、1号掘立柱建物跡の南側、3号竪穴住居跡の下部から検出された2号掘立柱建物跡についても同様の性格が指摘できる。本例も1基のみの確認であるが、平面隅丸方形ないし長方形を呈する口径80cm以上の大形のピットであり、9世紀前葉以前という時間的位置も正倉の可能性を想定させる。

当該期でもっとも新しい位置を占めるのが平安時代の所産と考えられる3号竪穴住居跡と1号版築遺構である。3号竪穴住居跡も部分的な調査であり、不明な点が多いが、一辺4～5m以上を測る1・2号竪穴住居跡に比べると、いずれも3m台と小形であり、軸方向をほぼ北に向けている点は注意される。3号竪穴住居跡では須恵器片55点、土師器片41点、軒丸瓦2点、平瓦12点が出土しており、特に瓦類の多くはカマド構築材として利用されていた。

1号版築遺構は一辺15m以上、深さ0.6～1.2mの方形ないし長方形の掘り込み内より版築状を呈する埋設土が検出されたものであり、軸方向を北西に傾けた版築の上・中・下層からは縄文土器6点、弥生土器8点をはじめとして、須恵器167点、土師器1,685点、平瓦1点、丸瓦1点、釘3点、鉄滓17点、礫80点という多くの遺物が出土している。須恵器や土師器は7世紀後葉を中心に8世紀前葉が含まれることから、遅くとも奈良時代前葉には現在みられるような姿を整えていたことは明らかであり、その性格も正倉などの建物建立のための掘り込み地業跡であった可能性が高い。ただし、確認されたのは版築遺構のごく一部であり、調査部分からは礎石の据え付け痕跡も未検出に終わったことから、本遺構の全容の解明は今後に残された課題の一つである。

3 奈良・平安時代

古代以降の所産と思われる遺構として1号溝、1号柵列、1号ピット列が検出されている。覆土の状態、1号版築遺構の上面を切るように構築された1号溝や1号柵列のあり方、1号版築遺構上面出土の9世紀と考えられる須恵器・羽釜2点の存在などを考慮すると奈良・平安時代を中心とする時期の所産であった可能性が高い。隣接する第39次調査地点において奈良時代後葉～平安時代の溝や柵列と思われる土坑群が検出されていることも以上の可能性を裏付けるものといえるが、各遺構ともごく一部が確認されただけであり、時期を特定できるような遺物の出土もみられなかったことから、正確な時期の解明は今後の課題である。

第39次調査地点では柵列は同時期の6号溝と並行するように走っているが、本地点の柵列につい

ては、1号版築遺構の北側を斜行するようにほぼ東西に延びること、土坑状の掘り込みを結ぶように布掘り状の掘り込みが続くことなどを除くと、不明な点が多い。1号ピット列についても1・2号掘立柱建物跡より小形の掘立柱建物跡であった可能性を指摘することができるが、現状ではあくまでも推測の域にとどまる。

注目されるのは上幅3.0 m以上、底幅0.7～1.2 m、深さ1.8 mを測る1号溝である。同様の大形の溝は前述した第39次調査地点6号溝において確認されており、通常の一般集落に伴う例とは異なる姿から官衙施設を圍繞する溝であった可能性が想定されている。本地点1号溝の性格を考える上からも看過できない資料であるが、近隣では中世に属する大形の溝も確認されているようであり、調査がごく一部にとどまっている現状では1号溝が中世まで下る可能性についても決して否定できないことを指摘しておきたい。

こうした諸制約はあるものの、先行する1号版築遺構の分布にとりわけ象徴されるように、7世紀後葉以降の本地点一帯が那賀郡衙の官衙域としての重要な機能と場を担っていたことはすでに明らかである。時間的には7世紀後葉～8世紀前葉例が中心となるが、寺院あるいは官衙に関連した遺物と思われる特徴的な須恵器高台付坏や高坏、大小多量の精緻な作りの須恵器蓋、湖西窯跡群産が推定される須恵器、漆塗り土師器坏、転用硯などの出土も、本地点を舞台にした特異な土地利用の一端をうかがわせる具体的な資料であったとあってよい。「中寺」とも「仲寺」とも読めるヘラ書きが残された3号竪穴住居跡出土軒丸瓦のように、「那賀」を「中」や「仲」と記した墨書土器や文字瓦は第39次調査地点などでも多数確認されている。

4 中・近世

瀬戸・美濃系陶器塚の細片が1点出土している。表面採集されたものであり、正確な時期などは不明である。前述の1号溝については当該期の所産であった可能性が残されたとしても、溝1条、井戸跡2基、土坑1基、ピット群に加えて陶磁器、瓦質土器、砥石などが検出された第39次調査地点に比べると、両地点の差はきわめて大きいとあってよい。

(折原)

引用・参考文献

- 浅井哲也 1991 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅰ）」（『研究ノート』1号 財団法人茨城県教育財団）
- 1992 「茨城県内における奈良・平安時代の土器（Ⅱ）」（『研究ノート』2号 財団法人茨城県教育財団）
- 伊藤廉倫 1994 『茨城県水戸市 堀遺跡一住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告一』水戸市教育委員会
- 井上義安編 1992 『水戸市アラヤ遺跡 北部地区老人福祉センター・デイサービスセンター建設に伴う文化財の調査報告書』水戸市アラヤ遺跡発掘調査会
- 井上義安・仁平妙子・千葉隆司
・榎村宣行・石崎洋子・栗原芳子
・会沢 仁 1995 『水戸市堀遺跡』堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 水戸市堀遺跡調査会
- 井上義安・千葉隆司 1995 『水戸市台渡里廃寺跡 都市計画道路3・6・30号線埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市台渡里廃寺跡発掘調査会
- 井上義安・千葉隆司・榎村宣行 1995 『水戸市堀遺跡 堀町住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市堀遺跡発掘調査会
- 井上義安・栗原芳子 1996 『水戸市台渡里遺跡 共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』水戸市教育委員会・空間計画工房
- 井上義安・蓼沼香未由・仁平妙子
・根本睦子 1998 『水戸市埋蔵文化財分布調査報告書 平成10年度版』水戸市教育委員会
- 江幡良夫・吹野富美夫 1998 「水戸市軍民坂遺跡出土の搔器」『常総台地』第14号 常総台地研究会
- 大森信英 1952 「渡里村大字渡里字アラヤ遺蹟予備調査に於ける報告」『茨城高等学校史学部紀要』第一号 茨城高等学校史学部
- 小川和博・大淵敦志・川口武彦
・木本挙周・渥美賢吾・関口慶久
・株式会社京都科学 2008 『大串遺跡（第7地点）-介護老人保健施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会
- 榎村宣行 1993 『(仮称)水戸浄水場予定地内埋蔵文化財調査報告書 白石遺跡』財団法人茨城県教育財団
- 川口武彦・小松崎博一・新垣清貴編 2005 『台渡里廃寺跡一範囲確認調査報告書一』水戸市教育委員会
- 川口武彦・渥美賢吾・木本挙周 2009 『台渡里1一平成18年度長者山地区範囲確認調査概報一』水戸市教育委員会
- 川口武彦・色川順子・関口慶久
・新垣清貴 2009 『平成18年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告 第22集 水戸市教育委員会
- 川口武彦・色川順子・関口慶久
・渥美賢吾・木本挙周・新垣清貴 2010 『平成19年度水戸市内遺跡発掘調査報告書』水戸市埋蔵文化財調査報告 第35集 水戸市教育委員会
- 古代生産史研究会シンポジウム事務局 1997 『古代生産史研究会 '97シンポジウム 東国の須恵器一関東地方における歴史時代須恵器の系譜一』古代生産史研究会
- 佐々木義則 2001 「茨城県における8・9世紀の須恵器概観」(『婆良岐考古』23 婆良岐考古同人会)
- 佐々木藤雄・大橋 生・川口武彦
・林 邦雄・渥美賢吾 2006 『台渡里廃寺跡 一市道常磐17号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)一』水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・川口武彦・関口慶久
・新垣清貴・渥美賢吾・木本挙周
・林 邦雄・小野麻人・市瀬俊一
・大橋 生 2007 『アラヤ遺跡(第2地点)一市道常磐10号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市埋蔵文化財調査報告第12集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・林 邦雄・川口武彦
・関口慶久 2008 『台渡里遺跡(第39次調査)一公共下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市埋蔵文化財調査報告第15集 水戸市教育委員会
- 佐々木藤雄・林 邦雄・川口武彦
・渥美賢吾・関口慶久 2008 『渡里町遺跡(第5地点)一市道常磐31号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 水戸市教育委員会
- 蓼沼香未由・川口武彦・池田敏宏・
瓦吹 堅・黒澤彰哉・渥美賢吾 2004 『台渡里廃寺跡一集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』水戸市教育委員会

写 真 图 版



調査区全景（北より）



調査区全景（南より）

図版2



1号テストピット東壁（西より）



1・2号竪穴住居跡（南より）



1・2号竪穴住居跡（西より）



3号竪穴住居跡遺物出土状況（東より）



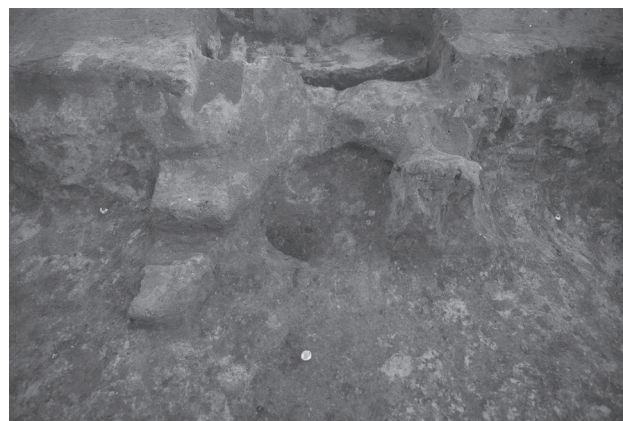
3号竪穴住居跡遺物出土状況（西より）



3号竪穴住居跡（東より）



3号竪穴住居跡（南より）



3号竪穴住居跡カマド（西より）



4号竪穴住居跡遺物出土状況（東より）



4号竪穴住居跡（東より）

図版4



1号掘立柱建物跡（南より）



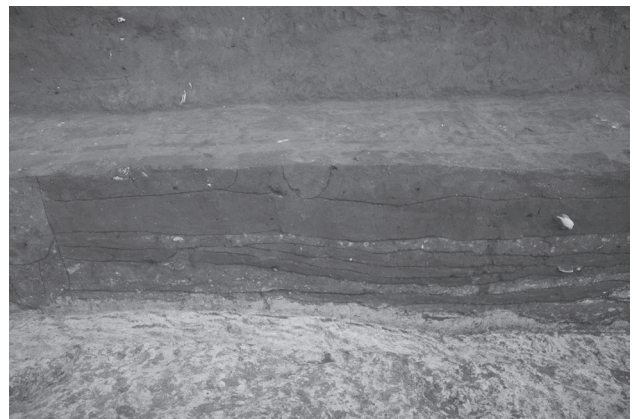
2号掘立柱建物跡（東より）



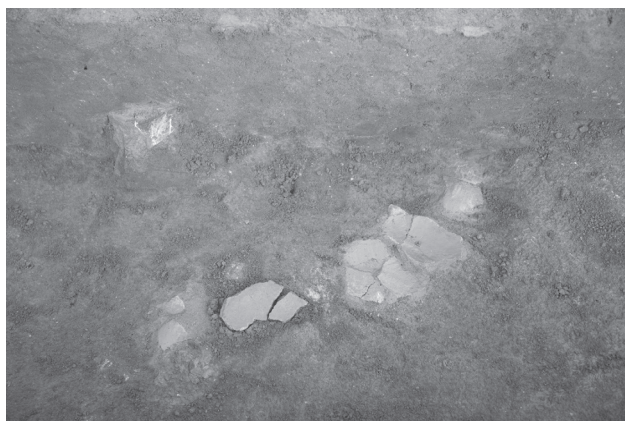
1号版築遺構（南より）



1号版築遺構（北西より）



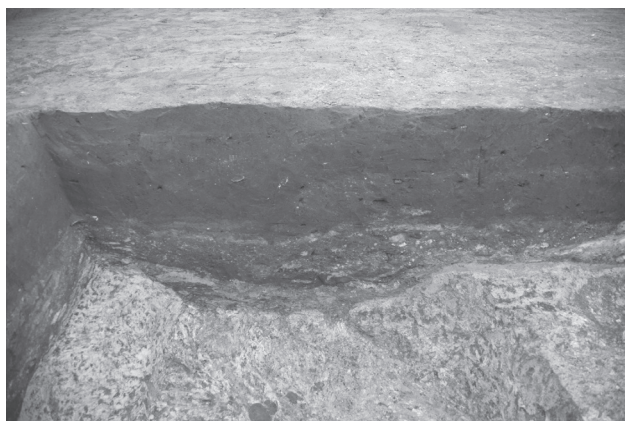
1号版築遺構セクション（西より）



1号版築遺構遺物出土状況（西より）



1号版築遺構遺物出土状況（西より）



1号溝（北より）



1号柵列（東より）



1号柵列（南より）



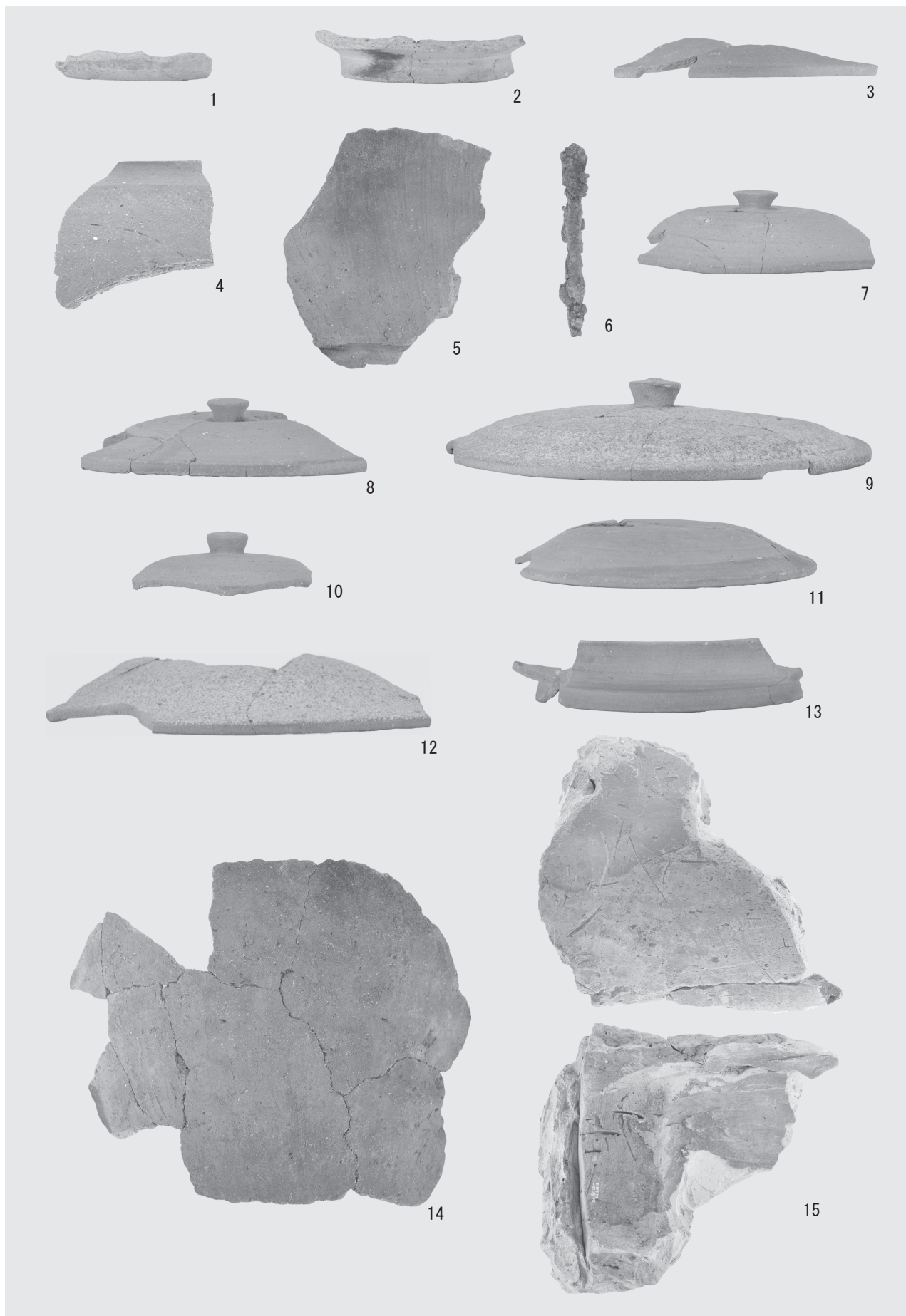
1号ピット列（南東より）



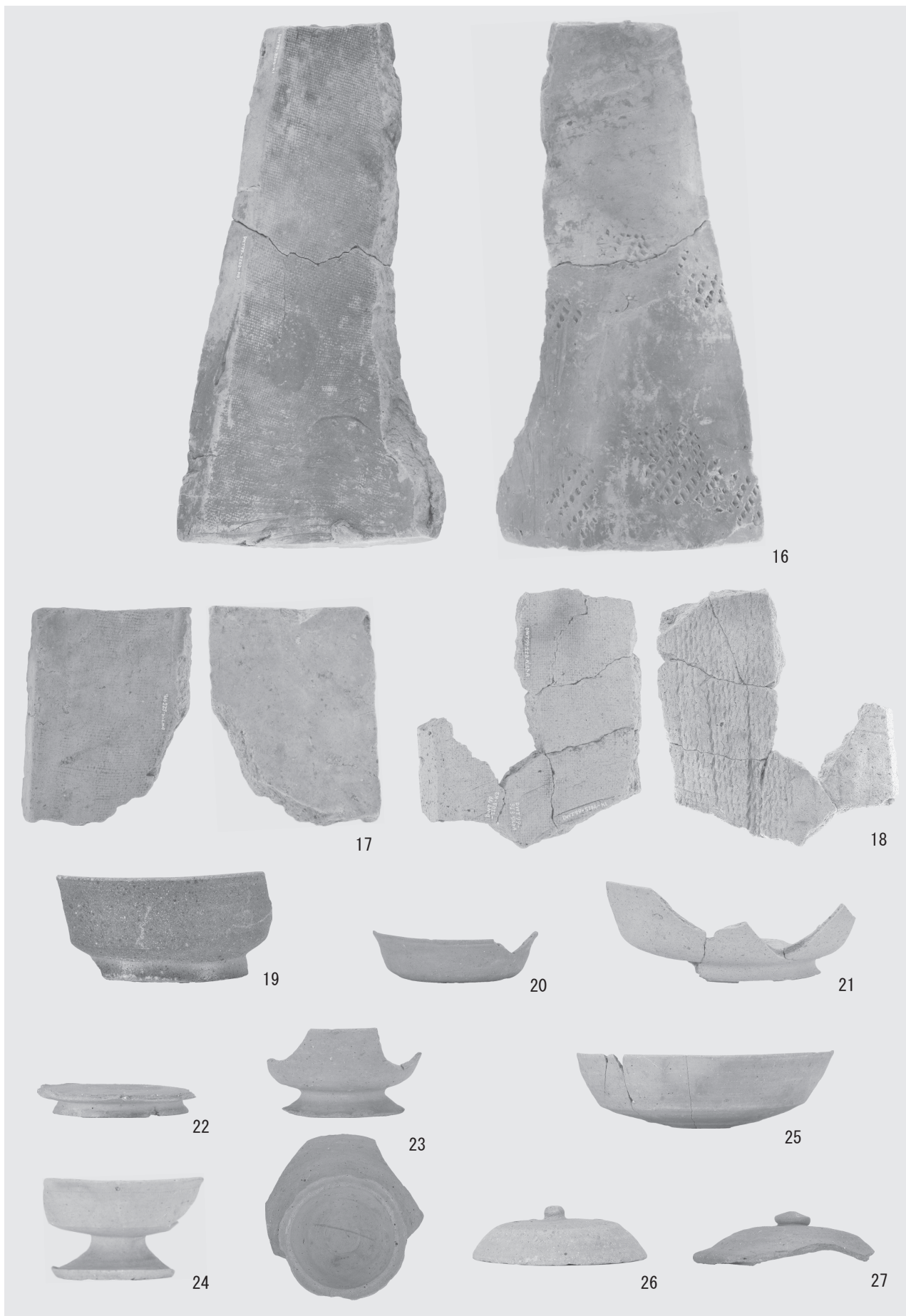
1号拡張区（南より）



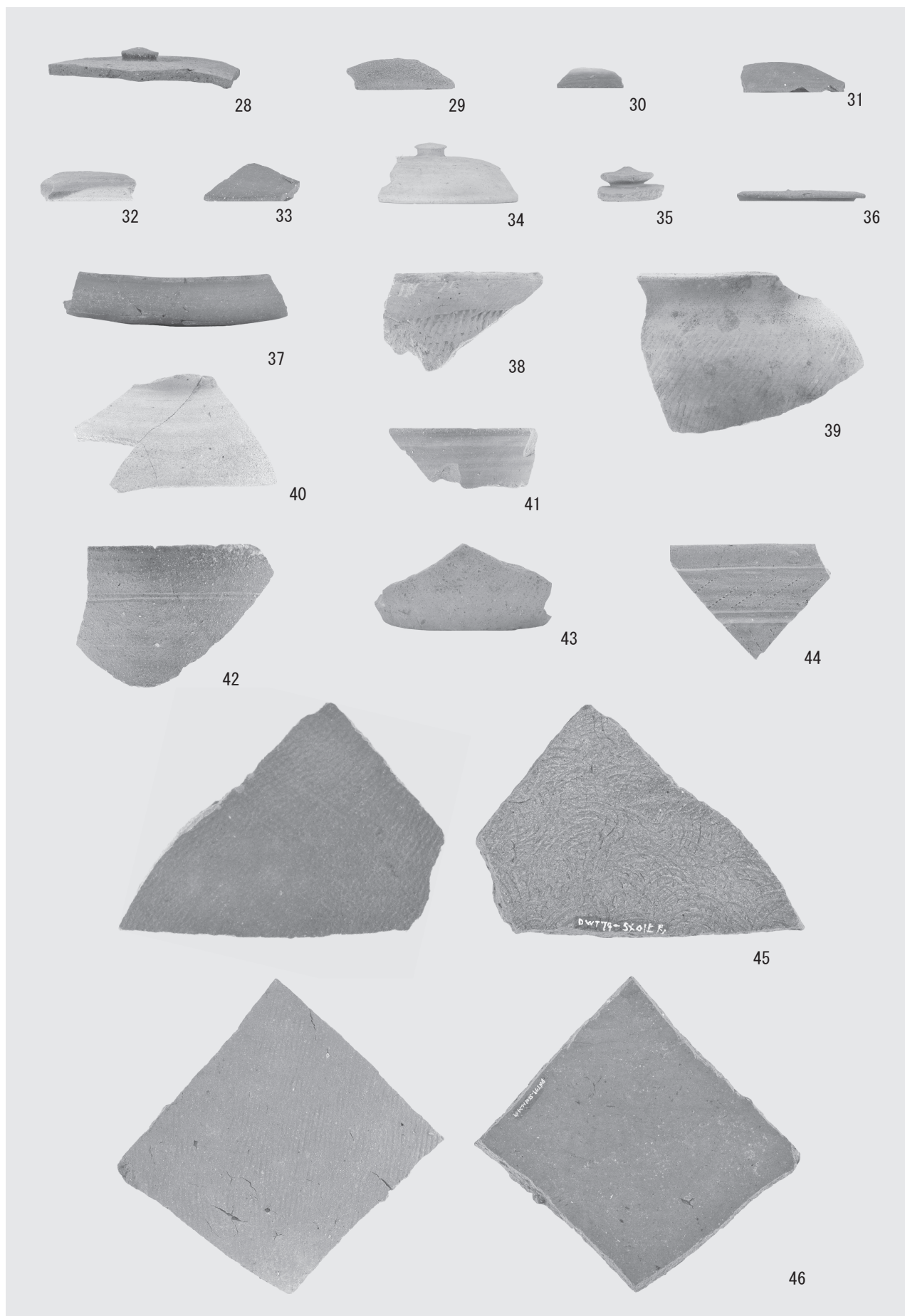
2号拡張区（西より）

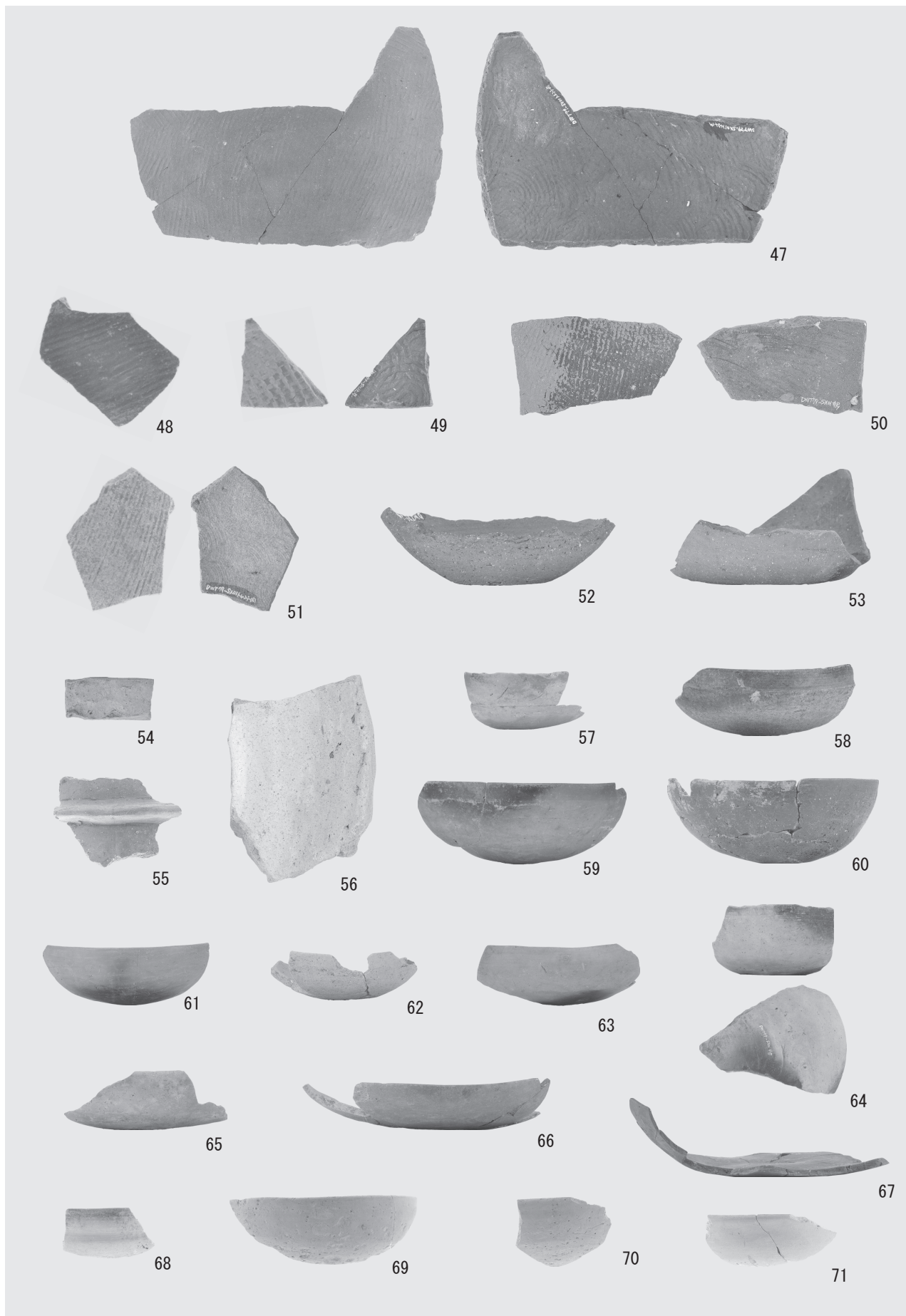


出土遺物 (1)

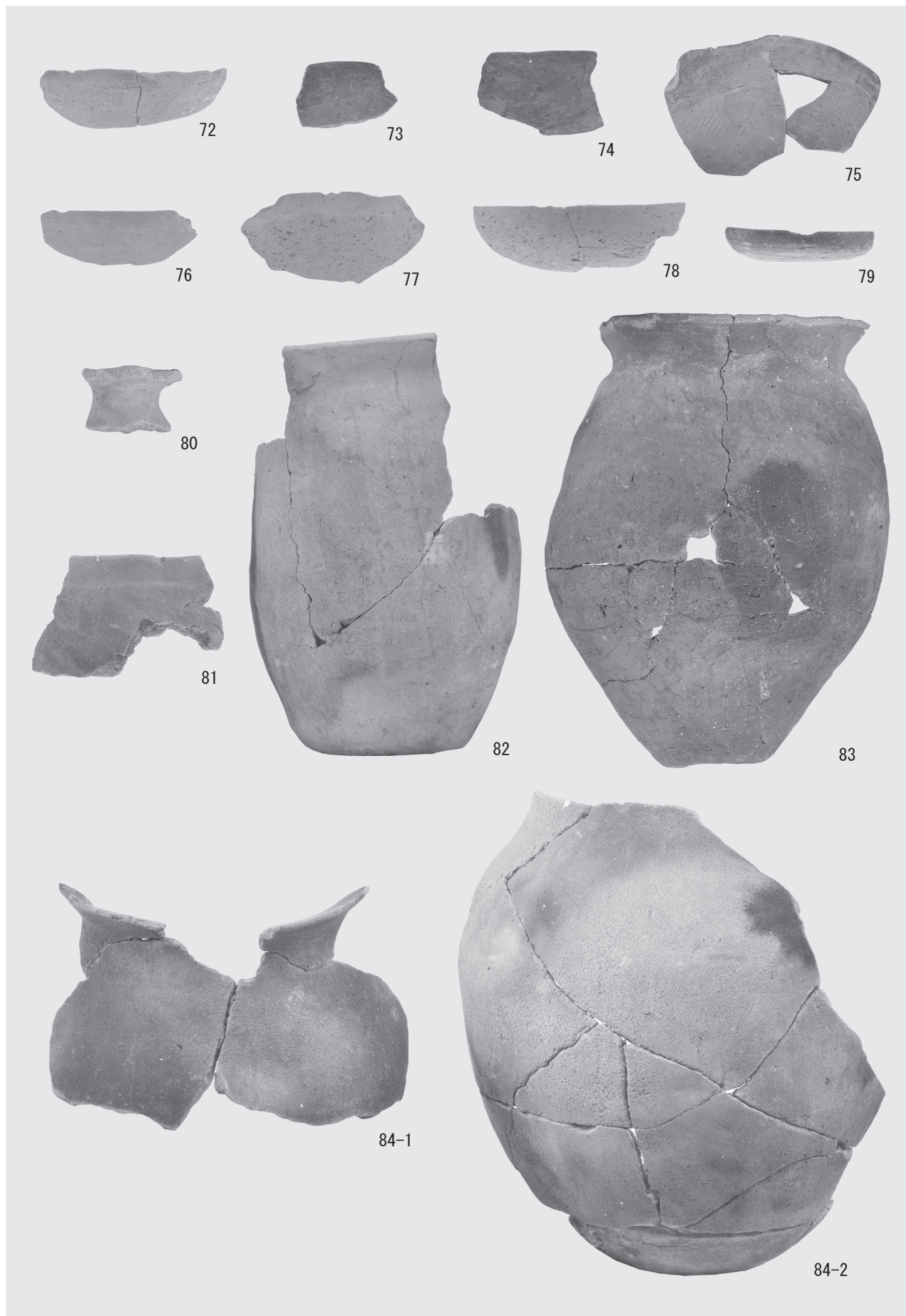


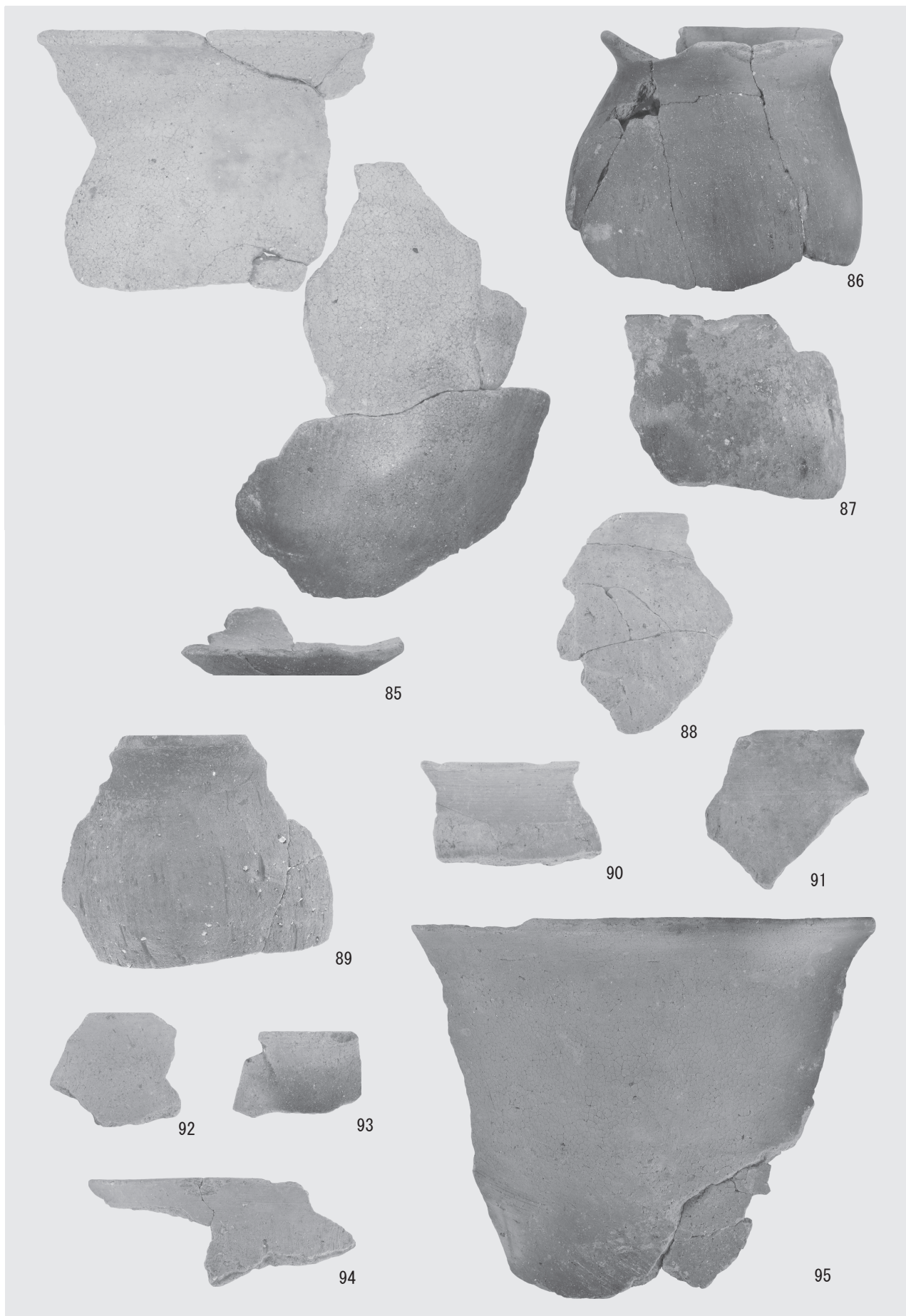
出土遺物 (2)



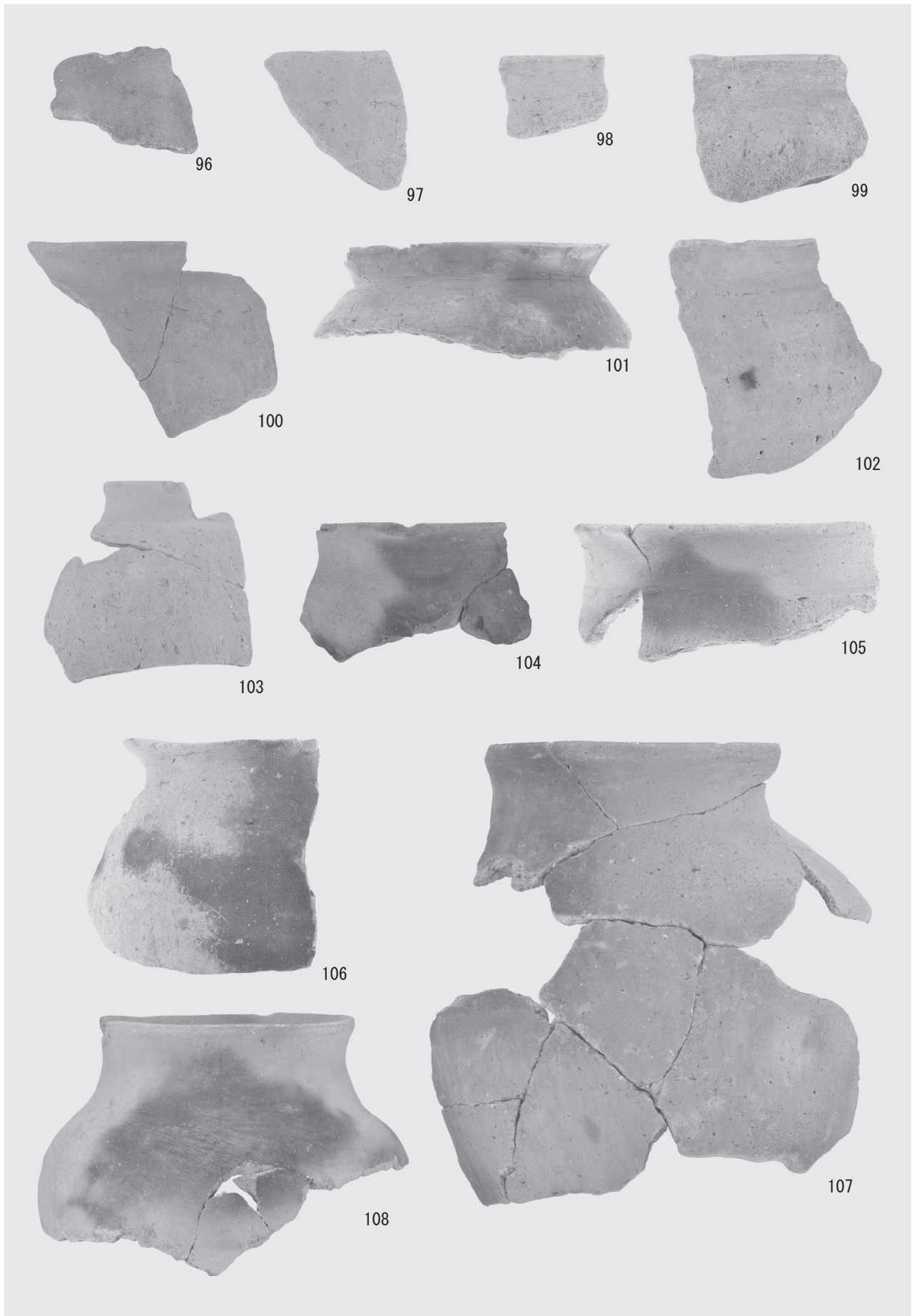


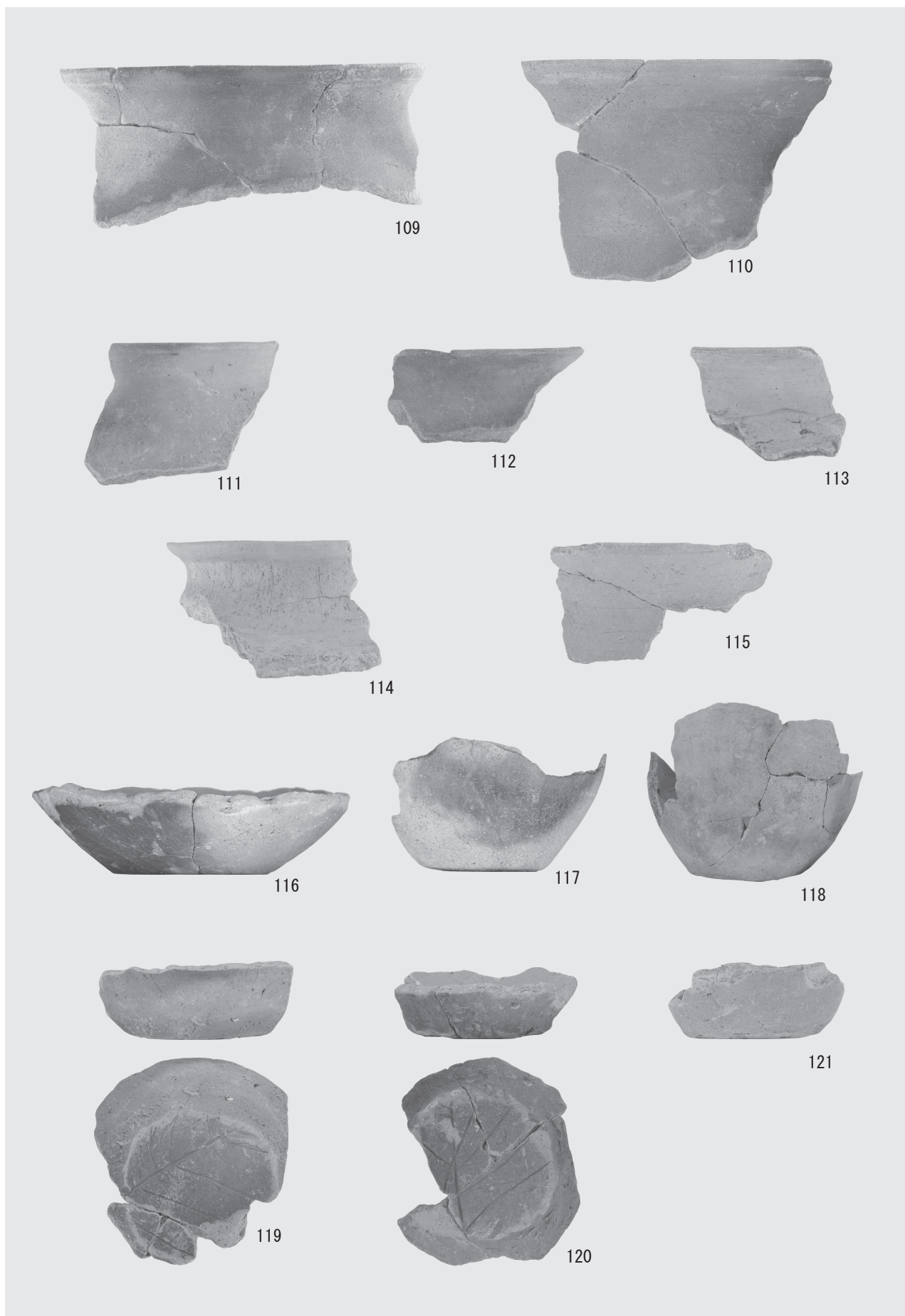
出土遺物 (4)



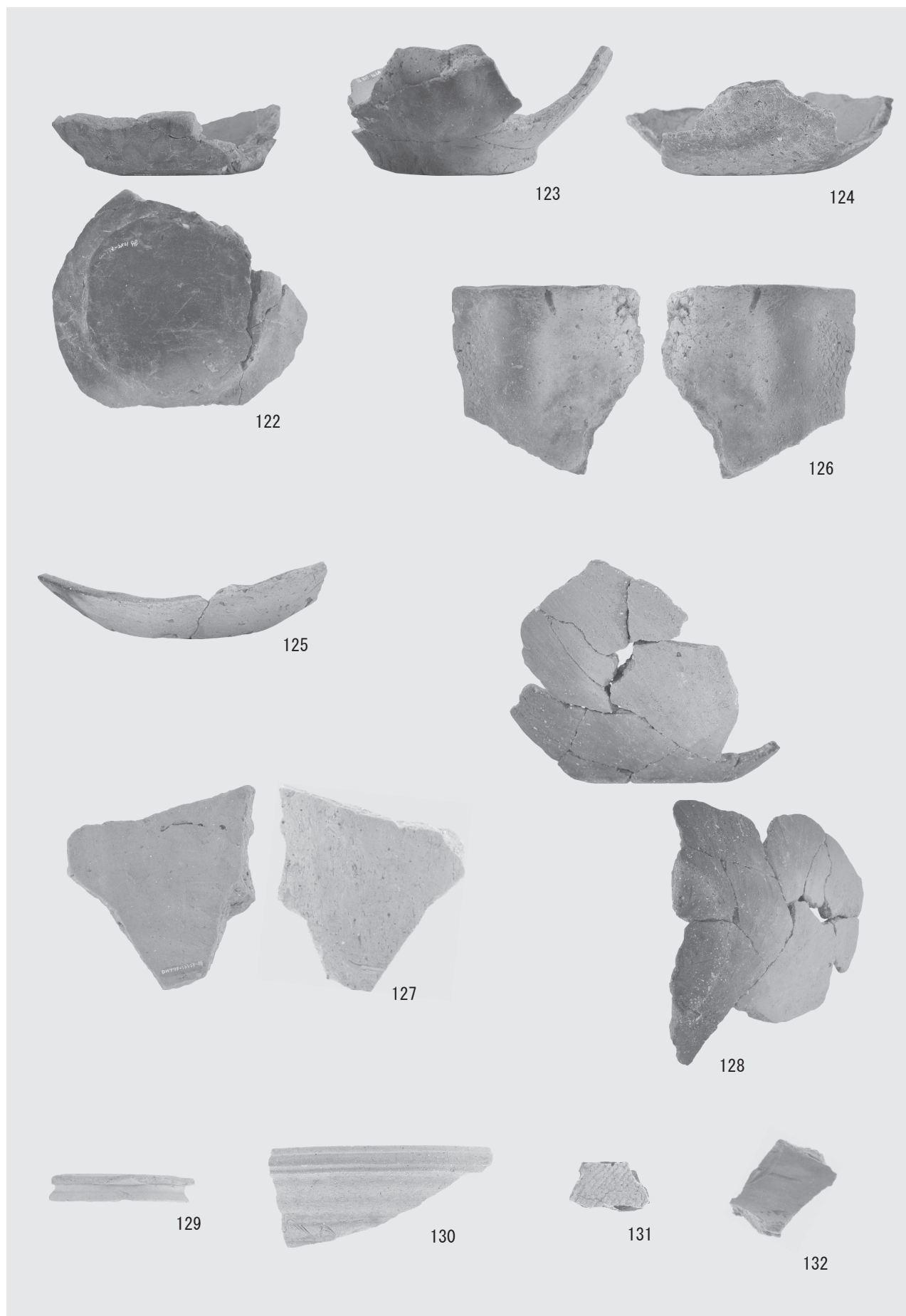


出土遺物 (6)





出土遺物 (8)



出土遺物 (9)

報 告 書 抄 録

ふりがな	だいわたりにじゅうに							
書名	台渡里 22							
副書名	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第 79 次）							
シリーズ名	水戸市埋蔵文化財調査報告第 117 集							
編集者名	折原 覚							
著者名	川口武彦・渥美堅吾・折原 覚							
編集機関	水戸市教育委員会							
所在地	〒 310-8610 茨城県水戸市中央 1-4-1 ☎ 029-224-1111							
発行年月日	2011（平成 23）年 12 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。' "	。' "			
だいわたりかんがいせき 台渡里官衛遺跡	みとしわたりちようあぎまえ 水戸市渡里町字前 はら 原 2867 番地	08201	98	36° 24' 17"	140° 26' 15"	2011.1.20 ～ 2011.2.5	288.9 m ²	宅地造成工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
台渡里官衛 遺跡	集落跡 官衛跡	縄文時代	なし	土器		縄文土器は早・中・後期土器などが含まれるが、型式を特定できるものはない。弥生土器も細片が多く、型式は不明である。本地点において土地利用がもっとも盛んであったのは古墳時代末葉～奈良時代前葉であり、竪穴住居跡 4 軒、掘立柱建物跡 2 棟、版築遺構 1 箇所、およびそれらに伴う多数の遺物の出土が確認されている。竪穴住居跡の時期はやや時間幅をもつが、軸方向を北西に向けるという共通性を有しており、近隣の同時期の住居群のあり方からみても那賀郡衛周辺寺院および那賀郡衛の造営に伴う集落として存在していた可能性が高い。掘立柱建物跡は 1・2 号住居跡および 3 号住居跡の下面よりごく一部が検出されたものであるが、掘方が 1 m 前後を測る大形例であり、同じく近隣の大形掘立柱建物跡例からみて正倉を構成していた可能性が高い。版築遺構も一部が確認されただけであるが、住居跡同様、北西に軸方向を向けており、正倉などの建物建立のための掘り込み地業跡であった可能性が考えられる。「中寺」とも「仲寺」とも読めるヘラ書きが残された軒丸瓦をはじめとして、寺院や官衛に関連した遺物と思われる特徴的な遺物の出土も本地点を舞台にした土地利用の特異さを物語る資料といえる。続く奈良・平安時代の遺構としては版築遺構の上面を切る大形の溝と柵列、およびピット列などにその可能性を指摘することができるが、この時代の遺物はきわめて少なく、正確な時期は不明である。なお、前出の大形の溝については中世の所産であった可能性も残されるが、部分的な調査のため、現状では推測の域を出ない。当該期の遺物として瀬戸・美濃系陶器碗が出土しているが、細片であり、時期は不明瞭である。		
		弥生時代	なし	土器				
		古墳時代末葉 ～ 奈良時代前葉	竪穴住居跡 4 掘立柱建物跡 2 版築遺構 1	須恵器 灰釉陶器 土師器 瓦 金属製品				
		奈良時代 ～ 平安時代	溝 1 柵列 1 ピット列 1	須恵器 瓦				
		中世～近世	なし	陶器				

項目	遺物の取り扱い
水洗い	・すべて行った。
注記	・手書きによる。 例) DWT79SII-P1 のように注記した。
接合	・接合は必要に応じて最小限行った。
実測	・遺物実測図は報告書掲載分についてのみ作成した。
台帳	・遺物台帳、図面台帳、写真台帳があり、検索が可能ないように作成している。合計 1 冊（綴り）。
遺物保管方法	・出土遺物は、報告書使用と未使用に分け、遺物収納箱に納めた。各箱には収納内容を明記している。なお、未使用分については種別毎に分類、収納してある。

水戸市埋蔵文化財調査報告第117集

台渡里 22

— 宅地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（台渡里第79次） —

印刷 平成23年12月28日

発行 平成23年12月28日

編集 株式会社東京航業研究所

発行 水戸市教育委員会

印刷 関東図書株式会社

〒336-0021

埼玉県さいたま市南区別所3-1-10

TEL 048-862-2901